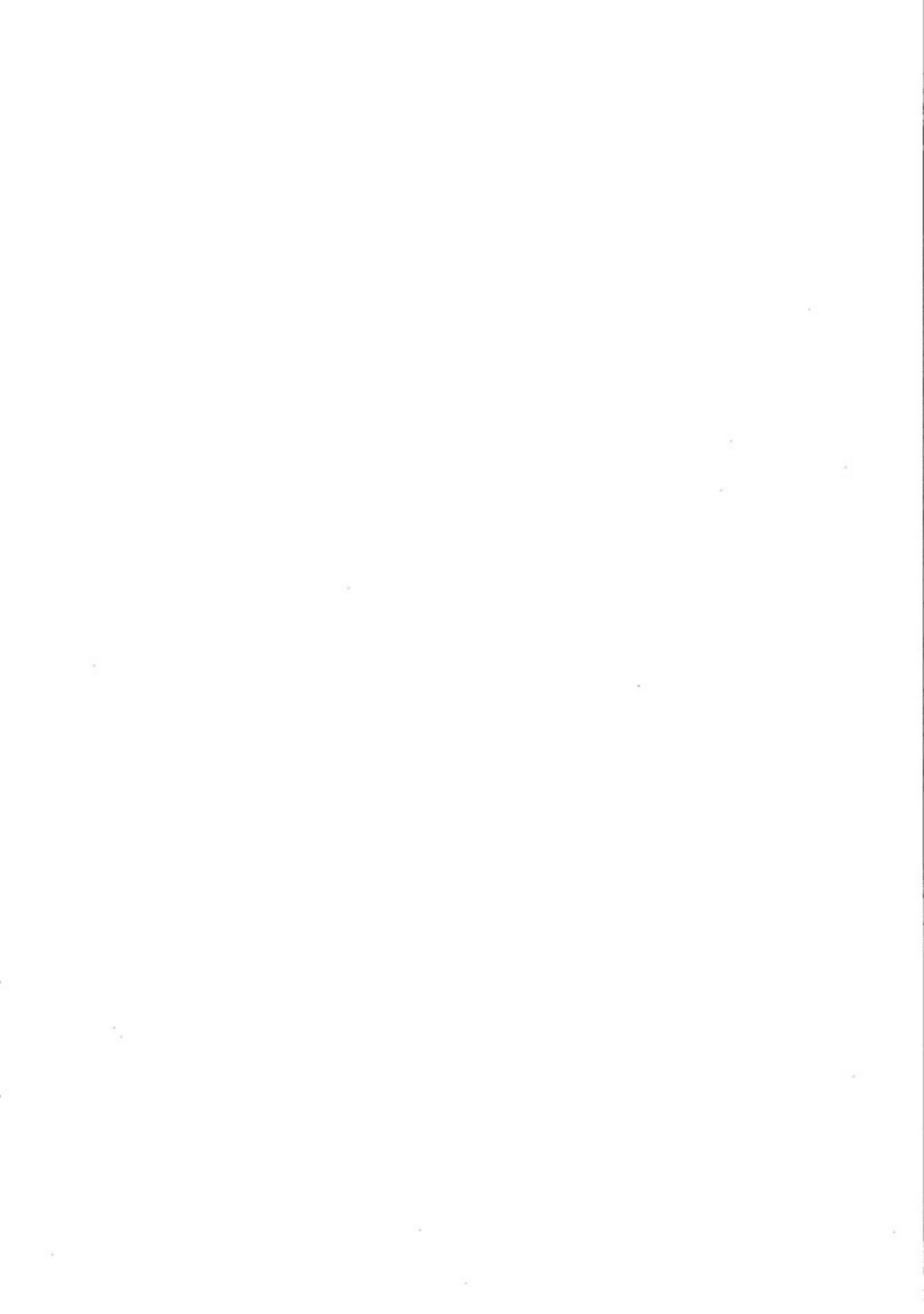


財團法人八尾市文化財調査研究会報告73

- I 恩智遺跡（第10次調査）
- II 亀井遺跡（第12次調査）
- III 中田遺跡（第47次調査）
- IV 中田遺跡（第48次調査）
- V 中田遺跡（第49次調査）
- VI 東弓削遺跡（第12次調査）

2002年



# 財團法人八尾市文化財調査研究会報告73

- I 恩智遺跡（第10次調査）
- II 亀井遺跡（第12次調査）
- III 中田遺跡（第47次調査）
- IV 中田遺跡（第48次調査）
- V 中田遺跡（第49次調査）
- VI 東弓削遺跡（第12次調査）

2002年

財團法人 八尾市文化財調査研究会

## はしがき

八尾市は、大阪府の中央部東寄りに位置し、西は上町台地、東は生駒山地、南は羽曳野丘陵に囲まれた山麓部と河内平野に立地します。山麓部では縄文時代以降、平野部では弥生時代以降の集落跡が多数みつかっております。とくに八尾市域の大部分を占めます河内平野は、かつての古大和川の度重なる洪水や氾濫によって形成された肥沃な土壤を有する沖積地であります。現在、この河内平野の中には、先人達が築いてきた遺跡が数多く眠っています。

八尾市では、こういった、かけがえのない文化遺産を後世の子孫達に永く伝えかつて守っていくため、市民憲章の中に「文化財を大切にしましょう」の一項が掲げられています。しかしその一方で、開発工事によって多くの文化遺産が日々失われていることも事実です。そこで私共は、破壊され消滅する埋蔵文化財に対し、事業者の御理解と御協力を仰ぎ、事前に発掘調査を行い、記録・整理・保存そして研究に努め、その成果を社会に還元していくことが責務であると考えています。

この度、平成13年度に実施しました6件の公共下水道工事に伴う発掘調査が完了し、報告書として刊行する運びとなりました。調査は、下水管埋設部分あるいは立坑部分という限定された範囲ではありますが、弥生時代中期～近代に至るまでの貴重な遺構および遺物を検出することができました。本書が地域史解明の一助、さらには埋蔵文化財を再認識していただける資料となれば幸いです。

最後になりましたが、八尾市下水道建設室をはじめ多くの関係諸機関および地元の皆様方に、多大な御協力をいただきましたことを心から厚く御礼申し上げます。

平成14年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会  
理事長 木山丈司

# 序

1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成13年度に実施した発掘調査の成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成14年3月をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記のとおりである。
  1. 本書に収録した各調査報告の文責は、Iが岡田清一、IIが樋口 薫・金親満夫、IIIが森本めぐみ、IVが酒 真、V・VIが成海佳子で、全体の構成・編集は岡田が行った。
  1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の1（平成8年7月縮図）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成13年度版）をもとに作成した。
  1. 本書で用いた高さの基準は東京湾の標準潮位（T.P.）である。
  1. 本書で用いた方位は磁北及び国土地標（第VI系）の座標北を示している。
  1. 遺構は下記の略号で示した。  
土坑-SK 溝-SD 小穴-SP 落ち込み-SO 石積み集積-SW 自然河川-NR
1. 遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。  
弥生土器・土師器・瓦器・埴輪・瓦-白・須恵器・陶磁器-黒・石製品・木製品-斜線
1. 土色については、『新版 標準土色帖』1996 農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
1. 各調査に際しては、写真・実測図のほかにカラースライドも多数作成している。市民の方々に広く利用されることを希望する。

# 目 次

## はしがき

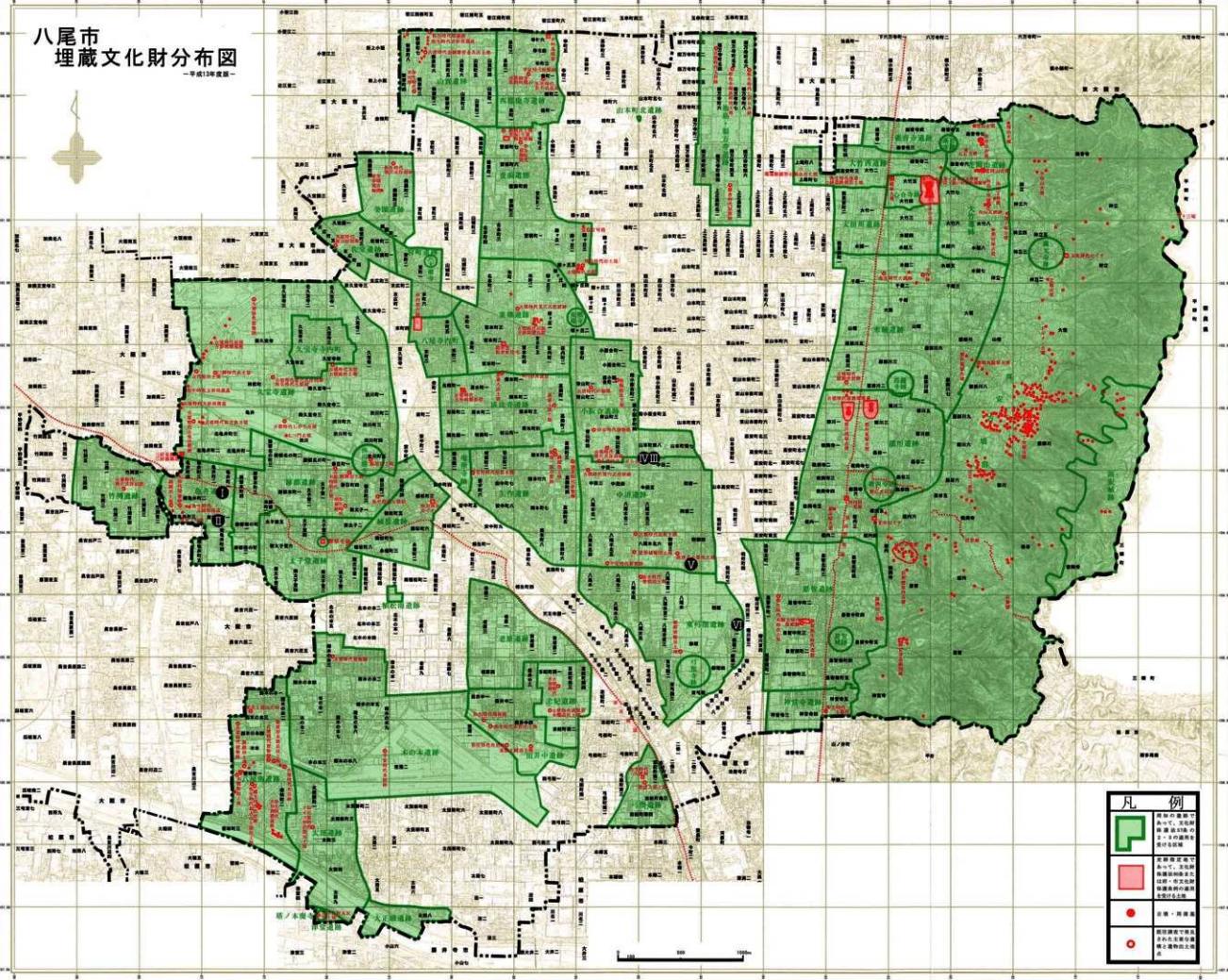
## 序

## 八尾市埋蔵文化財分布図

I 恩智遺跡 第10次調査(OJ2001-10)	1
II 亀井遺跡 第12次調査(KM2001-12)	11
III 中田遺跡 第47次調査(NT2001-47)	19
IV 中田遺跡 第48次調査(NT2001-48)	29
V 中田遺跡 第49次調査(NT2001-49)	67
VI 東弓削遺跡 第12次調査(HY2001-12)	71

## 報告書抄録

八尾市  
埋蔵文化財分布図  
一平成15年度版



I 恩智遺跡第10次調査（O J 2001-10）

## 例 言

1. 本書は、大阪府八尾市恩智中町1丁目地内で実施した公共下水道工事（12-207工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する恩智遺跡第10次調査（OJ 2001-10）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教生文第106号 平成13年6月6日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成13年10月23日～11月1日（実働4日間）にかけて、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は約20.48m<sup>2</sup>を測る。なお、調査においては飯塚直世・國津れい子・多田一美・都築聰子が参加した。
1. 本文の執筆・編集は岡田が行った。

## 本 文 目 次

1.はじめに.....	1
2.調査概要.....	2
1) 調査の方法と経過.....	2
2) 基本層序.....	2
3) 検出遺構と出土遺物.....	5
3.まとめ.....	5

## I 恩智遺跡第10次調査(O J 2001-10)

## 1. はじめに

恩智遺跡は、八尾市南東部に位置する縄文時代～鎌倉時代に至る複合遺跡である。地理的には、生駒山地西麓に形成された扇状地から低地部にかけて広がる。現在の行政区画では、恩智北町1～4丁目、恩智中町1～5丁目、恩智南町1～5丁目の南北約1.2km・東西約1.0kmを測る。本遺跡の周辺には、北に郡川遺跡、南に神宮寺遺跡、さらに西には玉串川を挟んで東弓削遺跡が隣接する。

本遺跡は、大正6年(1917年)に恩智中町3丁目において京都帝国大学考古学研究室によってはじめて発掘調査された。その後、昭和14年(1939年)に大阪府による調査が実施され、恩智神社の



第1図 調査地周辺図および位置図(S=1/5000)

お旅所である「天王の森」を中心に広がる弥生時代の大規模な集落遺跡であることが判明した。以後、現在までに恩智川改修工事や下水道工事といった公共事業や住宅建設工事をはじめとする民間事業に伴い、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・瓜生堂遺跡調査会・当研究会によって多数の調査が実施されている。これらの調査の結果、縄文時代・弥生時代・古墳時代といった各時代の遺構・遺物が検出され、生駒山地西麓部における複合遺跡として貴重な成果を得ている。

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、公共下水道工事(12-207工区)に伴うもので、当研究会が本遺跡内で実施する第10次調査にあたる。調査対象は立坑部分で、規模は南北6.4m×東西3.2mの面積約20.48m<sup>2</sup>を測る。工事の掘削深度は現地表下約6.5m迄で、現地表下約0.4mを測る道路築造工事に伴う盛土および搅乱部分については重機のみで除去し、以下の堆積層は重機と人力を併用して掘削を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。

出土遺物量は全体でコンテナバット(40cm×60cm×20cm) 1箱分である。

### 2) 基本層序

調査の結果、現地表(T.P. +11.326m)から約0.4m間は、既述のように道路築造時における盛り土あるいは既存の水道・ガス管理設時の搅乱層が堆積する(第0層)。それより下では、弥生時代中期～中世の遺物を含む層厚約5.5mを測る埋没した旧河川と推定される厚い砂層を確認した。本層は、断面の観察から砂粒の大きさやラミナの方向、そして植物遺体の混入といった堆積状況から考えて、6層(第1層～第6層)に分層できる。

第0層：道路築造時の盛土および搅乱層によって構成される現代の堆積層である。層厚0.4mを測る。

第1層：10YR8/1灰白色細粒砂。層厚1.0～1.2m。全体的に水平ラミナを成す。弥生時代中期～中世の遺物を含む。

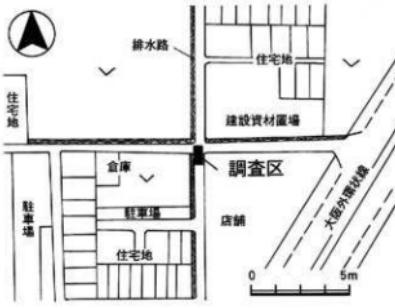
第2層：2.5Y8/4淡黄色細粒砂～中粒砂。層厚0.8～1.2m。下部で中粒砂へ移化する。トラフ型斜交ラミナを成す細礫が見られる。弥生時代中期の遺物を含む。

第3層：5Y8/1灰白色細砂混じり細粒砂。層厚1.0～1.5m。やや不明瞭なトラフ型斜交ラミナを成す。

第4層：N7/0灰白色細礫混じり中粒砂。層厚1.0m前後。部分的に、極細粒砂～細粒砂のラミナが見られる。植物遺体や流木片が挟在する。

第5層：5YR8/4淡橙色細礫混じり細粒砂。層厚1.0m前後。下位には、極細粒砂～細粒砂のラミナが見られる。

第6層：5B4/1暗青灰色粘土質シルト。層厚0.5m以上。上層では、シルト質細粒砂のラミナが



第2図 調査区位置図

見られる。本層上面が旧河川の河床にあたるものと推定される。

### 3) 検出遺構と出土遺物

今回の調査では、層厚約5.5mを測る非常に厚い旧河川の堆積層を確認したが、遺構は検出されなかった。

出土遺物に関しては、第2層から弥生時代中期、第1層から弥生時代前期～中世にそれぞれ比定される土器類および石器を検出した。そのなかで図示できたものは、第2層～壺6点(1～6)・甕5点(7～11)・高杯2点(12・13)・鉢1点(14)と石器4点(20～23)、第1層～弥生時代後期の壺1点(15)、古墳時代後期の須恵器杯蓋1点(16)、奈良時代の須恵器杯1点(17)と土器器杯1点(18)、平安時代末頃の瓦器椀1点(19)の総数23点を数える。以下、各遺物毎に記述する。

#### ・第2層出土遺物

【壺】1～4の広口壺のうち、1～3は垂下する口縁端部を有する。外面の装飾は、1・2が口縁端部と頸部に櫛描きによる簾状文・直線文、大型品である3の口縁端部には、径2～3mmの不規則な刺突円孔がそれぞれ施される。4は、上方に立ち上がる受け口状の口縁部を有するもので、外面は櫛描簾状文が施される。5・6はいずれも平底を呈する壺の底部で、内外面の摩滅が著しく調整は不明である。

【甕】7・8は、張りのある肩部から短く外反する口縁部を有する。7は小型品で、体部外面は河内型特有のミガキ調整が施される。8は、内外面ともに摩滅により調整不明。9は大型品で、垂下した口縁端部に刺突円孔が施される。内面はヨコ方向にミガキ調整される。10・11の底部の形態は、突出する10と平底を呈する11に分類される。

【高杯】12は、椀形の杯部から内側に肥厚する口縁端部を有し、外面には櫛描簾状文が施される。13は柱状部のみ残存で、外面はタテ方向のミガキ調整、内面は中空でシボリ目が見られる。

【鉢】14は、体部から短く屈曲する口縁部を有し、口縁端部はやや丸みをもつ。

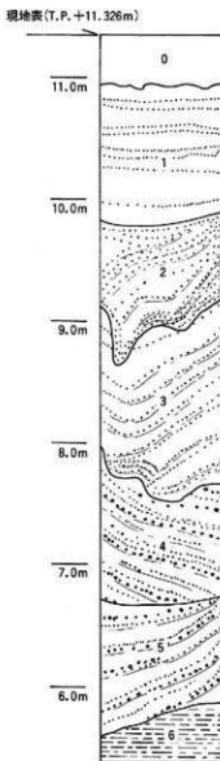
以上、第2層出土で図化し得た1～14の弥生土器は、すべて胎土中に角閃石・雲母を含む生駒西麓産で、弥生時代中期後葉(河内IV様式)に比定されるものである。

#### 【石器】(20～23)

全てサヌカイト製の剥片である。

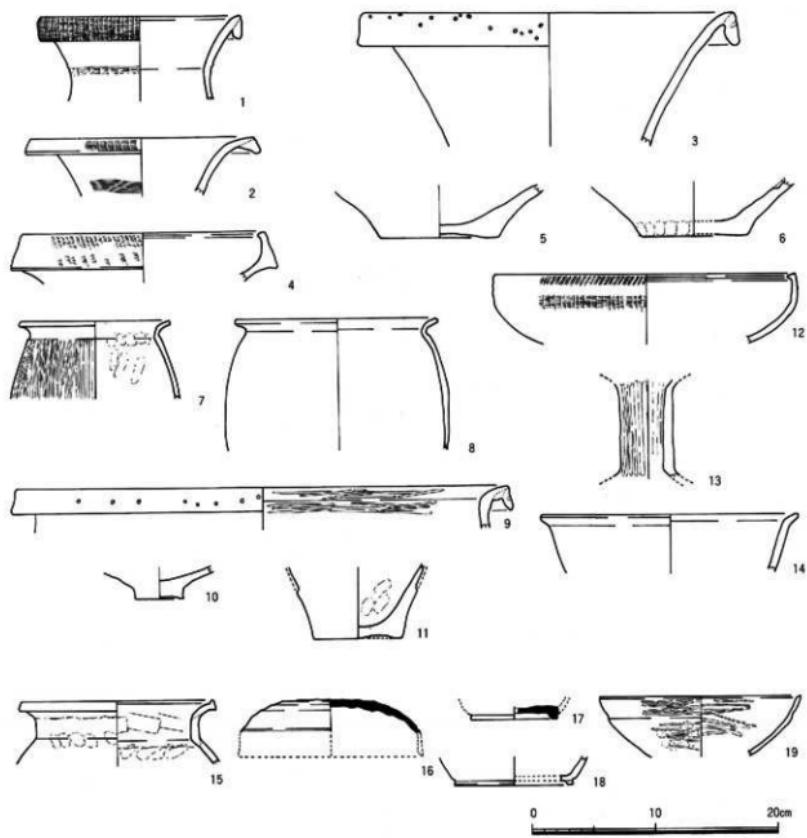
#### ・第1層出土遺物

15は弥生時代後期に比定される広口壺である。直立する頸部から外反する口縁部に至り、口縁

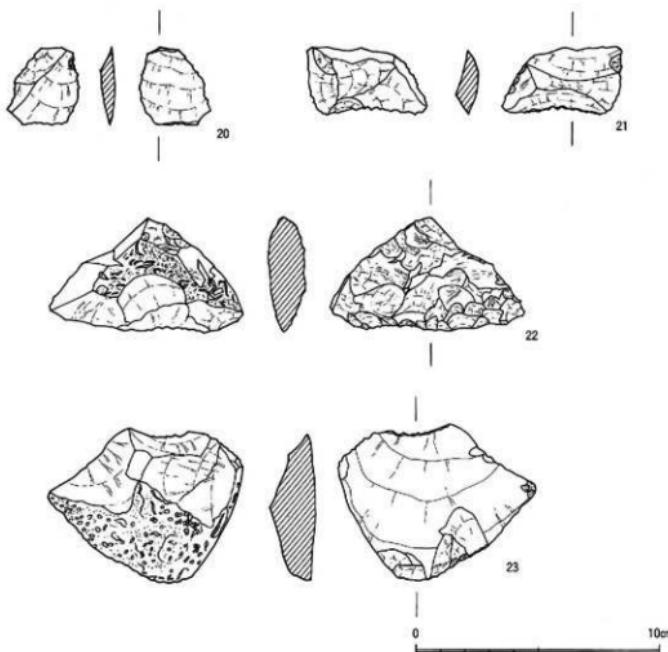


〔層序〕  
層0層：泥鉆等漬けの土  
層1層：SYB/4层白色麻柄砂～中粒砂  
層2層：2.5m/4层白色麻柄砂～中粒砂  
層3層：SYB/1层白色麻柄砂～中粒砂  
層4層：N7/2层白色麻柄砂～中粒砂  
層5層：SYB/6层褐色麻柄砂～中粒砂  
層6層：SYB/1层青灰土質シルト

第3図 地層模式図



第4図 出土遺物（土器）実測図（第2層-1~14、第1層-15~19）



第5図 出土遺物（石器）実測図（第2層）

端部を上方につまみ上げる。色調は橙色で、胎土中に長石・石英・チャート・赤色粒を多く含む。

16の須恵器杯蓋は天井部のみ残存するものであるが、天井部と体部との境目となる稜線が鈍いことや大型品であることからMT15～TK10型式に属するものと思われる。

17は須恵器、18は土師器の杯で、奈良時代の所産と思われる。

19の瓦器椀は、外面のミガキの簡略化や成形時のユビオサエの痕跡がみられることから、12世紀末頃に比定されるものであろう。

### 3.まとめ

今回の調査では、埋没河川の堆積層と考えられる層厚約5.5mを測る地層を確認するに至った。ここでこの河川を考えるにあたり、当地点に近接した既往の調査事例(第1図参照)をみると、東へ約130mのところで、昭和50～53年に瓜生堂遺跡調査会によって実施された恩智川河川改修工事に伴う調査がある。この調査は南北に約600mを測る細長いトレンチ調査で、恩智橋を境に北方と南方に分けられ、北方が今回の第10次調査に最も近い地点となる。この調査結果でも北方を見ると、弥生時代～古墳時代にかけての自然河道が5条程検出されており、さらに河道から農業用

の灌漑を目的に開墾されたと考えられる溝が数条検出されている。また、地点は少し離れるが、今回の調査区から南東へ約200mのところで、当研究会が実施した第1次調査(OJ85-1)がある。ここでは、中世における河川の氾濫によって堆積した砂層が検出されており、層内から中世の遺物とともに弥生時代中期(畿内第Ⅱ～Ⅲ様式)の遺物が検出されている。以上2件の調査で検出された河川は、時期的・位置的から勘案して、今回の調査で検出した河川と有機につながるものである。しかし、当地点においては少なくとも弥生時代中期～中世に相当する砂層の堆積状況から、長期に亘り河川であったことが窺える。今後周辺における調査の累積によって、本河川の規模が徐々に解明されるであろう。

#### 引用・参考文献

- ・鳥居龍藏 1917「石器時代遺跡調査(15)」大阪毎日新聞 大正6年8月12日付
- ・H代克己他 1980.10「第3章 第2節 III NE・NW24～65地区」「恩智遺跡II」瓜生堂遺跡調査会
- ・高萩千秋 1989「III 恩智遺跡(第1次調査)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 (財)八尾市文化財調査研究会報告23」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・寺沢 薫・森岡秀人編 1989「弥生土器の様式と編年－近畿編I－」(株)木耳社
- ・田辺昭三 1996「出土遺物の検討」「陶邑古窯址群I」平安学園考古学クラブ編
- ・古代の土器研究会編 1992「古代の土器I 都城の土器集成」
- ・尾上 火・森島康雄・近江俊秀 1995「6. 瓦器椀」「概説 中世の土器・陶磁器」中世土器研究会編 共同社



東壁南部／T.P. +9.0~10.0m間付近



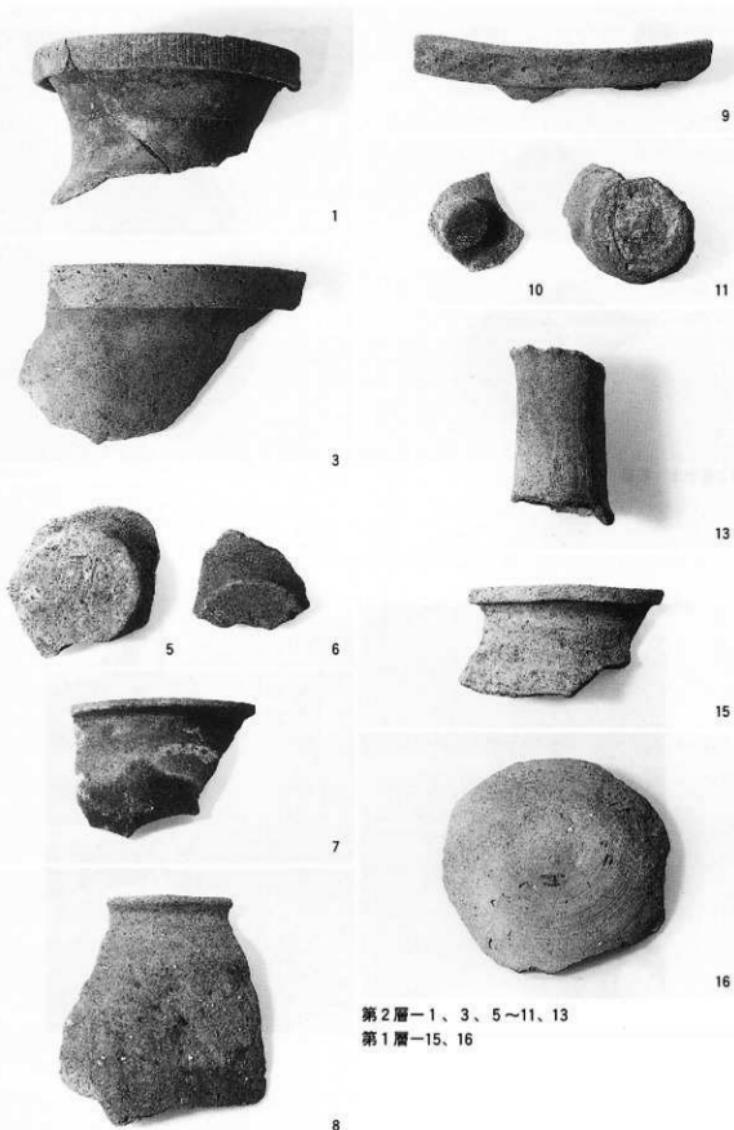
東壁／T.P. +6.0~7.0m間付近



最終掘削状況（北から）



人力と重機併用による掘削（北西から）



第2層-1、3、5~11、13  
第1層-15、16



第2層出土 石器



調査風景（北西から）

## II 亀井遺跡第12次調査（KM2001-12）

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市南龜井町1・4丁目地内で実施した公共下水道工事（平成12年度八尾排水区第39工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する龜井遺跡第12次（KM2001-12）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第406号 平成12年11月21日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成13年6月18日～21日（実働2日間）にかけて、樋口 薫、金親満夫を調査担当者として実施した。調査面積は約7.5m<sup>2</sup>である。
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し、平成13年8月31日に完了した。
1. 本書に関わる業務は、樋口と金親で行った。なお本文の文責は文末に記した。
1. 調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

## 本 文 目 次

1.はじめに.....	11
2.調査概要.....	13
1) 調査の方法と経過.....	13
2) 基本層序.....	14
3) 検出遺構と出土遺物.....	16
3.まとめ.....	16

## II 亀井遺跡第12次調査(KM2001-12)

### 1. はじめに

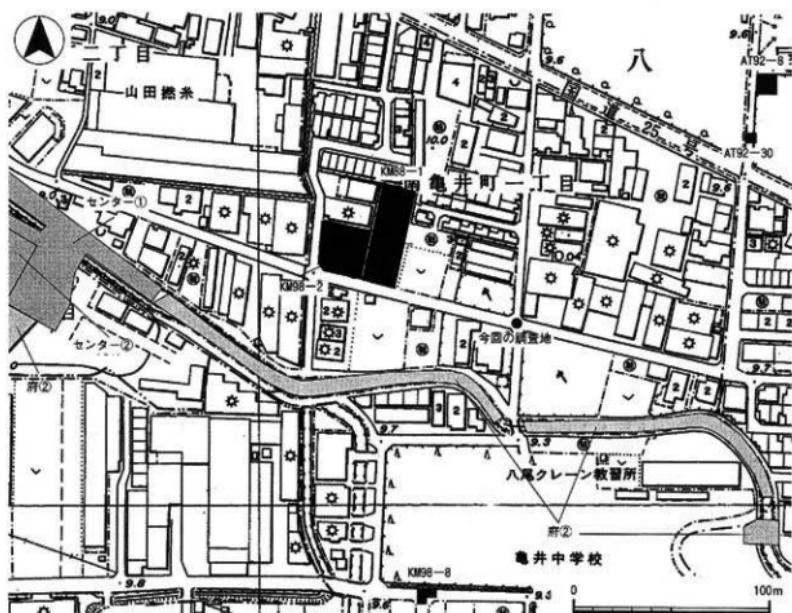
大阪府の東部、現在の大和川と石川の合流する付近から北西方向に広がる河内平野は、東を生駒山地、西を上町台地、北を淀川、南を羽曳野丘陵に区画されている。この河内平野は、旧大和川の分流がもたらす冲積作用によって形成されている。今回報告する亀井遺跡は、この大平野の東部を画する八尾市の西部に位置する。現在の行政区画では、亀井町及び南亀井町の東西約0.6km、南北約0.8kmがその範囲と推定されている。地形的には、旧大和川水系の冲積作用によって形成された河内平野の南端部に位置し、弥生時代に最も隆盛をほこる。以下では、既往の調査事例をふまえて当遺跡の概要を時代別に記す。

#### 縄文時代

近畿自動車道建設に伴う調査（以下近道調査）において、晩期と推測される黒灰色粘土層が確認されている。

#### 弥生時代前期

近道調査Cトレンチ北側で土坑・溝が数基検出される程度である。現段階で居住城の場所を推



第1図 調査地周辺図 (S = 1/2500)

表1 調査地一覧表（地図番号は第1図に対応）

番号	調査名(略号)	調査主体	所在地	文献
府①	1978年度・1979年度 (財)大阪文化財 センター調査地	大阪府 教育委員会	八尾市南龜井町1丁目 ～跡部南の町1丁目	森井貞夫1989「1988年度 龜井遺跡発掘 調査概要一八尾市南龜井町・跡部南の町 所在一」
府②	1980年度 (財)大阪文化財 センター調査地	大阪府 教育委員会	八尾市南龜井町3丁目	森井貞夫 1994「1992-1993年度 龜井遺 跡発掘調査概要一八尾市南龜井町所在一」 大阪府教育委員会
センター①	1988年度 大阪府教育委員会 調査地	(財)大阪文化財 センター	八尾市南龜井町	中西靖人・国乗和雄・宮崎泰史・西村尊文・ 岸本道昭 1984「龜井遺跡Ⅱ」(財)大阪 文化財センター
センター②	1992年度・1993年度 大阪府教育委員会 調査地	(財)大阪文化財 センター	八尾市南龜井町	中西靖人・宮崎泰史・西村尊文・広瀬雅信・ 原 秀信 1982「龜井遺跡」(財)大阪文 化財センター
KM88-1	KM88-1	(財)八尾市文化財 調査研究会	八尾市南龜井町4丁目 41-1	近江俊秀・岡田清一・並河聰也 1989「龜 井遺跡 - 南龜井町4丁目41-1の調査」(財) 八尾市文化財調査研究会
KM89-2	KM89-2	(財)八尾市文化財 調査研究会	八尾市南龜井町1丁目 39-2・6・40-2	成海佳子 1990「Ⅵ 龜井遺跡(KM89-2)」 「八尾市文化財調査研究会年報 平成元 年度」(財)八尾市文化財調査研究会
KM98-8	KM98-8	(財)八尾市文化財 調査研究会	八尾市南龜井町4丁目	岡田清一・磯口 篤 2000「Ⅲ 龜井遺跡 第8次調査(KM98-8)」(財)八尾市文化 財調査研究会報告65】(財)八尾市文化財 調査研究会
AT92-8	AT92-8	(財)八尾市文化財 調査研究会	八尾市跡部本町4丁目 4-20	岡田清一 1993「Ⅱ 跡部遺跡第8次調 査(AT92-8)」「(財)八尾市文化財調査 研究会報告39」「(財)八尾市文化財調査 研究会
AT98-30	AT98-30	(財)八尾市文化財 調査研究会	八尾市跡部本町4丁目	森本めぐみ 2000「Ⅲ 跡部遺跡第30次 調査(AT98-30)」「(財)八尾市文化財調査 研究会報告65」「(財)八尾市文化財調査 研究会

定するならば、この地点が候補となるが極めて限定される。

#### 弥生時代中期

近道調査BトレンチとCトレンチ北側で居住域が形成される。前期の居住域からは北へと移動する。さらに、長吉ポンプ場建設地の本体部調査区（以下ポンプ場本体部調査区）で北東隅部に柱穴群や井戸が検出されていることからこの地区にも居住域が想定できる。墓域は多くの方形周溝墓が築かれる近道調査CトレンチとDトレンチに形成され、南接する城山遺跡にまで広がる。長吉ポンプ場建設地の平野川改修調査区（以下ポンプ場平野川改修調査区）においても方形周溝墓が築かれている。そして、ポンプ場平野川改修調査区の東側と南側の溝群は集落のなんらかの区画を示す可能性も示唆されている。当研究会の第1次調査では方形周溝墓の可能性をもつ土器棺と溝が、第2次調査では溝状の落ち込みなどが検出されていることからも集落の規模をさらに東へと大きく想定できるのか、あるいはいくつかの集落のまとまりを考えなければならないのか今後の調査に期待するものである。

#### 弥生時代後期

前半～中葉までは近道調査Bトレンチとポンプ場本体部調査区北側及び平野川改修調査区西端に居住域を形成する。近道調査AトレンチとBトレンチ北端の中期末から存在する大溝とポンプ場本体部調査区の大溝群が環濠を形成する可能性も上げられている。

後半では近道調査Bトレーニングに居住域が限定され、その規模は縮小する。当研究会の第1次・2次調査で土坑・溝・落ち込み状遺構などを検出しておらず居住域は西側へと移動した可能性もある。墓域は現在のところ見つかっていない。後期後半の河川氾濫などの活発な自然環境の変化は、徐々に生活環境の不安定を招き、この地の居住空間としての機能は薄らいでいったと考えられる。

#### 古墳時代中期

近道調査Cトレーニング西側切抜げ部とポンプ場本体部調査区北東隅において古墳が数基見つかっている。また、ポンプ場本体部調査区と大阪府教育委員会によるポンプ場調査区（以下府教委ポンプ場調査区）を南西から北東へと横切る堤が検出されているが、この時期の河川との関係などを絡めた機能の問題ものとなっている。

#### 古墳時代後期以降

平野川の旧河道と水田畦畔が検出される。居住域を想定するような遺構の検出は現在のところ見つかっていない。古墳時代後期以降、この地は生産域となるよう、土地利用形態は大きく変化していった。  
(金親)

## 2. 調査概要

### 1) 調査方法と経過

今回の調査は、八尾市南龟井町1・4丁目地内で行われた公共下水道工事に伴うもので、当調



第2図 調査位置図 (S = 1/250)

査研究会が龜井遺跡内で実施した第12次調査（KM2001-12）にあたる。調査区は1箇所である。調査区の平面形状は円形で、面積は約7.5m<sup>2</sup>を測る。

本調査では、八尾市教育委員会作成の埋蔵文化財指示書に基づき、現地表（T.P. +9.37m前後）下2.7m前後までを機械掘削とし、以下現地表下6.5m（T.P. +2.87m前後）までの3.8mについては、遺構・遺物に注意しながら重機により掘削を行っていった。なお、今回の調査は、諸事情により夜間に実施された。現地での調査期間は平成13年6月18日～6月21日（実働2日間）である。

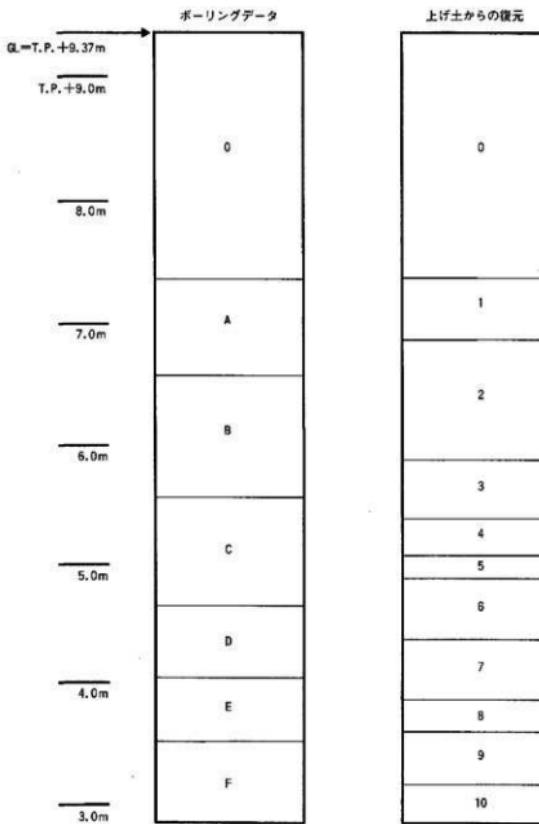
さて、本来、調査においては、調査区内に壁面を残し、地層断面観察を踏まながら平面的な調査を試み、遺構・遺物の検出に努めるべきである。しかし、今回の下水道工事はPIT工法が採用されたため、こちらの思惑通りにことは進まなかった。この工法は、直径約3m、長さ約3mの鋼鉄製の円柱管を圧力により地中に埋め込んでいく方法で、この工法では、土坑内の調査は危険を伴うため、調査は不可能であった。さらに、この円柱管の埋設の前段階に、ある程度土坑内の砂礫を取り除かなければならないが、その掘削にバッカンと呼ばれる重機を用いた。これでは、平面の状況を把握することはまったく不可能であった。以上の理由から、基本的な調査は不可能と判断し、今回は掘り上った砂礫内に遺物が含まれているかどうかで、遺構の存在を確認せざるを得なかった。

（樋口）

## 2) 基本層序

先述した通り、今回の調査では地層観察などはまったくできなかつたため、本調査区の堆積状況は不明である。しかしながら、業者の好意により、本調査区の南東約5m付近で行われたボーリングデータの資料を提供して頂いた。以下では、この資料を参照しながら、掘削状況や上げ土の観察から得た情報を中心に、本調査区の堆積状況を復元した。なお、先述した通り、今回の調査は夜間に行われたため、土色の考察については、これを行わなかつた。（樋口）

- 0層 客土・盛土
- 1層 細粒砂混粘土質シルト
- 2層 シルト質粘土
- 3層 中粒砂～粗粒砂
- 4層 粘土質シルト（粘性が強い地層である。植物遺体や炭酸カルシウムを含む。）
- 5層 細粒砂～中粒砂混粘土質シルト（粘性が強い地層である。植物遺体や炭酸カルシウムを含む。）
- 6層 粘土質シルト～シルト混中粒砂～極粗粒砂（下方に向かうにつれて粗粒化の傾向にある。本層内において2条の暗色帯のような地層が観察できたが詳細は不明。）
- 7層 粘土質シルト～粗粒砂（下方に向かうにつれて粗粒化の傾向にある。）
- 8層 粗粒砂～細礫（ラミナ構造が認められる。下方に向かうにつれて粗粒化の傾向にある。）
- 9層 極粗粒砂～細礫混粘土質シルト（ラミナ構造が認められる。）
- 10層 シルト～極粗粒砂



第3図 基本層序模式図 (S = 1 / 40)

### 3) 検出遺構と出土遺物

今回の調査では、遺構の有無を判別することは不可能であった。しかし、消極的ではあるが、上げ土に遺物が含まれていないということで、遺構が存在しなかった可能性が若干高いかも知れない。

(樋口)

### 3.まとめ

今回の調査では、遺構の有無を確認することができず、また、遺物の出土も皆無であったため、地層の年代を推し量ることもできなかった。したがって、考古学的な成果はほとんど無しに等しいといえる。なお、今回の調査地周辺では、北西約70mに位置する南龜井町4丁目41-1の調査で、T.P.+4.95~5.1mで弥生時代中期中葉に比定される土器梢を埋置した土坑と、それらに付随すると推測される溝を、またT.P.+6.1~6.3mで弥生時代後期の遺構構築面を検出し、祭祀に関連すると推測される土坑などを検出している。一方、南に約50mの地点で実施された一級河川平野川改修工事に伴う調査でも、T.P.+5.3~5.4m前後で弥生時代中期の、T.P.+6.3m前後で弥生時代後期の遺構面をそれぞれ検出している。よって、本調査地にも、弥生時代中期から後期にかけての遺構面が存在する可能性は高い。近い将来、本調査地周辺で再度調査をする機会が与えられたときには、これらの疑問を解決したいものである。

(樋口・金親)

### 引用・参考文献

- ・森井貞雄 1989『1988年度 龜井遺跡発掘調査概要—八尾市南龜井町・跡部南の町所在—』大阪府教育委員会
- ・大野 熊・森井貞雄 1994『1992・93年度 龜井遺跡発掘調査概要—八尾市南龜井町所在—』大阪府教育委員会
- ・寺川史郎・尾谷雅彦編 1980『龜井・城山』(財)大阪文化財センター
- ・中西清人・宮崎泰史・西村尋文編 1982『龜井遺跡』(財)大阪文化財センター
- ・宮崎泰史編 1984『龜井遺跡II』(財)大阪文化財センター
- ・赤木克視他 1983『龜井』(財)大阪文化財センター
- ・赤木克視他 1986『龜井 その2』(財)大阪文化財センター
- ・赤木克視他 1987『龜井 その3』(財)大阪文化財センター
- ・陣内暢子 1987『龜井遺跡』『河内平野遺跡群の動態I』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・岡田清一 1993『II 跡部遺跡第8次調査(A T92-8)』(財)八尾市文化財調査研究会報告39』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・森本めぐみ 2000『III 跡部遺跡第30次調査(A T98-30)』(財)八尾市文化財調査研究会報告65』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・近江俊秀・岡田清一・並河聰也 1989『龜井遺跡 一南龜井町4丁目41-1の調査—』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・成海佳子 1990『10. 龜井遺跡(KM89-2)』『八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・岡田清一・樋口 熊 2000『IV 龜井遺跡第8次調査(KM98-8)』(財)八尾市文化財調査研究会報告65』(財)八尾市文化財調査研究会



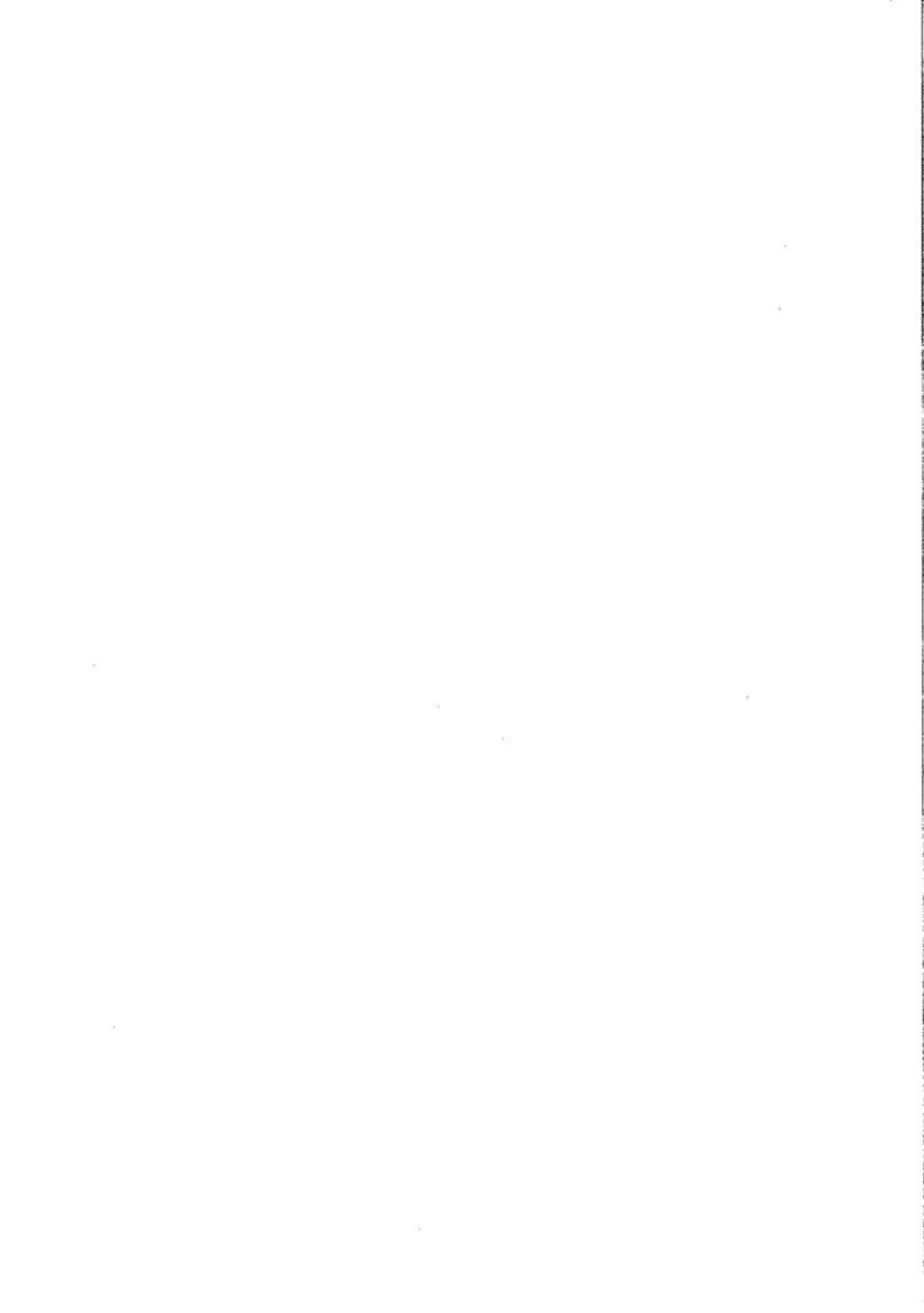
調査開始状況 (南西から)



掘削状況 (南西から)



上げ土内遺物確認状況 (東から)



### III 中田遺跡第47次調査 (N T 2001-47)

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市中田2丁目地内で実施した公共下水道工事（11-22工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する中田遺跡第47次調査（NT2001-47）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第265号 平成12年9月7日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成13年4月11日～平成13年5月10日（実働8日間）にかけて、森本めぐみを担当者として実施した。調査面積は77.4m<sup>2</sup>を測る。現地調査には以下の補助員が参加した。  
荒川和哉・北湯良江・國津れい子・長池豊子（五十音順）
1. 内業整理には上記の他、市森千恵子が参加した。また、遺物観察表や図面作成には樋口 薫（当調査研究会）の協力を得た。
1. 本文の執筆および写真撮影は森本が行った。

## 本　文　目　次

1.はじめに.....	19
2.調査概要.....	21
1) 調査の方法と経過.....	21
2) 基本層序.....	21
3) 検出遺構と出土遺物の概要.....	23
3.まとめ.....	24

### III 中田遺跡第47次調査(NT2001-47)

#### 1. はじめに

中田遺跡は、八尾市のはば中央に位置する遺跡で、現在の行政区画では中田1～5丁目・八尾木北1～6丁目・刑部1～4丁目の東西約1.1km、南北約0.8kmがその範囲と推定されている。地形的には、河内平野のはば中央を縦断していた長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地している。同地形においては、北に小阪合遺跡、西に矢作遺跡、南に東弓削遺跡が隣接している。

中田遺跡は、昭和45年に行われた区画整理事業でその存在が確認され、昭和46年以降、大阪府教育委員会、中田遺跡調査会、中田遺跡調査センター、八尾市教育委員会、当調査研究会によつて多くの調査が行われてきた。その結果、弥生時代前期～近世に至る遺構・遺物が検出され、当遺跡が複合遺跡であることが確認されている。

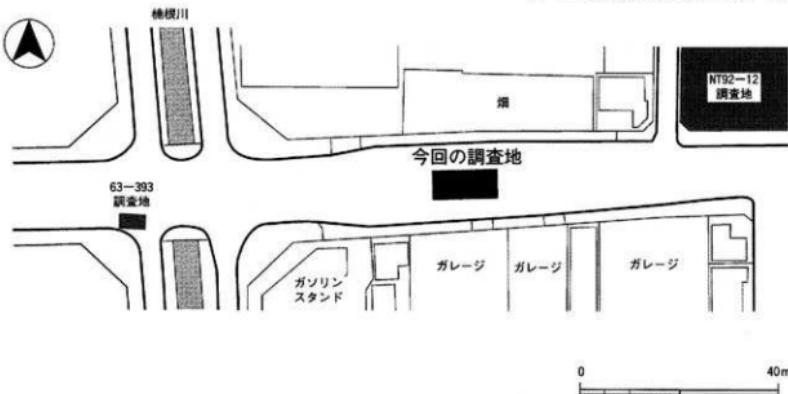
今回の調査地である中田2丁目は、中田遺跡内の北東部に位置し、当調査区の西側には楠根川が北流している。当調査地周辺では、当調査研究会による⑤、市教委による⑯・⑰などが行われている。なかでも⑤では、現地表下約1.1m (T.P. +8.25m) で鎌倉時代の池状造構や自然河川が、現地表下約1.2m (T.P. +8.15m) で古墳時代前期の土坑、溝、土器集積などが検出されている。また、市教委が行った⑯では、T.P. +8.3m前後で井戸側が3段残存していた15世紀中頃の井戸が確認されている。



第1図 調査区周辺図 (S = 1/5000)

表1 八尾市教育委員会既往調査一覧表（第1回対応）

番号	調査名	所在地	調査期間	調査主体	関連文献
①	NT87-1	八尾市中田2丁目	昭和63年2月22日～3月11日	研究会	財團法人八尾市文化財調査研究会報告16 1988
②	NT90-6	八尾木北3丁目・荘 部2丁目地内	平成3年1月16日～2 月26日	研究会	財團法人八尾市文化財調査研究会報告49 1995
③	NT91-7	八尾木北3丁目	平成3年5月17日～5 月27日	研究会	財團法人八尾市文化財調査研究会報告34 1992
④	NT92-10	八尾木北3丁目地内	平成4年1月6日～ 平成5年1月22日	研究会	平成4年度(財)八尾市文化財調査研究会事業 報告 1993
⑤	NT92-12	八尾市中田2丁目	平成5年1月19日～1 月30日	研究会	財團法人八尾市文化財調査研究会報告39 1993
⑥	NT92-15	八尾市荘部2丁目地 内	平成5年3月8日～4 月15日	研究会	財團法人八尾市文化財調査研究会報告56 1997
⑦	NT93-23	八尾市中田4丁目	平成6年3月1日～3 月4日	研究会	財團法人八尾市文化財調査研究会報告43 1994
⑧	NT94-28	八尾市荘部2丁目地 内	平成6年11月18日～ 12月5日	研究会	財團法人八尾市文化財調査研究会報告49 1995
⑨	NT95-30	八尾市荘部2丁目地 内	平成7年9月20日～ 10月13日	研究会	財團法人八尾市文化財調査研究会報告61 1998
⑩	NT95-31	八尾市荘部1丁目	平成7年11月6日～ 11月15日	研究会	財團法人八尾市文化財調査研究会報告56 1997
⑪	NT96-33	八尾市中田1-4丁目	平成8年4月5日～4 月15日	研究会	財團法人八尾市文化財調査研究会報告60 1998
⑫	NT96-35	八尾市中田1丁目	平成9年2月7日～3 月7日	研究会	平成8年度(財)八尾市文化財調査研究会事業 報告 1997
⑬	NT97-36	八尾市荘部1丁目・ 中田2丁目	平成9年5月27日～7 月24日	研究会	財團法人八尾市文化財調査研究会報告66 2000
⑭	NT97-41	八尾市中田2丁目	平成10年2月4日～2 月26日	研究会	財團法人八尾市文化財調査研究会報告62 1999
⑮	NT98-43	八尾市中田2丁目	平成10年12月3日～ 12月11日	研究会	財團法人八尾市文化財調査研究会報告65 2000
⑯	(74年調査)	八尾市中田5丁目他 9丁目	昭和49年7月26日～ 9月3日	市教委	中田遺跡調査報告Ⅱ 1981
⑰	(1-39)	八尾市中田1丁目	昭和56年2月27日～ 3月6日	市教委	八尾市文化財紀要2 1966
⑱	(88年調査)	八尾市八尾木北5 丁目	昭和62年12月14日 ～昭和63年3月11日	市教委	八尾市文化財調査報告18 1988
⑲	(89-484)	八尾市八尾木北2 丁目	平成2年1月12日	市教委	八尾市文化財調査報告20 1990
㉑	(63-393)	八尾市中田4丁目	平成元年2月22日～ 2月23日	市教委	八尾市文化財調査報告21 1990
㉒	(90-412)	八尾市八尾木北2 丁目	平成2年12月11日	市教委	八尾市文化財調査報告22 1991
㉓	(90-427)	八尾市八尾木北2 丁目	平成2年11月20日	市教委	八尾市文化財調査報告22 1991
㉔	(90-540)	八尾市中田4丁目	平成2年8月1日	市教委	八尾市文化財調査報告22 1991
㉕	(91-353)	八尾市八尾木北2 丁目	平成3年12月10日	市教委	八尾市文化財調査報告28 1992
㉖	(91-354)	八尾市八尾木北2 丁目	平成3年12月13日	市教委	八尾市文化財調査報告28 1992
㉗	(91-503)	八尾市中田5丁目	平成4年1月9日・27日	市教委	八尾市文化財調査報告28 1992
㉘	(92-598)	八尾市中田1丁目～ 4丁目	平成5年3月11日～3 月16日	市教委	八尾市文化財調査報告30 1993
㉙	(95-22)	八尾市荘部2丁目	平成7年11月28日・ 平成8年1月25・26日	市教委	八尾市文化財調査報告37 1997
㉚	(95-260)	八尾市中田4丁目	平成8年7月31日	市教委	八尾市文化財調査報告33 1996
㉛	(95-470)	八尾市中田1丁目	平成8年11月 13・14・27・28日・平 成8年1月19日	市教委	八尾市文化財調査研究会報告36 1997
㉜	(96-487)	八尾市荘部2丁目	平成8年11月14日	市教委	八尾市文化財調査報告36 1997
㉝	府教委調査	八尾市中田1丁目・ 八尾木北5丁目	昭和60年度調査	府教委	中田遺跡発掘調査概要 1986
㉞	中田遺跡調査 会調査	八尾市中田1-4丁 目	昭和47年10月～昭 和48年9月	中田遺跡 調査会	中田遺跡(北区)発掘調査概要 中田遺跡(南区)発掘調査概要

第2図 調査区位置図 ( $S = 1/1000$ )

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の調査は、公共下水道工事（11-22工区）に伴うもので、当調査研究会が中田遺跡内で行った第47次調査に当たる。調査は八尾市教育委員会の指示書に従い、現地表（T.P.+9.7m前後）下、1.3mまでを機械掘削範囲とし、以下の0.5mを包含層掘削範囲として調査を行う予定であった。しかし、調査対象とした立坑は、調査開始段階で現地表下約1.8m前後までに掘削されていた。これは地盤改良の薬剤注入工事の際に掘削したものらしい。以上のことから、調査対象範囲は調査開始前に削平された事となった。そのため、調査は下層確認が主となった。下層確認は、工事掘削範囲である現地表下約11.5m前後まで行う予定であった。しかし、地盤改良剤のため、現地表下約8.7m（T.P.+1.0m）以下の地層がコンクリート状に固まつたため、掘削が困難になり、また、地層も攪拌されている可能性が高かったため、以下の調査を断念した。

### 2) 基本層序

基本層序は、第3図の通りである。調査区の南壁で地層の観察を行い、現地表下約8.7mまでの間に24層の地層を確認できた。しかしながら、南壁全体を残して観察することができなかつたため、部分的な確認にとどまった。0層は調査前に削平されたため、堆積状況は不明である。

- 1層：5Y6/4オリーブ黄色細粒砂～中疊。径6cm前後の大疊も含む。
- 2層：10Y3/1オリーブ黒色細粒砂混粘土。
- 3層：7.5Y2/1黒色極細粒砂～中粒砂混粘土。上部にはオリーブ黒色の粘土ブロックを含む。
- 4層：2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土質シルト。下部ほど極細粒砂～細粒砂を含む。
- 5層：2.5GY5/1オリーブ灰色細砂～極粗粒砂。
- 6層：2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土。下部に炭化物をラミナ状に含む。
- 7層：5GY3/1暗オリーブ灰色粘土。
- 8層：5GY3/1暗オリーブ灰色シルト混粘土。シルトをラミナ状に含む。

T.P. +10.0m

T.P. +9.0m

T.P. +8.0m

T.P. +7.0m

T.P. +6.0m

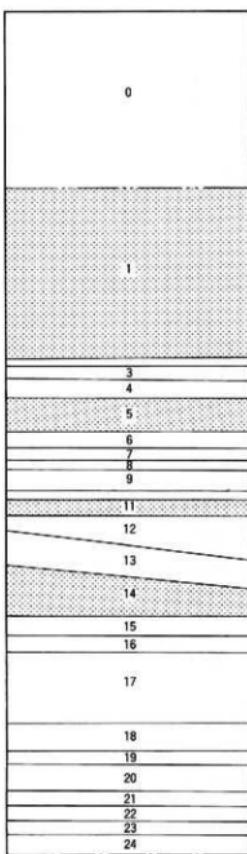
T.P. +5.0m

T.P. +4.0m

T.P. +3.0m

T.P. +2.0m

T.P. +1.0m



C層：地表不明

1層：5% / 4オリーブ黄色粗粒砂～中粒  
往 6 cm前後の様も含む

2層：10% / オリーブ褐色粗粒砂質粘土

3層：7.5% / 黑色細粒砂質～中粒砂質粘土

4層：2.5% / 10% オリーブ灰色軟土質シルト

下部ほど細粒粉砂～細粒砂を含む

5層：2.5% / 1% オリーブ灰色粗粒砂質

6層：2.5% / 1% オリーブ灰色粘土

下部に炭化物をうきナ状に含む

7層：5% / 布オリーブ灰色粘土

8層：5% / 布オリーブ灰色シルト質粘土

シルトをうきナ状に含む

9層：5% / 黒色粗粒砂土 中位に炭酸鉄を少額含む

10層：5% / 1% オリーブ灰色シルト質粘土

11層：10% / 1% 黑色粗粒砂質シルト～中粒砂

12層：4% / 黑色粘土 有機物を少額含む

13層：5% / 細粒白色シルト質粘土

下部ほどシルトを多く含む

14層：7.5% / 細粒白色粗粒砂質～中粒砂

下部ほど粉砂に富む

15層：10% / 黑色粗粒砂土 炭化物をやや多く含む

16層：5% / 布黒色粗粒砂土シルトの互層

下部ほど粉砂に富む

17層：10% / 黑色粗粒砂土

下部にはシルト～細粒粉砂を多く含む

18層：4% / 黑色シルト質粘土

下部ほどシルトを多く含む

19層：10% / 黑色シルト～4% / 黑色シルト質粘土

20層：10% / 黑色粘土質シルト

21層：7.5% / 黑色粘土

22層：7.5% / 細粒粗粒各々シルト～細粒粉砂

23層：10% / 黑色粗粒土質シルト

24層：2.5% / 10% オリーブ灰色シルト～細粒砂

第3図 基本層序模式図 (S = 1/50)

- 9層：5G1.7/1縁黒色粘土。中位に炭酸鉄を少量含む。
- 10層：5GY3/1暗オリーブ灰色シルト混粘土。
- 11層：7.5GY3/1暗緑灰色粘土質シルト～中粒砂。
- 12層：N2/0黒色粘土。極細粒砂を極少量含む。
- 13層：5G2/1縁黒色シルト混粘土。下部ほどシルトを多く含む。植物遺体を多く含む。
- 14層：7.5GY3/1暗緑灰色極細粒砂～中粒砂。
- 15層：5GY4/1暗緑灰色粘土とシルトの互層。下部ほど粘性に富む。
- 16層：10G1.7/1縁黒色粘土。炭化物をやや多く含む。
- 17層：10G3/1オリーブ黒色粘土。下部にはシルト～極細粒砂を含む。
- 18層：N1.5/0黒色シルト混粘土。下部ほどシルトを多く含む。
- 19層：10Y4/1灰色シルト～N1.5/0黒色シルト質粘土。東へ行くほどシルト優勢となる。
- 20層：10Y4/1灰色粘土質シルト。
- 21層：7.5Y2/1黒色粘土。
- 22層：7.5GY4/1暗緑灰色シルト～極細粒砂。
- 23層：10GY3/1縁黒色粘土質シルト。
- 24層：2.5GY2/1オリーブ灰色シルト～細粒砂。西へ行くほど細粒砂優勢となる。

1層は、粗粒砂～細礫を主体とした流水堆積層である。上部は既に掘削されていたが、確認できただけでも層厚1.7mにおよぶ。T.P.+6.5m前後が最も粗く、極粗粒砂～中礫が中心となる。3層は、上部に極細粒砂、下部に中粒砂を含む層で、上部にはオリーブ黒色の粘土ブロックを含む。攪拌を受けたような層であるが、遺構の有無は確認できなかった。4層以下は、5・11・14層と砂層が見られるが、比較的安定した堆積状況を示している。24層については、下部ほど粗い砂層となるようであったが、T.P.+1.0m以下は地盤改良剤で固まっていたため確認できなかった。

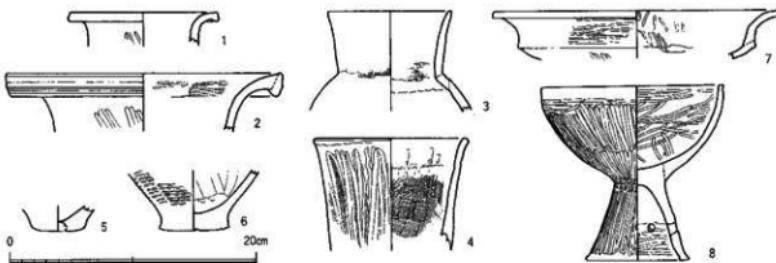
### 3) 検出遺構と出土遺物の概要

今回の調査では、遺構は確認できなかった。

出土遺物については、1層内から弥生時代後期の土器が出土している。その内の8点を図化した。これらの遺物はT.P.+6.3～6.7m前後から出土したものがほとんどである。しかし、機械掘削中での検出のため、正確な高さ等は確認できていない。その他の地層から遺物は出土しなかった。

#### ・ 1層内出土遺物

前述した通り、8点（1～8）を図化した。1・2は広口壺である。1はほぼ水平に外反する口縁部を持つ。2は口縁部が外反し、垂下する口縁端部を持つ。3は長頸壺である。内外面ともハケナデを施していると思われるが、磨耗しており不明瞭である。4は長頸壺である。外面はハケナデの後ミガキを施す。内面はハケナデであるが、口縁部は最終的に横ナデを施し、ハケナデを消している。5は底部である。内外面ともナデ調整である。器種は不明。壺、もしくは甕になると思われる。6は甕の底部である。外面には炭化物が全面に付着している。内面は板ナデを施す。7・8は高杯である。7は大きく外反する口縁部を持つ。8は椀形の杯部を持つ。脚部は直線的に開き、透かし孔は5方向に穿たれている。これらの出土遺物の時期はおおむね弥生時代後期に比定できよう。



第4図 1層内出土遺物実測図 ( $S = 1/4$ )

### 3.まとめ

今回の調査では、平面的な調査を行うことができなかつたため、地層の堆積状況を確認することを中心とした調査となつた。確認できたのは、現地表下約8.7m (T.P. +1.0m) までの地層である。その結果、当調査で確認した1層が、第12次調査で確認された砂層 (T.P. +8.0m以下) に相当することが判明した。この砂層は、古墳時代前期に埋没した自然河川の堆積層と推定されており、第12次調査では、この層より上層で古墳時代前期の遺構面が確認されている。一方、今回の調査地では、1層中 (現地表下約1.8m前後) まで掘削されていたことから、同時期に相当する遺構面は調査開始前に削平されてしまったようである。その他、ブロックを含む層として3層を確認したが、そのブロックが人為的なものかどうかは確認できなかつた。

遺物は、1層から出土したのみである。これらの遺物は、T.P. +6.2~7.0mに含まれるものと思われるが、機械掘削中に出土したものであり、正確な高さは確認できていない。各遺物の帰属時期も弥生時代後期初頭~末にわたるなど若干の幅が見られる。しかしながら、土器の遺存状態は良好で、あまり磨耗を受けていないものが多い。これらの遺物の出土状況から、当該期の居住域が付近に存在した可能性を指摘できよう。

### 引用・参考文献

- ・山本 昭 1975『中田遺跡』中田遺跡調査報告Ⅱ 昭和49年国庫補助事業 中田遺跡範囲確認調査 八尾市教育委員会
- ・米田敏幸他 1990「1. 中田遺跡(63-393)の調査」『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告21 平成元年度公共事業 八尾市教育委員会
- ・岡田清一 1993「Ⅷ 中田遺跡第12次調査(N T92-12)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告39』財団法人八尾市文化財調査研究会

表2 出土遺物觀察表

報告番号	出土地名	器種	部位	( 法規 [cm] )		形態	調査	色調	胎土	保存状況	備考
				内径	外径						
1	1層内 底面	口沿部 ～腹部	口沿部 ～側面	(19.8) 口径= (2.8)	高さ= (2.8)	口縁部：直ぐくほぼ水平に外反する。口縁端部：外傾する。下唇部：外傾する。下唇端部：外傾する。	内面 外面	褐色 褐色	板状砂～泥 板状砂～泥	約1/6現存	
2	1層内 底面	口沿部 ～腹部	口沿部 ～側面	(22.1) 口径= (4.8)	高さ= (4.8)	口縁部：外反する。口縁端部：直下し、平坦面を形成。下唇部：外傾する。下唇端部：外傾する。	内面 外面	褐色 褐色	板状砂～泥 板状砂～泥	約1/8現存	
3	1層内 底面	口沿部 ～側面	口沿部 ～側面	(10.8) 口径= (8.3)	高さ= (8.3)	口縁部：ほぼ平行に上向外傾する。下唇部：丸い。下唇端部：直角的。端部：丸い。腹部：直角的。	内面 外面	褐色 褐色	板状砂～泥 板状砂～泥	約1/2現存	
4	1層内 底面	口沿部 ～側面	口沿部 ～側面	(12.0) 口径= (9.3)	高さ= (9.3)	口縁部：直線的にわずかに内傾する。端部：丸い。	内面 外面	褐色 褐色	板状砂～泥 板状砂～泥	約1/8現存	生剥西瀬前原。
5	1層内 底面	底部 または 茎	底部 ～茎	真径= (4.3) 直径= (2.1)	高さ= (5.6)	底部：直角的。体部：直角的。からスムーズに圓く。	内面 外面	褐色 褐色	板状砂～泥 板状砂～泥	約1/6現存	
6	1層内 底	体部下 半	体部下 半	口径= (23.0) 直径= (4.1)	高さ= (5.0)	底部は突出し、半球である。	内面 外面	褐色 褐色	板状砂～泥 板状砂～泥	約1/22現存	
7	1層内 底面	口沿部 ～側面	口沿部 ～側面	口径= (14.6) 直径= (14.4) 直径= 8.5	高さ= (8.5)	口縁部：短く外反する。下唇部：直角的。内側面：平坦面を形成。柱状部：中央、生垣直線的開口部。下唇端部：外傾する。	内面 外面	褐色 褐色	板状砂～泥 板状砂～泥	約1/22現存	内円行を行ひたまに生剥西瀬前原の可能性がある。
8	1層内 底面	底	底	口径= (14.6) 直径= (14.4) 直径= 8.5	高さ= (8.5)	口縁部：直角的。柱状部：上半部：直角的。下半部：丸い。柱状部：中央、生垣直線的開口部。下唇端部：外傾する。	内面 外面	褐色 褐色	板状砂～泥 板状砂～泥	保存=約3/4 保存=光合 その他=光合	外部と直隣接し、挿入付加法により接合する。 生剥西瀬前原か。



調査開始状況（北西から）



南壁断面（T.P. +2.7~3.6m）



南壁断面（T.P. +7.2~8.2m）



南壁断面（T.P. +1.5~2.8m）



南壁断面（T.P. +5.6~7.6m）



南壁断面（T.P. +1.0~1.9m）



南壁断面（T.P. +3.7~5.5m）



最終掘削状況（東から）



3



8

1層内出土遺物



IV 中田遺跡第48次調査 (N T 2001-48)

# 例　　言

1. 本報告は大阪府八尾市刑部4丁目地内で実施した公共下水道工事に伴う中田遺跡発掘調査（NT2001-48）の報告である。
1. 本調査は八尾市教育委員会の指示書（教社文第537号 平成13年3月22日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施した。  
調査は当調査研究会技師酒 斎を担当者とし、同調査研究会 高萩千秋と岡田清一が協力した。
1. 現地調査は平成12年7月2日に着手し、10月9日に終了した。調査面積は約34m<sup>2</sup>を測る。  
調査には荒川和哉、岩本順子、國津れい子、沢村妙子、鈴木裕治、曹龍、多田一美、都築聰子、実樹姫美子の参加を得た。
1. 内業整理では遺物実測－伊藤静江、加藤邦枝、國津れい子、永井律子、田嶋宣子、村田知子、吉川一栄、若林久美子、山内千恵子、トレースー中村百合、村井俊子、山内千恵子、遺物写真撮影－垣内洋平が行った。
1. 本書の執筆及び編集は酒が行った。

## 本　文　目　次

1.はじめに	29
2.調査概要	30
1) 調査方法	30
2) 検出遺構と出土遺物	30
3.まとめ	42
1) 調査成果	42
2) 中河内における中世集落の成立と変遷－中田遺跡と東弓削遺跡をモデルとして－	44
3) 八尾市域の用水施設について	55

## IV 中田遺跡第48次調査(N T 2001-48)

### 1. はじめに

中田遺跡は中田1～5丁目、刑部1～4丁目、八尾木北1～6丁目に所在する弥生時代前期から中世にかけての複合遺跡である。旧大和川の主流である古玉串川と古平野川にはさまれた沖積地に立地しているが、江戸時代（1704年）の河川の付け替えによって往時の環境とは大きく様変わりしているものと思われる。

しかし、それ以前は大和川の豊富な水量とそれによって運ばれた滋養分を含んだ土砂が黎明期の農耕に適していたため、多くの遺跡が形成されることになった。中田遺跡の北側には小阪合遺跡、成法寺遺跡、南側には東弓削遺跡、西側には矢作遺跡、玉串川をはさんで東側の生駒西麓には恩智遺跡、郡川遺跡などがある。生駒西麓に立地する恩智遺跡、郡川遺跡は縄文時代には人々の足跡が残されており、中田遺跡と同じ平野部の沖積地にある小阪合遺跡、成法寺遺跡、東弓削遺跡などは弥生時代からの遺構が見つかっている。

中田遺跡における当研究会の調査は50次に迫り、大阪府教育委員会、中田遺跡調査会、八尾市教育委員会による調査を含めると相当数にのぼる。とくに庄内式期から布留式期の遺構や遺物の出土が顕著であることから、弥生時代末期から古墳時代前期に盛期があると考えられている。しかし、大規模な調査は少なく下水道管埋設に伴う人孔部分や共同住宅の杭列部分の調査が主体でその全容には迫ってはいないが、これまでの調査によって以下のような変移が辿れる。



第1図 調査地周辺図 (1/5000)

弥生時代前期から中期の遺構は河川と土坑が少数検出されているのみで、集落や生産域などの性格については不明であるが、前期新段階には中田遺跡内に生活痕跡があったことは確かである。中期の遺構は主に遺跡の南側で検出されており、東弓削遺跡にかけて広がっていたと思われる。けれども当該期の河内平野における拠点的集落やその周辺のような遺構や遺物の集中する状況がみられない。これは拠点的な集落と考えられる恩智遺跡や平野川をはさんで南北にある田井中遺跡、西にある跡部遺跡などの間に位置することから、これらの緩衝地帯となっていたものと推定される。後期は前半が遺跡中央東寄りの位置で見つかっている。しかし、周辺はすでに宅地化が完了しており、調査の機会も少なく現状では不明な点が多い。また、後半も前半と同様に明確な遺構は少ないものの遺物の出土は全体に満遍なくみられ、次の古墳時代初頭での爆発的な遺構の増加の序章としてとらえることができる。

弥生時代末期から古時代前期になると遺跡内の大半で確認される。しかし、弥生時代後期からの傾向と同様に長期にわたって生活痕跡がみられるわけではなく、土器型式では庄内式あるいは布留式の1~2型式程度の時期に過ぎない。遺跡南側東寄りで遺構の偏在がみられ、こうした地域においては土器の密集度が大きい。

古墳時代では南側で埋没古墳や埴輪片が確認されており、東弓削遺跡でも埴輪の出土が顕著であることから今後新たな埋没古墳が見つかる可能性がある。古墳時代の遺構や遺物は前代と同様に遺跡の北側と南側に大きく分けられるが、北側はTK208型式併行を、南側はTK47~10型式併行を中心とするようである。

飛鳥時代になると周辺に寺院の建立が盛んになるが、中田遺跡内ではこの時期の遺構は検出されていない。次の奈良時代には弓削道鏡が関係したといわれる西の京が中田から東弓削遺跡で周辺にあったと推定されているが、明確な関連遺構の検出は未だ報告されていない。

中世以降の集落は旧中田村、旧刑部村、旧八尾木村の各集落範囲とはほぼ重複しており、それ以外の大半の土地は大和川の水を利用した耕作地となっていた。

## 2. 調査概要

### 1) 調査方法

今回の調査は公共下水道工事に伴うものであり、対象は人孔設置箇所のうち遺跡範囲に包括される15箇所である。大半の対象部分は旧刑部村内に位置する。調査区の大きさは2m×2mを基本とするが、場所によっては十分な大きさを確保できない場合もあった。また、工事方法は開削が中心であるが、No3・4調査区はライナープレートを使用している。掘削深度は工事方法によつて異なり、それぞれ1.6~3.0mと幅があった。

検出遺構は近世~近代の用水施設、井戸、土坑、溝と中世の曲物井戸、溝の他に古墳時代中期の土坑、弥生時代の遺物包含層で、弥生式土器、土師器、須恵器、埴輪、瓦器、青磁、陶磁器などがコンテナに3箱出土している。

調査期間は平成13年7月2日から10月9日で、実働日数は15日間であった。

### 2) 検出遺構と出土遺物

調査地点は15箇所を数えるが、北端と南端では300mの距離があるため、A~Dの4つのグル

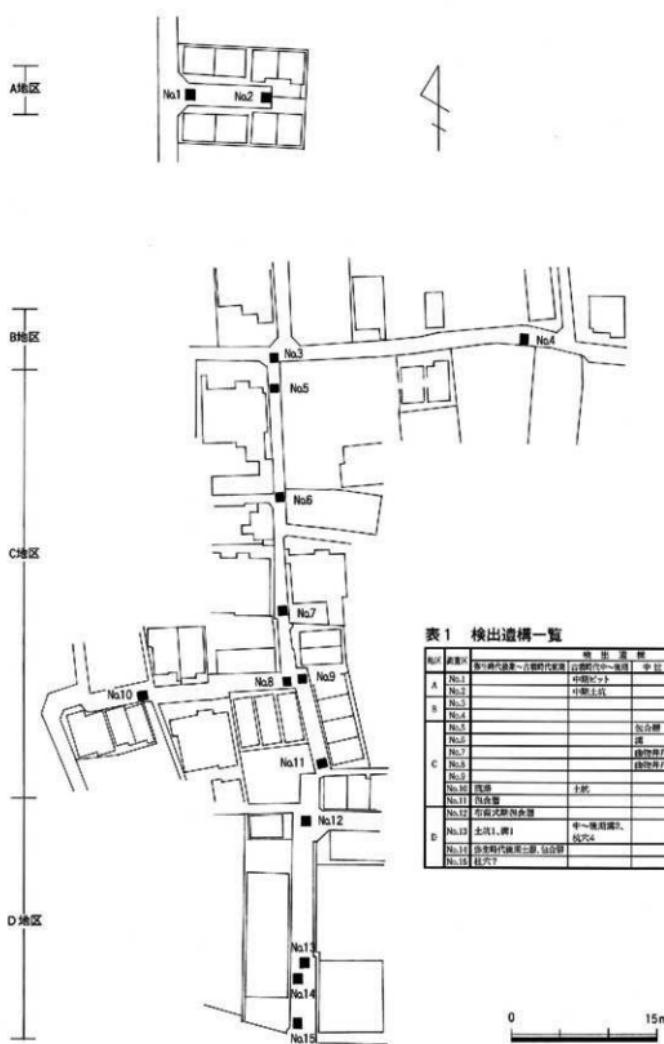
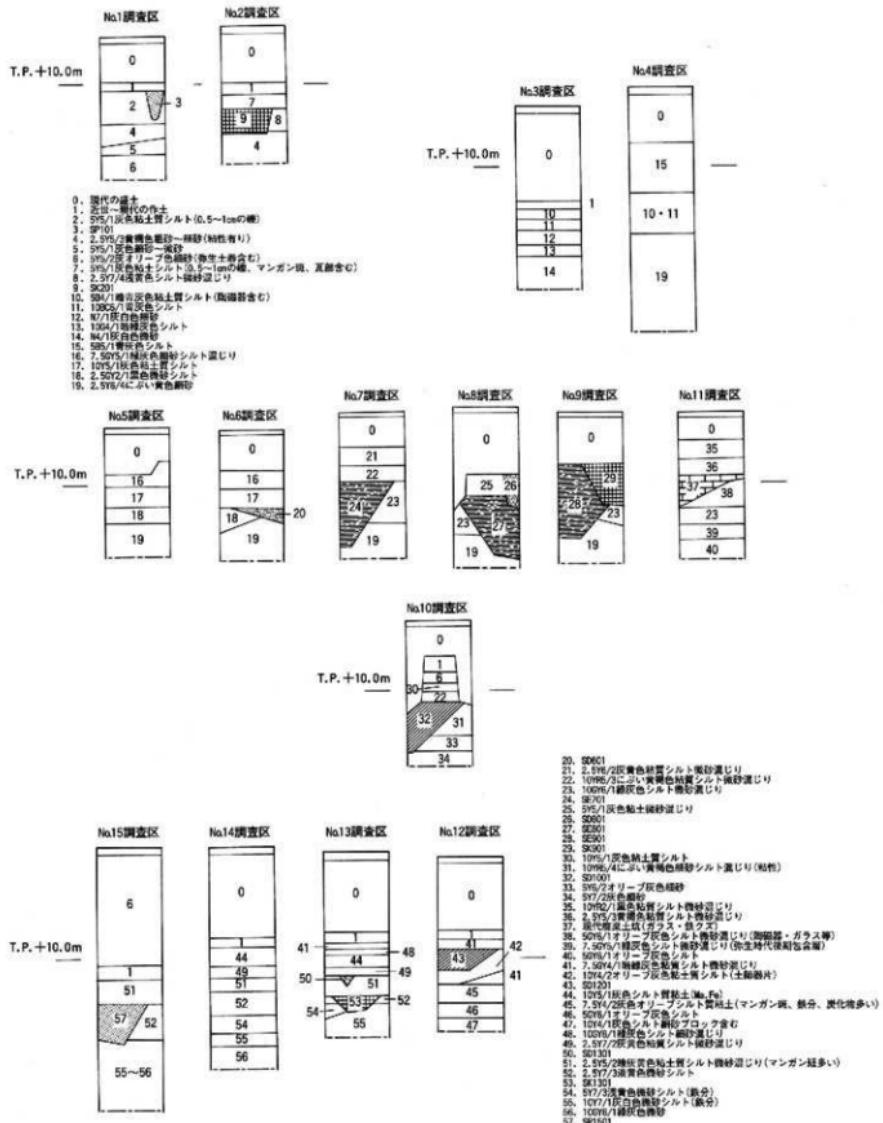


表1 検出造構一覧

地番	位置	構造	柱	壁	屋根
A	No.1 No.2	中庭式(?)			
B	No.3 No.4 No.5 No.6 No.7	小廊柱的			
C	No.8 No.9 No.10 No.11 No.12	通廊			
D	No.13 No.14 No.15	柱間代隔廊二段、柱公母			
	No.13 No.14 No.15	柱式?			

0 15m

第2図 調査位置図 (S = 1 / 50)



第3図 土層堆積状況図 (S=1/60)

一剖面を行った。A地区はNo 1・2調査区、B地区はNo 3・4調査区、C地区はNo 5~11調査区、D地区はNo 12~15調査区となる。このうちB、C地区が刑部の集落域に属する。以下A地区から記述する。

### [A地区]

B~D地区が現在の刑部集落内にあるのに対し、A地区はそれらとは離れており、B地区から北約300mに位置している。No 1調査区・No 2調査区は東西方向に設置される人孔部分である。既設人孔を撤去した後に調査を行うという工程であったため、断面観察が主体となった。現状の地盤高はT.P. +10.6~10.7mで、東に向かって高くなっている。

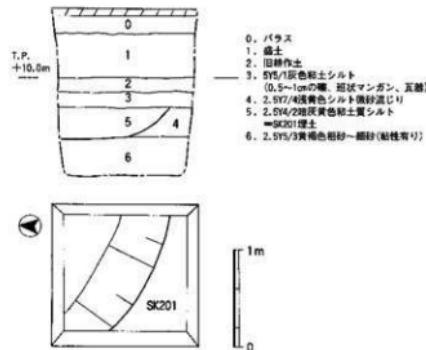
#### No 1 調査区

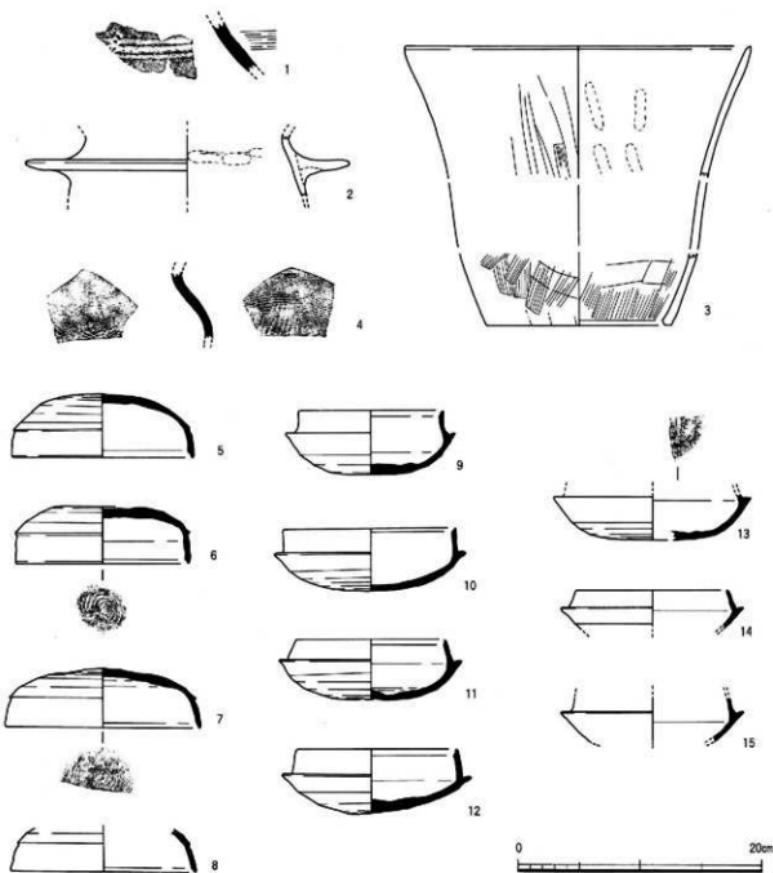
既設人孔と東西方向の排水管以外に北側には水道管があったため、南壁でのみ土層断面の観察が可能であった。地表下約0.58mまでは宅地内道路築造の際の盛土がされているが、耕作土除去後の地表下約0.67m (T.P. +9.93m) の灰色粘土質シルト上面が遺構面になるようであり、ピット (S P 101) 1基を壁面で確認した。埋土は暗灰黄色粘土質シルトで須恵器の器台脚部片 (1) が出土した。1は全体に磨滅しており、遺物が遺構面の時期を示しているとは考えられない。また、遺構面のベース層は層厚約0.38mで、土師器片などを含むが礫や細粒砂が多く混じっていることから整地層と考えられる。本調査区から南東約80mで行われた第24次調査ではT.P. +9.9m前後の細粒砂～礫の堆積層上面で平安時代の建物や井戸を検出していることから、整地及びピット構築もそれと同時期と推定される。地表下約1.1m (T.P. +9.6m) 以下では細礫～中礫が混じる細砂となり、河川による堆積層とみられる。

#### No 2 調査区

No 1 調査区と同様に壁面の観察が主体となつた。ここでは地表下1.0m (T.P. +9.7m) の浅黄色シルト微砂混じりを切り込む土坑 (SK 201) を確認した。

SK 201 円形あるいは楕円形を呈すると推定され、南壁で約1.1m、東壁で1.2mを測り、約0.32mの深さがある。埋土は暗灰黄色粘土シルトで、土師器長胴壺 (2)、瓶 (3)、須恵器壺片 (4)、蓋杯 (5~15) などが出土している。3は口縁が外反しながら、上方に立ち上がるタイプである。体部外面を板状工具によるナデ後ハケ、内面はハケあるいは板状工具によるナデで仕上げている。底部は欠失しているが、端部の切り込み形状から蒸気孔は楕円形の4孔に復元でき、さらに中央に円形の1孔があるものと推定される。把手の有無は不明である。蓋杯の蓋 (5~8) は最も大きなもので15.6cm、小さいもので14.2cm、杯身 (9~15) は口径11.7~14.2cmである。蓋6・7の内面天井部と身13の内面中心付近には同心円紋スタンプが加えられている。スタンプは1回ないしは2回押捺しており、江浦氏によるA





第5図 A地区出土遺物 (S=1/4) (1-S P101, 2~15-S K201)  
類に分類される。これらの蓋杯はT K47~MT15型式併行期に比定できる。

#### 〔B地区〕

刑部集落の中央を東西に貫いている道路において、No.3・4の2ヶ所の人孔部分を調査した。地盤高はT.P.+10.75~10.95mで、東側が高くなっている。また、No.4の東隣の人孔設置に伴う中田遺跡第42次調査では弥生土器の他に古墳の周濠と推定される遺構から形象埴輪や円筒埴輪、蓋杯や器台などの須恵器、土師器などが多量に出土している。

#### No.3 調査区

地表下約1.1mまでは既設管などの工事による埋土があり、その下T.P.+9.6mで近世から現代

の作上がみられる。10層中からは江戸時代中期頃の陶磁器片が出土するが、以下では遺構・遺物は確認できなかった。河川の影響による砂層堆積はT.P.+8.9mに遺存している状況からみてNo.5調査区からNo.3調査区にかけては0.5m程度の高低差があることがわかる。

#### No.4 調査区

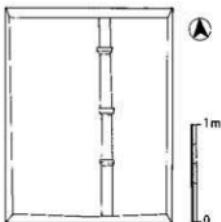
河川の影響による砂層堆積部分からの湧水が著しく、壁面が崩壊したため、充分な調査を行えなかった。地表下0.7mまでは現代の土層であり、地表下1.8mまでは青灰色系のシルト～粘土質シルトが堆積していたが、ここからは遺物は見つかっていない。また、1.8m以下(T.P.+9.2m前後)で上記の砂層となる。前述しているように東側約20mでは古墳に関連した遺構・遺物が確認されているが、ここではそのような状況は見出せなかった。しかし、第11層は第42次調査で弥生土器が出土した土層と近似しており、同一層の可能性がある。

#### [C地区]

刑部集落の中央を南北に貫通し、南にある府道柏村南本町線に接続する道路上を主体とする調査区であるが、旧村の集落外となる部分についてはD地点として区別した。現地盤高は北端のNo.5調査区でT.P.+10.71m、南端のNo.11調査区でT.P.+10.87mとなり、南に向かうにつれて高くなっている。

#### No.5 調査区

地表下0.9~1mの間にガス、水道等の4種類の既設管が道路に沿った形で敷設されていた。このうち1種は近代の用水施設に使用されていた陶製の導水管(16)で、3本が接続されている状況を確認した。管1本の長さは約61cmで、片側が受け口になっている。外径9.3cm、内径6.7cm、受け口側は外径14cm、内径10.4cmで、受け口の内面には縫いだ管の擦れを防ぐために数状の凹線を施している。これらの埋設管により、平面での遺構検出はできなかつたため、断面観察を主体として調査を行つた。



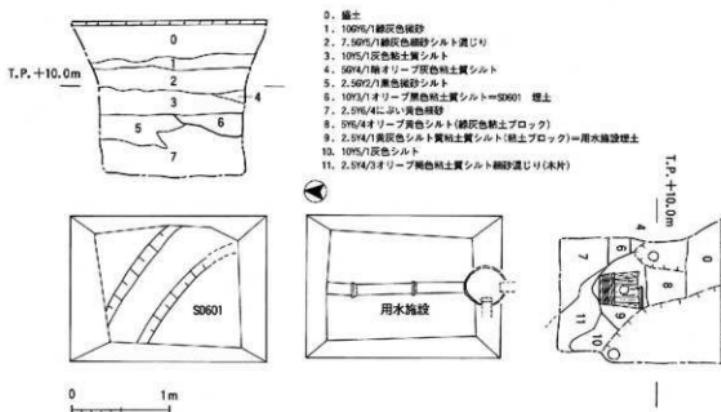
第6図 No.5 用水施設 (S=1/50)

盛土以下では4層が堆積しており、最下層の砂層以外で遺物が出土した。16層では瓦器羽釜(17)、17層では瓦器椀、瓦器鉢、平瓦片、18層では土師器羽釜胴部片が見つかっている。17は口径17.2cmで、口縁の外反は弱い。各土層からの出土遺物から16層は15世紀代、17層は14世紀代の堆積層と考えられる。

#### No.6 調査区

西側にガス管、東側に水道等の埋設管があったが、近代の用水施設と中世の溝(SD601)を検出した。

**用水施設** 地表下0.9m(T.P.+9.8m)で見つかった。施設の掘形は搅乱を受けて明確ではないが、断面から地表下約0.4m(T.P.+9.72m)が遺構構築面と考えられる。ここでは、陶製の導水管だけではなく、濾過と管の分岐を兼ねていたと推定される桥樋が遺存しており、これに管が接続されていた。樋は上部径40cm、底径34cm、高さ45cm、内法の高さ35cmで、下部にタガが5段重っている。T字路の中央に設置されており、3方から管が繋がっていた。上部には蓋があつ

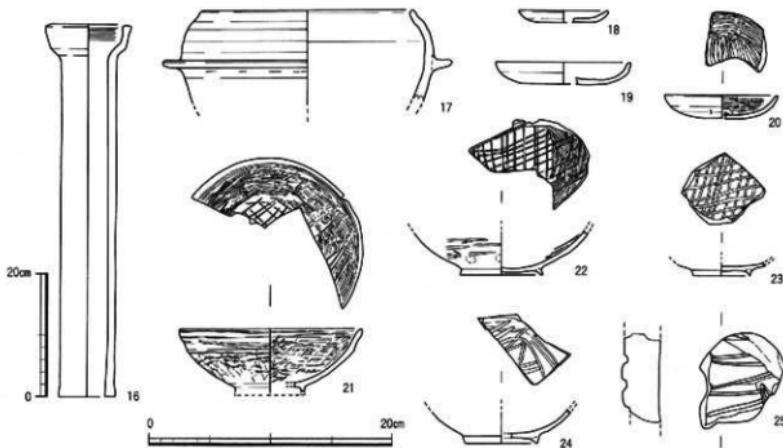


第7図 No.6 調査区平面図及び断面図 ( $S = 1/50$ )

たが取り外しが可能で、濾過作用によって内部に溜まつた砂を取り除いていたようである。

**S D 601** 地表下1m (T.P. +9.7m) で検出した。北西-南東方向にのび、幅約0.5m、深さ約0.12mを測る。埋土であるオリーブ黒色粘土質シルトより土器皿(18-19)と瓦器皿(20)、瓦器椀(21~24)、平瓦片や鬼瓦片(25)、馬齒などが出土している。瓦器椀は内面に格子状暗文と細かいヘラミガキが施されており、12世紀中葉に位置付けられる。

地表下1.3~1.4m以下では東側で砂層となり、西にむかって落ち込んでいく。



第8図 No.5・6 調査区出土遺物 ( $S=1/4$ 、16のみ  $S=1/8$ ) (用水施設-16 ( $S=1/8$ )、No.5-16+17、S D601-18~25)

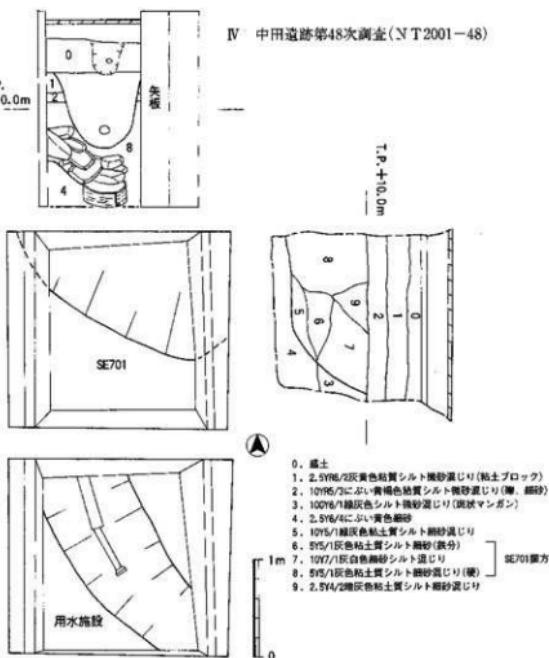
## No.7 調査区

上部では埋設管や近代～現代の  
擾乱が多く、土層には陶磁器と中  
世の土器が混在する状況であった。  
検出した遺構は近代の用水施設と  
中世の曲物井戸(S E701)である。

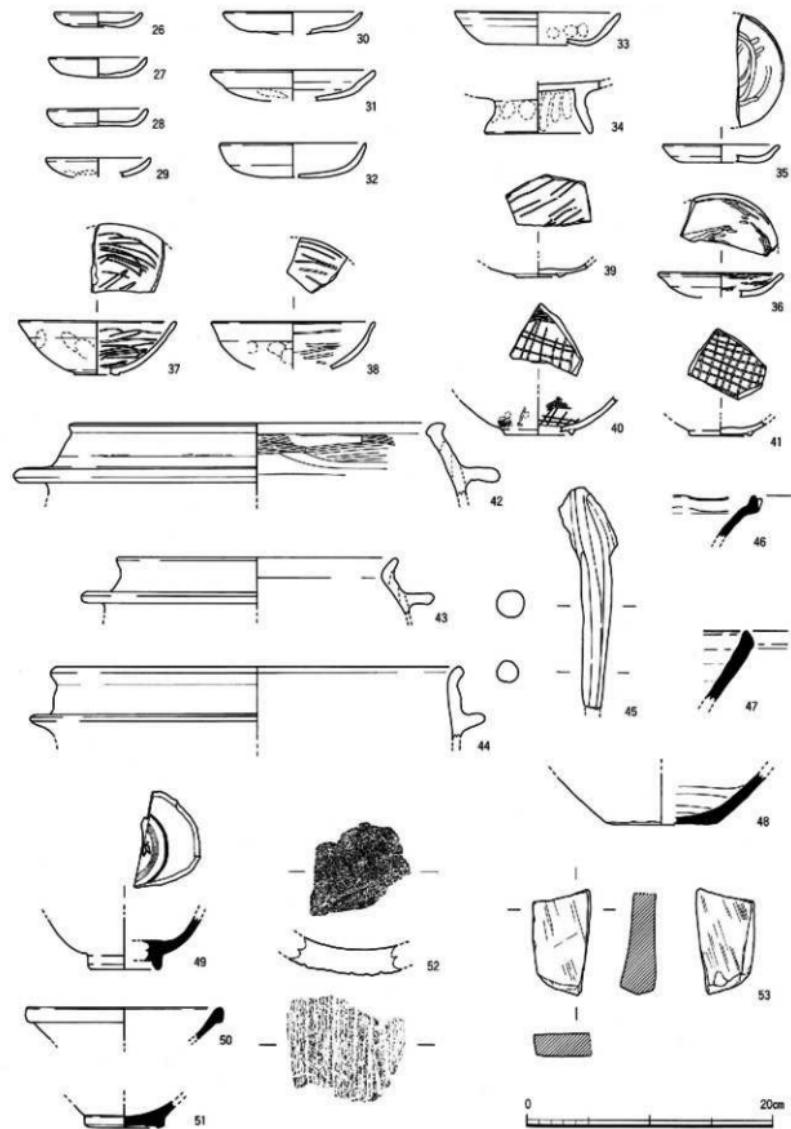
**用水施設** 地表下約0.52m  
(T.P.+10.63m)で検出した。掘  
方は北西～南西方向で幅約0.9m、  
深さ0.84mで導水管は掘方から約  
0.52m下で見つかった。管は竹製  
管に陶製管を接続していたが、北  
側には導水管がなく、抜き取られ  
ているようである。また、竹製管  
は陶製管よりも大きく隙間が顕著  
であった。この隙間に粘土などを  
詰めて使用していたのか、それと  
も抜き取った後の廃棄された状況  
であるのかは明確ではない。さら  
に南壁際では検出した導水管とは  
異なる方向の木製管の痕跡があつ  
たが関連は不明である。用水施設の埋  
土には近世陶磁に混じって瓦器、土師器片  
が出土し、下部に当該期の遺構の存在が予測された。

**S E701** 地表下0.87m (T.P.+10.0m)で検出した。調査区大半が掘方で、北壁際に井筒の  
中心があったため、検出面は本来の井戸構築面より下になってしまった。遺構は20～40cm大の礫  
が積み重なった下部に曲物1段が据えられていた。曲物は直径約45cm、深さ約12cmである。遺物  
は曲物の直上部付近で大量の礫と混じるような状態で、集中して出土した。このような状況から  
礫は井戸を埋める際に投じられたものではなく、井筒として使用されていたものが崩れたと考え  
られる。

遺物は土師器皿(26～33)、台付き皿(34)、瓦器皿(35・36)、瓦器椀(37～41)、土師器羽釜  
(42～44)、瓦器三足羽釜脚部(45)、須恵器鉢(46～48)、青磁碗(49)、白磁碗(50・51)、平瓦  
(52)、砥石(53)、須恵器壺、瓦器壺、板石などが出土している。このうち瓦器皿、椀、須恵器  
鉢、青磁碗、白磁碗、平瓦、板石などに焼成痕跡がみられる。青磁碗は破面に焼成痕があること  
から廃棄した遺物を井戸廃絶時に投棄したものと推定される。土師器皿は口径7.0～8.4cmの小皿  
と12.0～13.6cmの大皿に分けられる。瓦器椀は外面のミガキがなく、指頭痕が顕著に残る。内面  
は格子状暗文も散見されるが、平行線状暗文が多くなっている。高台も粘土紐を貼り付けただけ  
のものが出現している。羽釜は5種類あったがこのうち3種類を図化した。42・43はU縁が内傾  
した後に端部が外反するが、44は直線的に立ち上がった後に端部が外反する。49は高台削出しで、



第9図 No.7 調査区平面図及び断面図(S=1/50)



第10図 S E 701出土遺物 (S = 1 / 4)

高台の内面まで施釉している。龍泉窯青磁。51は高台削り出しで、外面には施釉されていない。内面の釉は2次焼成により融解している。53の砥石は両面に使用痕が認められる。井戸の廃絶時期は瓦器碗から13世紀末葉とみられる。

#### No.8 調査区

上部は埋設管による搅乱が著しい。近代～

現代の溝（S D 801）、杭痕跡（杭801・801）

および用水施設、中世の曲物井戸（S E 801）  
を検出した。

S D 801 南北方向にのび、地表下0.8mで検出した。幅約0.26m、深さ0.4mである。東肩で杭801・801が確認できた。溝から瓦器片が極少量出土しているが、層位から近世以降と思われる。

用水施設 地表下約1m付近にある既設管の下部（T.P. +9.8～9.9m付近）で見つかった。直径約20cmの枠樽に竹管を繋いでいたが、上部の既設管撤去の際に破損してしまったため、詳細は不明である。しかし、これはNo.6でみられたような樽とは大きさが異なっており、管も陶製ではなく竹製であるなど、仕様が違っている。これは時期的なものなのか、あるいは用途によるものなのかは明確ではない。

S E 801 地表下1.1m（T.P. +9.85m）の緑灰色シルト微砂混じり上面で検出した。井筒は4段の曲物で構成されていた様であるが、すべて最下段の曲物内に落ちこんでいた。出土遺物は最下層と廃絶時の覆土から土師器皿（54）と瓦器碗片（55）等が出土している。54は「て」字状の口縁で口径9.3cm、55は有機物の付着により不明瞭であるが、格子状暗文を有し、広大は台形で、「ハ」字状に開いている。11世紀末葉とみられる。

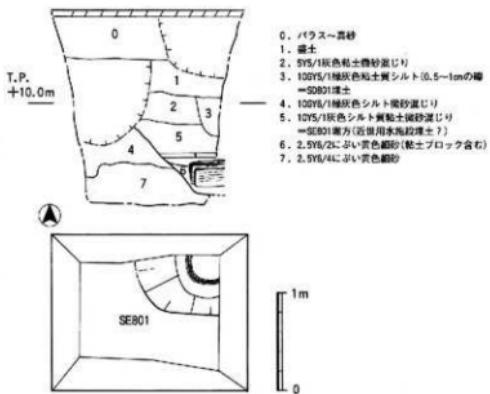
また、北壁では、上記の井戸廃棄後の覆土中（T.P. +9.4～9.5m付近）に直径4～5cmの竹製の樋管が東西方向に伸びていることが確認された。管付近では陶磁器片が出土し、近世以降に設置されたものと考えられる。

#### No.9 調査区

地表下約0.65mで、近世～近代の井戸（S E 901）と土坑（S K 901）を検出した。

S E 901 素掘りで、土坑の可能性を残すが、砂層まで掘削されており井戸と判断した。調査区全体に広がるため土層断面での確認となった。深さ約0.95mで、覆土は下部が微砂混じり粘土、上部が暗緑灰色シルト粘土砂混じりに灰色シルトがブロック状に入る。いずれも陶磁器、陶器掘り鉢、瓦片などが出土する。

S K 901 S E 901を切り込んで構築されている。検出長は南北約0.97m、東西約1.4mで、深さ約0.53mを測る。覆土は3～5mmの砂粒を含む黄灰色微砂シルトで、陶磁器、土人形（56）などが出土している。56は恵比寿像で、左足を折り曲げ、左手脇に胸を抱えている。粘土の型押し



第11図 No.8 調査区平面図及び断面図(S=1/50)

（A）

SE801

1m

0

（B）

1m

0

（C）

1m

0

（D）

1m

0

（E）

1m

0

（F）

1m

0

（G）

1m

0

（H）

1m

0

（I）

1m

0

（J）

1m

0

（K）

1m

0

（L）

1m

0

（M）

1m

0

（N）

1m

0

（O）

1m

0

（P）

1m

0

（Q）

1m

0

（R）

1m

0

（S）

1m

0

（T）

1m

0

（U）

1m

0

（V）

1m

0

（W）

1m

0

（X）

1m

0

（Y）

1m

0

（Z）

1m

0

（AA）

1m

0

（BB）

1m

0

（CC）

1m

0

（DD）

1m

0

（EE）

1m

0

（FF）

1m

0

（GG）

1m

0

（HH）

1m

0

（II）

1m

0

（JJ）

1m

0

（KK）

1m

0

（LL）

1m

0

（MM）

1m

0

（NN）

1m

0

（OO）

1m

0

（PP）

1m

0

（QQ）

1m

0

（RR）

1m

0

（SS）

1m

0

（TT）

1m

0

（UU）

1m

0

（VV）

1m

0

（WW）

1m

0

（XX）

1m

0

（YY）

1m

0

（ZZ）

1m

0

（AA）

1m

0

（BB）

1m

0

（CC）

1m

0

（DD）

1m

0

（EE）

1m

0

（FF）

1m

0

（GG）

1m

0

（HH）

1m

0

（II）

1m

0

（JJ）

1m

0

（KK）

1m

0

（LL）

1m

0

（MM）

1m

0

（NN）

1m

0

（OO）

1m

0

（PP）

1m

0

（QQ）

1m

0

（RR）

1m

0

（SS）

1m

0

（TT）

1m

0

（UU）

1m

0

（VV）

1m

0

（WW）

1m

0

（XX）

1m

0

（YY）

1m

0

（ZZ）

1m

0

（AA）

1m

0

（BB）

1m

0

（CC）

1m

0

（DD）

1m

0

（EE）

1m

0

（FF）

1m

0

（GG）

1m

0

（HH）

1m

0

（II）

1m

0

（JJ）

1m

0

（KK）

1m

0

（LL）

1m

0

（MM）

1m

0

（NN）

1m

0

（OO）

1m

0

（PP）

1m</p

成形だが、側面は面取りを行っており、底部には棒のねじ込みによる穿孔がある。

このようにいすれの遺構からも陶磁器が主体として出土しており、17世紀以降に比定される。

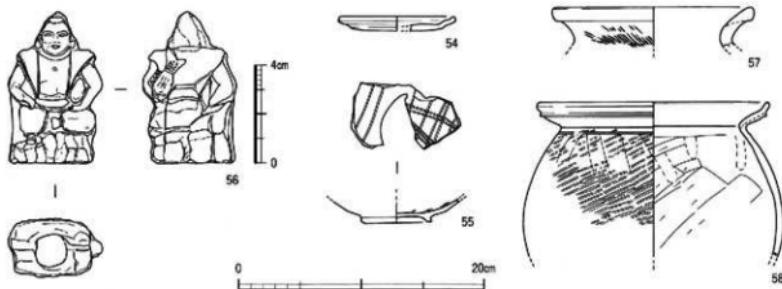
#### No10調査区

ここでは土坑（SK1001）と流路（SD1001）を検出した。

SK1001 地表下0.8m (T.P. +10.0m) の灰色粘土質シルト上面で検出した。調査区外にのびるが、東西長0.85m、南北長0.4m、深さ0.6mを測り、埋土である淡灰色微砂混じりシルトから遺物は出土していない。しかし、上部層から須恵器片が見つかっており、古墳時代のものと考えられる。

SD1001 地表下0.95~1m (T.P. +9.65~9.70m) で西肩部を検出した。埋土は灰黄~灰色細砂とにぶい黄褐色砂質シルトで、深さは約0.54m以上である。サヌカイト剥片が出土している。流路が切り込んでいる土層は黄褐色シルト細砂混じり上面であり、本来流路はさらに西に広がっていたものと思われる。また、この土層からは土師器極細片が出土している。

そして地表下1.3m (T.P. +9.5m) 以下では全体が砂層となる。



第12図 No. 8~11調査区出土遺物 (S=1/4、56のみ S=1/2) (No. 8—54・55、No. 9—56、No. 11—57・58)

#### No.11調査区

地表下0.4mで作土がみられ、その直下に近・現代のゴミの廃棄土坑があるなど地表下1.3mまでは攪乱が顕著であった。しかし、地表下1.5~1.6m (T.P. +9.5m前後) で、弥生時代後期の包含層が確認できた。包含層は緑灰色粘土シルト微砂混じりとオリーブ灰色シルトの2層（層厚約0.3m）で弥生時代後期初頭の壺（57・58）などが出土している。57は頭部外面にタタキの痕跡が残る。58は明瞭な段をもつ受け口状の口縁で、外面はタタキ後ハケ、内面はヘラケズリを施している。

#### 〔D地区〕

C地区と同じ南北にのびる道路で、旧刑部村の集落から外れている部分に位置するNo.12~15の4つの人孔をD区として区別した。現地表はNo.12付近でT.P. +11.23m、南端のNo.15付近でT.P. +11.42mを測り、南側に向かうにつれて高くなる。

## No.12調査区

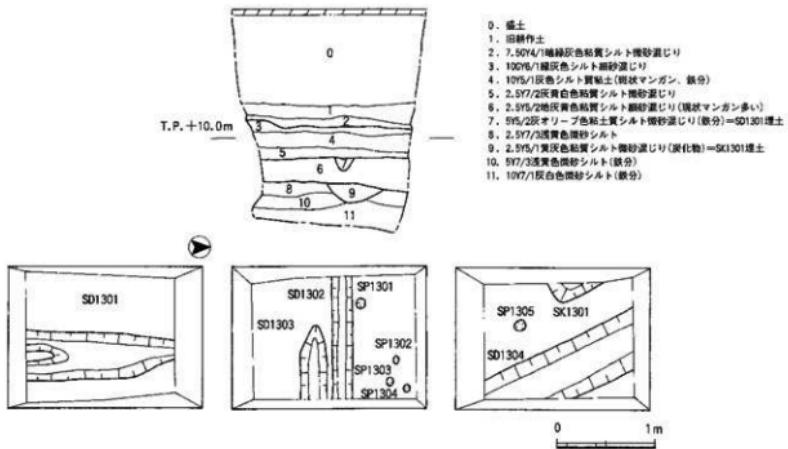
地表下0.9mまでは搅乱および盛土層であるが、流路（S D1201）と布留式期の包含層を確認した。

S D1201 東南-西北にのびる流路で地表下1.1m（T.P.+10.1m前後）で検出された。幅約1m、深さ0.22mで暗オリーブ灰色微砂シルトを埋土とするが、瓦片などが出土していることから近世以降に掘削されたものであろう。

布留式期の包含層は地表下1.5m（T.P.+9.7m前後）にあるオリーブ灰色シルト質粘土（層厚0.25m）で、土師器壺（59～61）が出土している。59は布留壺、60は内面をヘラケズリする壺で、外面にハケが僅かにみられる。61はV様式系の壺で、外面をタタキ後ヘラケズリ、内面下半を板状工具によるナデ、上半は指ナデを行っている。これらの遺物が出土していることから下部層のオリーブ灰色（T.P.+9.45m前後）が遺構面になると考えられる。

## No.13調査区

近世の溝1条（S D1301）、古墳時代中～後期の溝2条（S D1302・1303）とピット4基（S P1301～1304）、古墳時代初頭の土坑1基（S K1301）と溝1条（S D1304）とピット1基（S P1305）を検出した。



第13図 No.13調査区平面図及び断面図(1/50)

S D1301 地表下1.1～1.2m（T.P.+10.2～10.1m）の緑灰色シルト細砂混じり上面で検出した。南北方向に伸び、幅約0.47m、深さ0.08mで、埋土である黄灰色粘質シルト微砂混じり（炭化物含む）からは陶磁器、瓦器、須恵器片が出土している。

古墳時代中～後期の遺構面は地表下1.53m（T.P.+9.8m前後）の暗灰黄色粘質シルト上面である。ベース層からは、IV期の朝顔形埴輪片（62）が出土している。

S D1302 東西方向に伸び、幅0.32m、深さ0.22mを測る。埋土は灰オリーブ色粘土質シルトで、土師器、須恵器などの碎片が出土している。

S D1303 幅0.21m、深さ0.16mを測り、埋土は灰オリーブ色粘質シルトで、土師器の極細片が出土している。

古墳時代初頭の遺構面は地表下1.78m (T.P. +9.56m前後) に遺存する浅黄色微砂シルト上面である。ベース層からは長頸壺や布留甌の碎片が出土する。

S K1301 調査区外にのび、全容は不明であるが、南北長0.22m以上、東西長0.46m以上、深さ0.18mで、炭化物を含む黄灰色粘質シルトの埋土からは土師器碎片が出土している。

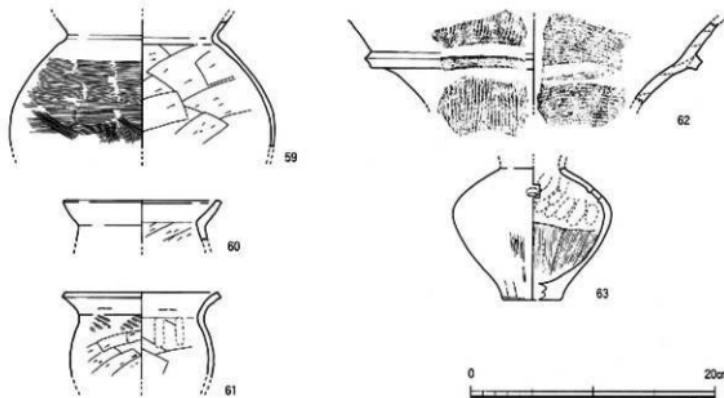
S D1304 幅0.55m、深さ0.46mで、埋土は上部がにぶい黄橙色粘土シルト、下部がオリーブ黒色粘土シルトの2層に分けられ、弥生式土器の細片とともに土師器片が出土している。

#### No.14調査区

地表下1.8mの褐色シルト（層厚0.2m）では土師器碎片が出土していることから古墳時代初頭の包含層とみられる。この下部層 (T.P. +9.6m前後) が、No.13調査区で確認した遺構面に相当するとみられるが、遺構は認められなかった。また、遺構面を構成する土層中からは弥生時代後期の細頸甌 (63) の体部が出土している。63は生駒西麓産で、体部上半に1孔を焼成前に穿孔している。頸部までの器高が約11cmと小型である。

#### No.15調査区

地表下1.5mまでは搅乱がみられたが、地表下1.6m (T.P. +9.8m前後) の土層中から土師器片が見つかっている。そしてこの下部層 (T.P. +9.5m前後) で小穴あるいは柱穴とみられるビット1基 (S P1501) を検出した。埋土は橙色シルトと暗褐色シルトの2層にわけられるが、遺物などは出土しなかった。



第14図 Na12~14調査区出土遺物 (S = 1/4) (Na12-59~61、Na13-62、Na14-63)

### 3.まとめ

#### 1) 調査成果

〔弥生時代後期～布留式期〕

C地区南側とD地区で検出される。この時期の遺物が見つかったのはC地区南端のNa11調査区

の第41層とD地区のNo12～15調査区である。No11ではT.P.+9.47m前後で遺物包含層を確認できた。D地区ではT.P.+9.45～9.6m前後が遺構面となり、土坑、溝、柱穴？などが検出できた。また、C地区のNo10調査区ではサヌカイト剥片を包藏する流路(T.P.+9.85m)が見つかっている。また、流路のベースとなる33層から土師器片が出土している。

#### 〔古墳時代〕

A地区のNo2調査区の(T.P.+9.70m)で土坑が検出され、T.K47～M.T15型式併行期の蓋杯、土師器長柄壺等が出土している。やや時期は遅るが(財)八文研が刑部集落内で行った中田第42次調査ではT.K208～23型式併行期の遺物が出土し、形象埴輪、円筒埴輪、朝顔形埴輪や土師器壺、高杯などが周濠と推定される遺構(T.P.+9.40m)で見つかっている。また、C地区No10調査区では土坑が、D地区No13調査区では中～後期の溝と杭孔が見つかっている。

#### 〔中世〕(鎌倉時代～室町時代)

C地区で頻著であり、No7及びNo8調査区で曲物を井筒に使用した井戸を検出した。No7調査区は曲物は1段で、その上部には人頭大の礫が多数あった。こうした状況から最下段のみ曲物で、この上は疊積みによる井筒であったものと推定される。No8調査区では4段の曲物を使用していたが、すべて最下段に落ち込んでいた。これらは12～13世紀に使用されていたものとみられる。

No6調査区では(T.P.+9.70m)で北西～南東方向の溝を検出し、瓦器塊、土師器皿、馬齒などが出土している。また、このNo6調査区及び南隣のNo5調査区では13～15世紀の遺物包含層を確認している。

#### 〔近世・近代〕

No8調査区で溝とこれに付随するとみられる杭を検出した。南側のNo9調査区では漆塗りの井戸と溝が見つかり、陶磁器、鉢などが出土した。また、No5～8調査区で竹、木、陶等の導水管を用いた用水施設を検出した。このうちNo6・8調査区では二種類の材質が異なる導水管が見つかっている。また、樽を会所に用いて管を接続することによって道路に合わせて分岐させていることも確認できた。同様の用水施設は刑部集落内では市教育委員会の中田遺跡(98-550)の調査でも確認されている。

以上のように今回は弥生時代後半から近代までの遺構が検出された。刑部集落内は中世を中心とする遺構が良好に遺存しており、他の調査区でも古墳時代から弥生時代末期の遺構・遺物がみられた。そして、それ以前は河川によってもたらされた砂層堆積が確認される。砂層はC区ではT.P.+9.5～9.7mにあり、中世遺構面は砂層よりも上位に堆積するシルト層に構築されている。

#### 主要参考文献

- ・江浦 洋 1986「同心円文スタンプを有する須恵器蓋杯の製作技術」『鶴谷池遺跡』明石市教育委員会・同志社大学考古学研究室
- ・原田昌則 1995「中田遺跡(第24次調査)」「中田遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告49」財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一 2000「中田遺跡(第42次調査)」「財団法人八尾市文化財調査研究会報告65」財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・吉田野乃 2000「中田遺跡(98-550)の調査」「八尾市内遺跡平成11年度発掘調査報告書II」八尾市教育委員会

## 2) 中河内における中世集落の成立と変遷—中田遺跡と東弓削遺跡をモデルとして— 1. はじめに

旧大和川は河内平野で二条の大きな流れ（玉串川と長瀬川）に分かれ、その河川に挟まれた沖積地は肥沃な大地を形成している。中田遺跡はこのような沖積地上に立地している。遺跡範囲には近世集落として中田村と刑部村が営まれていた。また北側に隣接する東弓削遺跡との境界には八尾木村がある。八尾木は天文二十三年（一五五四）に三条西公条卿が著した「吉野詣記」にその名前が記されている。「是より河内国八尾木の金剛蓮華寺という寺をさして行きつきにけり」とあり、また「この八尾といふところは鷺の名所なり、よのつねのは尾十二枚かさなれり、この所のは尾八枚かさね、すぐれたる申しけり」と八尾という名称の起源に係る話が著されている。この話から少なくとも16世紀中頃には八尾木という村がすでに存在していたことがうかがえる。しかし、三条西公条卿が参った金剛蓮華寺は現存していないし、場所も定かでないことから天文年間と現在とでは八尾木村の範囲あるいは位置が異なっているものと考えられる。こうした村域の変化は中田村と刑部村にもいえると思われる。今回は中世集落の成立を発掘調査例から捉え、その集落がどのように近世集落へ移行していくかを考える。また、現在に残る字名と中世集落との繋がりを検討し、集落範囲を考古学的成果と字名の両方から検討してみたい。

### 2. 中世集落についてのこれまでの研究

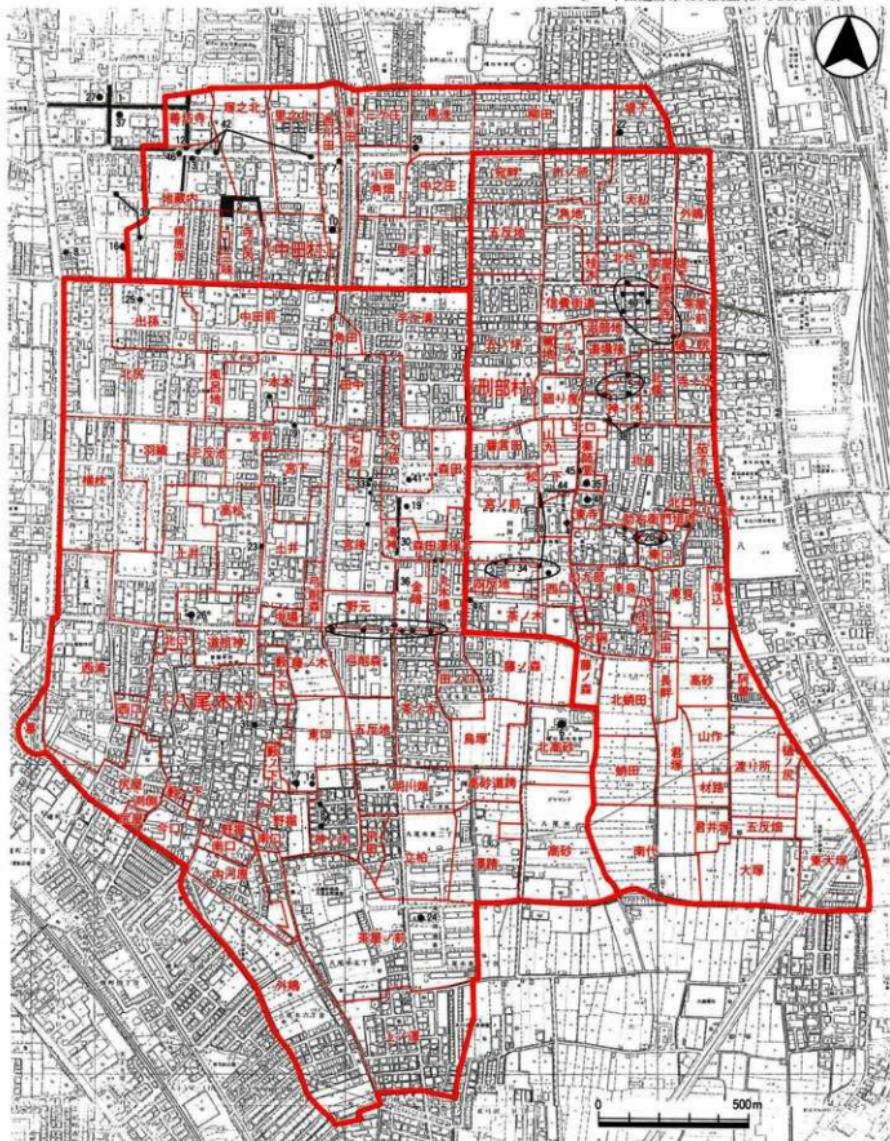
発掘調査を基とする中世集落の研究では検出された遺構群、とくに建物や井戸、樋、濠の配置や規模、構造から建物の性格を推定し、各建物に居住する人々の階層的構成やその変動性を導き出す作業が行われてきた。しかし、トレンチあるいはグリット調査を行う市においては生活痕跡の把握はできるが、集落の実態についての研究は不可能である。そこで、出土遺物から集落の消長について捉えることを主題にし、これまで中世集落の成立と衰退の画期について論及されている事項についてまとめておこう。

中世集落における画期について論及されたのは1977年の原口正三氏による「古代・中世の集落」である（1）。原口氏は高槻市の宮田A遺跡他2遺跡を取り上げて古代集落と中世集落の相違を明らかにし、「・・・十世紀後半から十一世紀前半に（とくに後者）その変革期があるのであろう。」とした。

次に植木久氏は大阪市長原遺跡の調査から10世紀から11世紀の前半の屋敷地が各坪毎に分散化し、11世紀後半以降坪内に集中して建て替えが行われ14世紀まで継続することを述べた（2）。また、柱配置、柱間寸法など建物の形態や仕様の変化から百姓名の解体・小百姓層成長を把握した。

1984年には石神怡氏が堺市菱木下遺跡など4遺跡の調査報告書（3）において和泉地方を中心とした古代～中世の集落の成立について10世紀に第一の画期があり、12～13世紀にかけて第二の画期があると考えた。また、このなかで、中世における開発は寺院が深い関わりをもっていることを旨及している。

翌年、佐久間貴士氏は中世村落を中心として考察を展開（4）し、その成立の画期を11世紀と認め、11世紀後半には集村化する傾向のあることを述べた。また平安時代後期の寺院の急増については「在地における富の蓄積を背景としている。」とし、在地領主層の成長と大きな関わりがあることを示唆した。そして、14世紀末～15世紀には一旦集落は消失し、居館を含めたより大き



第15図 調査地及び字名図(S=1/8000)

表2 中田遺跡・東弓削遺跡中世遺構検出一覧  
中田遺跡調査会・中田遺跡調査センター

地點	調査番号	施 出 遺 墓	状 況	出 上 遺 物	時 期	他の遺構・ 施設		文 献
						施設	施設	
1 小田道跡調 査会(北区)	曲物井戸上蓋井戸、 柱、上灰、溝等の 多數	広範囲に面 する複数の回廊 を行って、 青瓦、白磁、丸瓦、漆器、鈎刺、漆器木 片、櫛、刀子、古鉄 等	黒色土器・瓦器陶・灰・土器鋳造・浴槽等	11世紀～13 世紀	弥生後期～ 古墳中期の 遺構	中田遺跡(北区) 斧削副貝類要 中田遺跡副貝類報告 I 1974 (遺 跡実測図が記載されている)		
2 小山田跡調 査会(新宿区)	曲物井戸、十差井 戸、土器窯り井戸	瓦器陶、上耕植			古墳時代建 物、井戸		中田遺跡(南区) 発掘調査概要	
3 中田遺跡調 査会(新宿区)	虎瓦集積、柱穴、土 坑	駆逐場所は約 500mであった。	黒色土器・瓦器陶・灰・土器鋳造・浴槽等 丸瓦・丸瓦	11世紀～13 世紀後半	弥生後期～ 古墳中期の 遺構	中田遺跡調査報告 I 1974		

八尾市教育委員会

地點	調査番号	検出遺構	状況	出 土 墓 物	時 期	他の遺跡・遺物	文 献
4	小田遺跡調査 四輪車調査		遺跡の南 北方内に 4トレンチ	瓦器・土師器・羽釜・軒平瓦			小田遺跡調査報告 II 1975
5	中山遺跡 (河原地区)	曲物力 <sup>12</sup> 、ピット	防塁地盤	瓦器・機械	弥生・奈良 時代	昭和51・52年度 埋蔵文化財発掘 調査年報	
6	東原遺跡 (第1次)	水田面				昭和57年度における埋蔵文化財発 掘調査	
7	63-393	井戸 (井戸側は幅3 横幅み)	内部 (へそ丸、瓦器羽釜、壺り鉢、 瓦)・壺り方 (磁石、瓦羽輪)	15世紀中葉		八尾市内遺跡平成光年度発掘調査 報告書 II 1990.3	
8	90-89	台舟層		瓦器・土師器組	12世紀後半～ 13世紀初頭	八尾市内遺跡平成2年度発掘調査 報告書 I 1990.3	
9	90-540	溝状遺構、包含層		瓦器一足羽釜・瓦器鉢	縄文時代		"
10	90-412	土坑		瓦器鉢・土師皿・壺り鉢・須恵器組	14世紀前半		"
11	91-353	溝1、ピット、溝2 3時期の遺 構面	溝1 (瓦器・土師器・瓦器羽釜・壺り鉢・ 火舎)、溝2 (瓦器鉢・土師器組・平 瓦)、縄文四耳釜	12世紀後半 ～13世紀初 頭・15世紀		八尾市内遺跡平成4年発掘調査 報告書 II 1993.3	
12	92-312	溝1、上坑1、瓦器 確認区遺構、溝2 溝出	3時期の遺 構面	溝1 (瓦器・土師器・瓦)、溝2 (土師 器皿・軒丸瓦・馬鹿)、瓦器鉢・同安 窯系青磁瓶、金銅製金具	12世紀末・13 世紀中葉～ 後半		"
13	92-598	表面り井戸		瓦器陶・瓦器皿・十郎器組・羽釜・須恵 器・平瓦 (焼成度)	12世紀中葉	出土	八尾市内遺跡平成5年度発掘調査 報告書 II 1994.3
14	94-484	溝		土師器・須恵器・瓦・陶埴土器	10世紀後半	奈良時代末 ～平安前半	八尾市内遺跡平成6年度発掘調査 報告書 I 1995
15	95-22	溝 (区画溝?) 2条の溝	異なるた く設けられ た溝	瓦器鉢・土師器皿	12世紀後半 ～13世紀前 半		八尾市内遺跡平成8年度発掘調査 報告書 II 1997.3
16	96-718	落ち込み、ピッ ト、包含層		瓦器・土師器	縄文時代	9世紀、庄 内・布留	八尾市内遺跡平成9年度発掘調査 報告書 I 1998.3
17	96-565	土坑、溝			12世紀末～ 13世紀後半	奈良時代末 ～平安前半	"
18	97-188	土坑、溝		瓦器・土師器皿、羽釜、瓦	13世紀後半	奈良時代の 遺物等	八尾市内遺跡平成9年度発掘調査 報告書 II 1998
19	98-186	落ち込み、杭列	上部解	瓦器・瓦器・須恵器	中世		八尾市内遺跡平成11年度発掘調査 報告書 I 2000.3
20	98-550	堀跡遺構、溝、柱跡		上師器皿・瓦器鉢・土師器羽釜	13世紀～14 世紀		八尾市内遺跡平成11年度発掘調査 報告書 II 2000.3
21	199-114	上坑あるいは溝		瓦器鉢・土師器羽釜・瓦器羽釜・人形 羽釜	14世紀初頭		八尾市内遺跡平成12年度発掘調査 報告書 I 2001.3

(財)八尾市文化財調査研究会

地点	調査番号	検出遺物	備考	出土遺物	時代	他の遺物	文献
22	87-01	水田	新尚で確認	瓦器焼	繩文時代前期	弥生後期の 沼、井戸	八尾市文化財調査研究会報昭和 62年度 1998
23	89-01	土坑(2落ち込み又 は復原)		土器類(テ字灰)・瓦器・須恵器等	12世紀後葉	弥生後期へ 後期	平成4年八尾市埋蔵文化財発掘 調査報告(II) 1992

## (財)八尾市文化財調査研究会

地点	調査番号	検出遺構	備考	出土遺物	時期	他の遺構・遺物	文献
24	HY87-3	数枚の水山面			平安～室町		(財)八尾市文化財調査研究会報告40 1994
25	90-05	上坑1・小穴1・断溝3	廻耕に伴う遺構か		平安時代以降	布留式期の土坑	中田道勝 (財)八尾市文化財調査研究会報告49 1995
26	91-08	井戸5・土坑6・溝7・樋、ビット32、十脚器皿集落	開発地か、由於に紀半坑	十脚器皿・羽釜・瓦器・青磁・白磁・東播系須恵器等	11世紀後半～14世紀末(3期)	奈良時代、埴輪	〃
27	91-09	十坑2・溝1・小穴4(柱穴)		十脚器皿・瓦器等・皿・羽釜・東播系須恵器等	12世紀中～後葉	江戸時代の耕作溝	八尾市埋蔵文化財発掘調査報告34 1995
28	92-11	河川・包埋		瓦器・瓦	中世		八尾市埋蔵文化財発掘調査報告1993
29	92-12	河川・池状溝		土師器皿・瓦器椀	鎌倉時代前期	布留式期の土坑地	〃
30	92-14	河川1・溝21	排水溝?	瓦器・土師器皿	14世紀前葉	弥生後半～布留	中田道勝 (財)八尾市文化財調査研究会報告56 1997
31	HY92-6	曲物井戸		羽釜・瓦器椀	12世紀末～13世紀前葉		(財)八尾市文化財調査研究会報告39 1993
32	93-18	洪沢砂・水山?	断面で確認		中世頃		(財)八尾市埋蔵文化財発掘調査報告43 1994
33	93-20	水田(人足・牛足跡)・溝1	洪沢砂で覆われる		中世以降	古墳時代前期～後期	〃
34	93-21	水山・河川	〃		中世	古墳時代後期	〃
35	94-24	曲物井戸2・土坑2、2時期に分離立住建物、溝	かれる	SE1-土師器皿・台付き瓦皿・土器・瓦器・板・皿 SE2-土師器皿・瓦器椀・櫃・七脚器皿・盆・石・建窓部材	12世紀後葉・奈良時代	弥生後期～奈良時代	中山道勝 (財)八尾市文化財調査研究会報告49 1995
36	94-25	水田跡	洪沢砂で覆われる	土師器皿・瓦器片	鎌倉時代後期	庄内・赤堀、奈良時代	中田道勝 (財)八尾市文化財調査研究会報告56 1997
37	94-26	曲物井戸3・小穴15・溝24	2時期あり	土師器皿・瓦器椀・皿・七脚器皿・盆・石・建窓部材	12世紀後葉～13世紀中葉	布留式期の土坑	(財)八尾市文化財調査研究会報告61 1998
38	94-28	小穴・溝		瓦器椀・皿・土師器皿・東播系須恵器等	12世紀後葉～13世紀中葉	奈良時代	中田道勝 (財)八尾市文化財調査研究会報告49 1995
39	95-29	上坑・溝		瓦器・土師器皿・瓦	鎌倉時代	弥生後期・古墳前期	(財)八尾市埋蔵文化財発掘調査報告53 1996
40	95-30	溝、七坑、ビット	溝は区画溝あるいは塗か?	瓦器皿・皿・十脚器皿・羽釜・東播系須恵器等	12世紀中葉～13世紀中葉	弥生後期～奈良時代	(財)八尾市文化財調査研究会報告61 1998
41	95-32	水田(時跡・牛足跡)・溝	洪沢砂で覆われる	瓦器・土師器	鎌倉時代	弥生時代後期の河川	(財)八尾市文化財調査研究会報告53 1996
42	96-33	十坑／溝5・土坑3・小穴15		土師器皿・瓦器椀・羽釜・東播系須恵器等	13世紀後葉	弥生時代後期の河川	(財)八尾市文化財調査研究会報告60 1998
43	96-34	河川・水田	丸瓦		平安末	古墳時代前期	〃
44	97-37	溝3・小穴		瓦器椀・土師器	平安時代後半	弥生後期・古墳前期・埴輪	(財)八尾市文化財調査研究会報告66 2000
45	97-38	曲物井戸		瓦器椀・土師器羽釜・平瓦	12世紀中葉	弥生後期・奈良時代	〃
46	97-39	上坑		土師器・瓦器椀・瓦色土器	鎌倉～室町時代		(財)八尾市文化財調査研究会報告62 1999
47	97-40	土坑?		平瓦	中世	古墳時代後期	〃
48	99-44	土坑12・溝5		黒色土器・土師器皿・瓦器椀・瓦器等	12世紀～13世紀	古墳時代後期	八尾市埋蔵文化財調査研究センター報告21平成12年度

下水道工事やビット調査については遺構検出場所のみを地図に記載している。

な集村化と新たな再編が行われるものとしてこれをもうひとつの画期とした。

広瀬和雄氏は1986年の論考（5）のなかで古代～中世の建物群を構成から4類型に分け、村落の経営主体における階層性の変化を分析した。そして古代村落が解体し、中世村落が形成される10世紀後葉を大きな画期とし、10～12世紀の村落の特徴として孤立分散、階層的構成、変動性を挙げた。もうひとつの画期は濠や堀を有する防衛的施設を完備する建物が出現する13世紀前葉とし、特定の主体的人格を中心とする「多数の小集団が一区画に集中した」という点ではわが農村の変遷過程における最大の画期のひとつ」とみて、これを領主層の成立過程と解した。また14世紀以降の集落の多くは現代のそれと重複しているものと推測している。

90年代にはいって中世集落の調査件数が増加し、府下では長原遺跡・喜連東遺跡の中国陶磁器の出土傾向から集落動向を検討した佐藤隆氏（6）や日置荘遺跡の村落構造を遺構と遺物から検討した鈴木俊夫氏（7）をはじめとして多くの研究がなされている。

### 3. 中田遺跡・東弓削遺跡の発掘調査

中田遺跡では大阪府教育委員会による安中・教興寺線の道路の調査（8）を端緒に、中田遺跡調査会と中田遺跡調査センターによる区画整理事業に伴う調査によって弥生時代から中世にかけての複合遺跡であることが認識された。これ以降、当調査研究会だけで50次におよぶ調査を行っており、また市教育委員会や府教育委員会によっても再三調査を実施している。

しかし、その多くは下水道工事に伴う人孔部分を対象としたものであり、遺跡の全貌が明らかになったとは言いがたい。ただ、こうした点的な調査は内容的には粗く成らざるを得ないが、広範囲における遺構の分布状況と時代認識のためには十分であろう。そこで、既往の調査で平安時代後半から室町時代、すなわち11世紀から15世紀にかけての遺構を検出したものを抽出し、遺構の性格・出土遺物については表にまとめ、地点についてはドットで示すこととした。また、下水道工事に伴う調査では複数箇所を調査することが多く、対象時期の遺構が検出されている箇所といらない箇所があるが、煩雑になるためこの場合は検出されている箇所のみ記した。

比較・検討する集落としては中田村、刑部村、そして八尾木村の三ヶ村を取り上げる。各集落の周辺は既に宅地化が進行し、かつての縁辺が明確では無くなっている、字の範囲もわからなくなっている。そこで、昭和23年に撮られた航空写真と区画整理以前である昭和36年と43年に八尾市で発行された地図（3千分の1、2千5百分の1）を参考にした。

#### a) 中田村周辺の遺構

旧大和川の2条の河川が挟み込む沖積地のほぼ中央にあり、三つの村のなかでは最も規模が小さい。村内には浄土真宗本願寺派の善坊寺と真宗大谷派の淨雲寺がある。集落はL字形を呈し、南北長115m、東西長120mで、ほぼ1町四方の大きさである。村前の道は旧の信貴街道とみられ（これについては後述）、南にある八尾木村と、西にある八尾街道に面した別宮村を繋いでおり、その両村の中間の位置にある。集落内の調査成果は少ないが、北側では区画整理に伴う調査によって対象遺構について大きな成果があがっている。

西南側の16・8地点では鎌倉時代の包含層や落ち込みはあるが、明確な遺構は見つかっていない。しかし、西北側の27・37地点は12世紀中～後葉の井戸、溝、土坑、柱穴があり、また37地点では13世紀前～中葉の井戸、土坑が検出されている。集落に最も近い10地点では14世紀代の土坑

や包含層はあるが、遺物の出土は顕著ではない。

遺構の密度は高いのは集落の北西である。とくに1・2・13・42地点では素掘り井戸だけではなく、井筒に曲物や羽釜を用いた井戸が複数検出され、柱穴とともに遺物を多数含む土坑、溝が見つかっている。出土遺物では瓦器、土師器、羽釜と青磁、白磁などの輸入陶磁器、漆器、そして墨書き木片、櫛、杓、刀子など多くの日常雑器などがあり、集落の中心の様相を呈している。時期的には12世紀後半～14世紀前半である。また、12地点では前述のような遺物の他に金銅製の加飾した金具が出土しており、1・12地点では堺の鉢の宮遺跡で見つかっているものと同型の軒丸瓦が出上し、寺院の存在が推定されている。しかし、この顕著な遺構群の東側の7地点では15世紀中頃の井戸が検出されているが、それ以外には遺構はみられない。29地点で河川と池状遺構が検出され、22地点では水田と想定されていることから、21と29地点の間に集落の東辺であったことが推定される。

このような遺構の状況から原・中田村とでも言うべき、中世の集落は近世集落よりも300m北西に位置していたようである。また、中田では寺院が集落形成に大きな影響をもっていたと考えられるが、出土遺物が2次焼成を受けているため12世紀中葉には寺院は焼失あるいは一部が焼失していたと考えられる。

#### b) 刑部村周辺の遺構

玉串川の西岸に位置する刑部村には八王子社と式内社の御剣神社があり、寺院では浄土真宗本願寺派の西光寺と真宗大谷派の縁泉院がある。集落は南北約210m、東西180mである。村内を通る恩智街道は八尾街道から八尾木村の前を通り、恩智村へ繋がっていた。村の西側で庄内式期の吉備系の土器がかたまって出土しており、また集落内における下水道工事関連の調査では埋没古墳と推定される遺構と遺物が見つかっているなど調査件数は多い。

中世関連遺構は村中の今回の調査が挙げられ、12世紀中葉～13世紀前半にかけての遺構が存在する。15・20地点では13世紀後半～14世紀前半の土坑、溝や畦畔状の高まりが検出され、20地点では火葬墓も見つかっている。しかし、集落域を離れた今回のNo11調査区から南では遺構や遺物が検出されなかったことから現在の集落域と同様に南には広がらないものと推定される。

35地点では掘立柱建物と井戸、溝が12世紀前葉～中葉にかけて存続していたようである。その周辺の5・45地点でも12世紀中葉の曲物井戸があり、44・48地点で12世紀～13世紀にかけての土坑、溝、小穴が遺存していた。このように鎌倉時代前半頃の集落の中心は現在の集落の北に位置していたようである。

集落の端から北へ65mの40地点では土坑などの他に北西～南東方向の大規模な溝が検出され、集落あるいは屋敷地を区画するのではないかと推定されているが、これと同じ性格の溝は15地点でも確認されている。

村の西側の34地点では12世紀以降の水田が広がっており、居住域に関連する遺構は検出されていない。47地点では性格不明の土坑があるが、集落と47地点の間には遺構が検出されておらず、やはり集落からは外れているようである。

以上のように刑部村は12世紀中葉からの遺構が検出され、集落域については西と南側はあまり変化していないが、北側は現在よりも広がっていたものと推定される。その範囲については15・40地点の区画溝が境界になるかもしれない。14～15世紀の遺物は20地点および今回の調査でも見

つかっており、当該期に現状のような集落域になったものと考えられる。

c) 八尾木村周辺の遺構

三ヶ村のなかで最も大きく、集落は南北350m、東西240mで、長瀬川東岸に位置している。寺院では浄土真宗本願寺派の善立寺がある。村社は北へ260mの地点にある山義神社である。東西方向の恩智街道以外に南北方向の道があり、北は中田村に通じ、南は村中で2本に分かれ、大王寺屋から奈良街道に向かう道と東弓削村に向かう道となる。

集落の北側では26地点で11世紀後半～14世紀前半での井戸5基、土坑5基、溝7条、ピット32基などが検出されたが、東端の溝は橋を有し、規模や遺物などからみて集落か屋敷地を区画する溝との見解が示されている（9）が、あるいは坪境の溝となるかも知れない。井戸に使用されていた曲物には「□安二ニ□□（年カ）□□□□」の紀年銘があり、久安年間（1145～1150）あるいは承安年間（1171～1174）ではないかとされている。23地点では落込みから12世紀中葉の瓦器椀、土師器皿、獸骨などを見つめているが、26地点と比較すると遺構の密度が粗となっている。また、23地点と26地点の間でも溝や瓦器椀が検出されている（未報告資料）。山義神社周辺の9・11地点では13世紀前葉と14世紀の溝あるいは土坑と思われる遺構が検出されており、当該期には神社の周囲まで集落が広がっていた可能性があるが、明治では耕作地となっている。30地点では河川堆積が確認されている。

集落内の31地点で曲物と羽釜を井戸筒に使用した12世紀代の井戸が見つかっている。また、上部には14世紀頃の遺物包含層があり、上面が近世の生活面となる。このように中世と近世集落の重複が確認された。

しかし、集落の北側である14・17地点では瓦器、羽釜、土師器を含む14世紀の土坑とともに10世紀後半頃の土器、軒丸瓦を含む溝状遺構や奈良時代末から平安時代の包含層が検出されている。また18地点でも奈良時代の土器が出土しており、集落の北側一帯には奈良時代末から平安時代の寺院があったものと推定されているが、これが三条西公条卿が参詣した金剛蓮華寺ではないかと考えるむきもあるが、時期的にあわず、むしろ西の京に開創した遺構と推定される。

刑部村との境界付近である6・33・36・41・43地点では水田面が確認されており、とくに33・41地点では牛足痕が見つかっており、鎌倉時代には家畜を使用した耕作が行われていたものとみられる。また、24地点では平安時代から室町時代の継続した水田が検出されている。このように43地点より以北は平安時代以降一貫して耕作地であったものとみられる。

西側は顯著な遺構に恵まれておらず、また南側についても長瀬川の河岸にあたるためやはり生活痕跡が希薄である。

八尾木村については山義神社との関係が問題であろう。現在の集落から北に広がる遺構は山義神社周辺で密であり、大和川の付け替以前であるなら、現在の集落よりも神社周辺の方が洪水の被害などを考えると居住地として適していると考えられる。しかし、神社周辺では居住関連の遺構は検出されないことから、このような想定は無理であろう。

#### 4. 中世集落の成立と変遷

以上、平安時代後半から室町時代にかけての集落と耕作地の状況をみてきた。次に集落成立の時期と変遷についてみてみよう。

中山の中世集落は近世集落よりも北西に中心がある。11世紀代から集落が形成されていた可能性があり、青磁や八弁蓮華紋軒丸瓦等が出土していることから寺院があったことがうかがえる。しかし、その周辺では12世紀中～後葉の遺構が中心となり、若干時期が異なっている。このような時期の相違は12・13地点で2次焼成を受けた瓦の出土から、寺院が焼失した後に構築された遺構と推定できよう。そしてこれらの遺構は13世紀後半まで継続することになる。近世の中田集落については良好な資料は少ないが、10地点では14世紀代の遺構が検出されており、この時期ころから近世集落周辺へ移動したことが推定される。

刑部集落は35地点を中心とする近世刑部集落の北西部にその萌芽がみられる。35地点では12世紀前葉と中葉の建物が検出されており、周辺でも12世紀中葉の遺構が見つかっていることから、この時期から集落として成立するようである。ここでは13世紀中葉までの遺構が存在するが、今回の調査や20地点からわかるように12世紀後半にはすでに近世刑部集落内まで居住域が広がっており、以後こちらが中心となるようである。

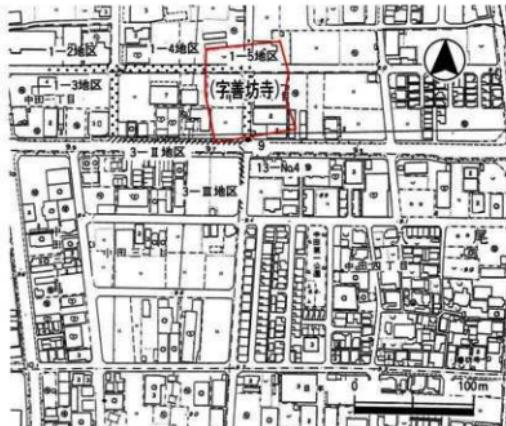
八尾木集落では奈良時代後半～平安時代前半の遺物が由義神社周辺や近世集落の東南で見つかっており、寺院の存在が見て取れるが、中世段階へは継続していない。中世集落の形成は11世紀後葉からの遺構が検出される26地点から始まると考えてよいであろう。ここでは14世紀前葉までの生活痕跡がある。八尾木集落内の調査は乏しいが、31・17地点で12世紀末葉の遺構・遺物が検出していることからこの時期には集落が大きくなっていたことが想定され、31地点では近世遺構が重複しており、近世の集落は基本的に12～13世紀の集落を引き継いで形成してきたものであることがわかる。

以上をまとめると、中世集落は11世紀頃から形成されるようであるが、遺構が顕著になるのは12世紀以降であり、この時期に集村化が始まったと考えられる。各戸などから出土する瓦器楕の型式は1～2型式程度であり、およそ30～40年で戸は破棄されたものとみられ、木造住宅の耐久年数を勘案してもその程度の時間幅で建て替えあるいは居住地が変化したものと考えてもよいであろう。こうした変化を繰り返し、初期中世集落は14世紀前半を境として淘汰され、その中心は近世集落と重複するような新たな集村へと移行していったと考えられる。

## 5. 字名と検出遺構との関連について

中田、八尾木、刑部の各村の字名は良好な状態で残っており、今回はそれを現在の地図に復元した(10)。この字の範囲と中世遺構検出位置との関連を検討し、中世集落の範囲や字名の成立について触れておきたい。

中田村は集落には字名が無く、この字名が成立した頃には既に集落が立地していたと推定される。13・42地点で遺構が検出されているが、字名には関係していない。しかし、1・3・12・46地点には善坊寺と地蔵内という字名が付けられている。各地点からは軒丸瓦や青磁、白磁、そして墨書き片などが出土していることから寺院の存在が推定されている。第16図をみると字名善坊寺とその西側に広がっているようである。しかし、前述しているように寺院は12世紀中葉には火災にあったと考えられるが、それでも字名が伝えられてきたのは善坊寺が中世中田集落の中心であったためと思われる。現在、中田には浄土真宗本願寺派の善坊寺があるが、中世の善坊寺とは絶縁があると推定され、近世集落成立後に再興されたものと思われる。なお、中世から離れるが、



第16図 善坊寺関連遺構・遺物出土土地点(1/4000)

字名梶原塚から西へ45mの地点ではⅡ期の円筒埴輪が出土しており(11)、あるいは字名成立時には墳丘の痕跡が残っていたのかもしれない。

刑部村の北には信貴街道、茶屋ノ前などの字名がある。信貴街道は教興寺から信貴を抜けて平群に達する道で、現在は長柄神社から教興寺までの道は府道服部川久宝寺線に沿うものと考えられているが、かつては八尾村を南北に抜け、中田村の南側の道を東に抜ける道が信貴街道と呼ばれていたことが字名から推定される。また、周辺

表3 善坊寺関連発掘調査一覧

調査地点	調査位置	検出遺構と遺物	備考
1	2調査区	東西方向の溝	
1	3調査区	南北にのびる2列の柱痕(建物)、建物に接して曲物井戸と土井戸、炉跡2箇所、	
1	4調査区	西側一東西にのびる小石敷面、土壙と上面に柱痕 東側一柱痕、大きな井戸(瓦器、平櫛、木杓子、刀子、銅代編物)	
1	5調査区	柱痕、土坑、多量の土器	
1	6調査区	柱痕、鎌倉時代の屋根瓦多量に出土、	
3	第II地区	屋根瓦と炭を多量に含む土層(東西5m、厚さ0.1~0.3m)	
3	第III地区	落ち込みから屋根瓦出土、南側一土坑2	
9		SD02-八弁蓮華紋軒丸瓦・用途不明木製品、SD01-平瓦・土師器皿、遺構面積査-金属製金具、同安窯系青磁碗、瓦器、土師器、瓦	
13	No.4人孔	素掘り井戸-焼成受けた平瓦片、瓦器碗、皿、羽釜、須恵器	

には道場後、徳光寺などの字名があり、中世に寺院があったことがうかがえる。刑部集落には西口、本宮、東口、薬師堂、東寺、助右衛門垣内、北口などの字名があるが、その配置から本来は東西に長い集落であったと思われる。12世紀~13世紀の遺構が集中している35地点周辺は薬師堂、東寺といった寺院に関連する字名が付いているのは興味深い。中田における善坊寺のように寺院を拠点として集落が形成された可能性を示している。字名東寺には現在、西光寺があるが名称からあるいは立地からみても関連は薄いであろう。

八尾木はここでは最も大きな村である。由義神社周辺には宮ノ下、宮ノ後、宮前などの字名があり、奈良時代の西の京である由義宮の推定地となっている。実際当該地を含めて奈良~平安時代前半の遺構・遺物の出土が多い。集落周辺では11世紀後葉に逆上の遺構が検出されている26地

点は道祖神という字名が付けられており、近世集落では外城になっている。また、奈良時代～鎌倉時代の遺構、遺物が出土する14・17・18地点も東口、神ノ木となっており、いずれも中世集落に関連した字名とは思われない。すなわち14世紀頃の集落と近世集落との断絶があるものと思われる。近世集落は南にある字名今口から旧大和川（長瀬川）の水運を利用した人や荷の出入りを主体とする集落であったと考えられ、主要な街道が存在しない南側に茶屋ノ前という字名があることも水運を重視していたことを示すものであろう。

三ヶ村の字名を概観してきた。中田村の善坊寺や刑部村の薬師堂など中世の遺構と関連する可能性のある字名も僅かにあるが、多くは直接むすびつくことはない。むしろ14世紀頃までの中世集落とそれ以降の集落とは断絶があることが八尾木村や中田村の字名から想定される。また八尾木村を例にとれば字名今口は旧大和川が付け替えられる宝永元年（1704）までが主要な出入口であった17世紀末までにはこの字名が付与されていたと考えられる。こうした推察から字名は15世紀以降17世紀、遅くとも18世紀までには成立したものと思われる。

#### 6. おわりに

旧大和川にはさまれた沖積地上に営まれた集落の変遷を中心に概観してきた。その結果当地における中世集落の成立は11世紀後葉ということが判明した。しかし、それは集落の核が成立したことであり、本格的な集村化が始まったと考えられるのは12世紀になってからであった。この段階では疎塊村的形態をとるものであったであろうが、三箇所で集住が起こっており、後の中田、刑部、八尾木の原集落とでもいえる様相を呈する。この集落は12世紀～13世紀中葉にかけてピークを迎えるが、13世紀後葉になると衰退（遺構の減少）が始まり、14世紀前半には淘汰、再編が行われ、近世集落形成位置とはは重複するような集落となるようである。14世紀段階における集中的な居住域の確立はいずれの地域でも一斉に起こっていることから、社会的な変動によつてもたらされたものと考えてよいであろう。このように中河内における中世集落の動向は、先学によって明らかにされてきた和泉や摂津と大差ないものであった。

当地における第1の画期は集落の成立という観点から11世紀後半をあげることができよう。そして13世紀末～14世紀初頭に第2の画期を設定することができる。これは集落の拡大から転じて周縁を削り、集落としての新たな線引きを行った時期といえるからである。

耕作については牛足痕跡の発見から中世後半段階には家畜を利用した耕作が行われていたようである。近世には悪水井路川による排水管理が行われていたが、この段階の治水については明確な関連遺構は検出されていない。しかし、こうした家畜の使用痕跡は湿地の開発によって乾田化が進行していたことを示唆するものである。

集落の成立については中田集落における善坊寺のように寺院が集村化の求心力となつたものもある。刑部集落でも薬師堂、東寺などの字名が中世遺構の最も多く検出されている地点に残されており、そのような可能性が推定される。また、八尾木や刑部では8～10世紀にかけての遺構や遺物が検出される箇所もあるが、そこで中世集落が形成されることはない。

字名と集落の関係をみると11～14世紀の中世集落の遺構が検出される地点に、居住に関連した字名が付くことはない。例外的に寺院名など当該地で重要なものが残されることもあるが、集落域を推定できるようなものはない。また、古代の名称が残ることも稀であろう。・・塚や大門な

どの字名があった場合それは、字名を付けた時期の現象面からの命名と考えるべきである。字名の成立は当地においては15世紀以降18世紀頃までと考えられる。

以上、中田遺跡と東弓削遺跡にまたがる三つの集落について検討してきた。建物配置などの景観復元や生活していた人々の姿を想像することも不可能であるが、出土遺物からみた集落の盛衰に関する時期幅は確認できたと思う。中河内の中世集落は先学によって明らかにされてきた和泉や摂津地域と大差ないものであった。しかし、今回は中世集落の位置と範囲に重点を置いたため、奈良時代から平安時代前半における律令制下の集落の位置や範囲との比較ができる、集落の成立についてはやや片手落ちの感もあるが、両者は成り立ちが異なっており、今後別項にて再度検討してみたい。

#### 参考文献

- (1)原口正三1977「古代・中世の集落」『考古学研究』第92号 考古学研究会
- (2)植木久1982「長原遺跡にみる平安～鎌倉時代集落・民家の特質」『長原遺跡発掘調査報告書Ⅱ』(財)大阪市文化財協会
- (3)石神怡「『』まとめ～周辺遺跡との関連において～」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』(財)大阪文化財センター1984
- (4)佐久間貴士1985「中世の開拓と集落－大阪府を中心として－」『歴史科学』99・100合併号、1985「畿内の中世村落と聚落地図」『ヒストリア』第109号 大阪歴史学会
- (5)広瀬和雄1986「中世への胎動」『岩波講座日本考古学6 变化と画期』岩波書店
- (6)佐藤隆1996「大阪市内における中世集落の動向の1例－中国製磁器の出土傾向を中心に－」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』日本中世土器研究会
- (7)鈴柄俊夫「第6章 日置荘遺跡の遺構変遷」「日置荘遺跡」
- (8)大阪府教育委員会「中田遺跡発掘調査概要」「中田遺跡《北区》発掘調査概要」中田遺跡調査会  
この報告には調査位置や検出遺構の図面は掲載されておらず、今回は対象としなかった。
- (9)このような防御施設ともいえる区画溝、すなわち濠について広瀬和雄は「これこそが12世紀以前の建物群と一線を画し、かつそれらからの飛躍的上昇ともいえる現象」と考え、後の領主層成立過程ととらえた。同様の溝は八尾市域では成法寺遺跡(『(財)八尾市文化財調査研究会報告33』1991)と福万寺遺跡(『(財)八尾市文化財調査研究会報告24』1990)で検出されている。
- (10)字名については柏原武雄・奥田尚『河内西之京都辺史』1981、澤井清三編『八尾市小字地名表』八尾市史紀要・第8号 八尾市教育委員会1985、尾崎良史編『絵図が語る 八尾のかたち』八尾市立歴史民俗資料館1999を参考にした。
- (11)吉田野力1992「中田遺跡(91-293)の調査」『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市教育委員会

### 3) 八尾市域の用水施設について

#### 1. はじめに

市域の道路部分で行う調査において、今回検出したような竹管あるいは陶製管が見つかることがある。しかし、比較的新しい造構で浅い位置にあり、また下水道や水道工事に並行して調査を行っていることから、機械掘削の段階で破壊されてしまうのが常であった。後述するように調査例はあまりなく、報告書では竹管や陶製管の意味あるいは時期等についての言及はほとんどされていない。そこで、調査担当者間の今後の共通認識として、市域の用水施設について記しておく。

#### 2. 八尾の水道略史

飲料用に供される水道の基本は上水道である。上水道は鉄管を使用し、濾過した浄水を連続供給する有圧の水道と定義され、明治23年に布告された水道条例では当初公費によって施工されることを前提としていた。しかし、明治44年、大正2年の条例改正によって組合、個人、会社などによる私設水道が認められるようになった。これが簡易水道と呼ばれて、水源となる井戸から揚水ポンプで、汲み上げ給水するものであり、昭和3年に八尾町・西郡、昭和4年に久宝寺村、昭和8年に中野村、昭和9年に老原村に造られている。

現在の八尾市域のなかで、市制成立以前に上水道が敷設されたのは八尾町と龍華町で、いずれも昭和14年に完成している。しかし、上水道敷設に先立ち、大正13年に南木の木及び木の木の有志による組合が結成され、簡易水道が造られている。水源井戸から揚水ポンプで汲み上げた水を濾過し、排水池に貯蔵、さらに気圧水槽に送水して24時間連続給水していた。

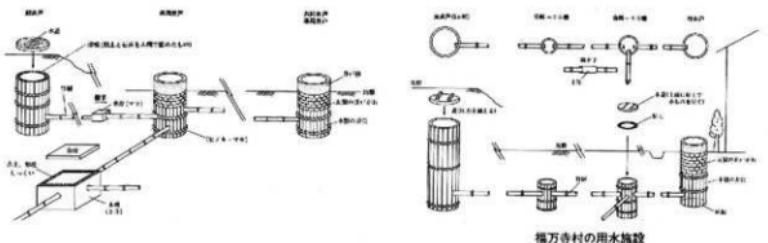
そして昭和25年に八尾町、龍華町、久宝寺村、西郡村、大正村の合併による市制成立以降、水道は普及していくが、昭和30年に合併された曖川村（刑部、八尾木、中田を含む）、南高安村、高安村では簡易水道が敷設される。現在でも神立など一部に簡易水道は残されているが、昭和44年頃には市域全体に上水道が普及することになる。

このような上水道や簡易水道以前に、その役目を担っていたのが用水である。これは良質の水源井戸から樋（主に竹管）を用いて村内に導水していたものである。当地におけるその起源については明確ではないが、享保2年（1735）に中野村（現在の西山本町・堤町・緑ヶ丘・旭ヶ丘・山本町北）と山本新田（現在の山本町・山本町北・山本高安町・山本町北）の間で用水の取扱についての訴状が残されていることから少なくとも18世紀頃には普及していたことがうかがわれる。とくに宝永元年（1704）の大和川の付け替えによって、河川の使用形態に変更がもたらされ、また井戸の水質の変化があったことも想像される。河内一帯の井戸水は「かなけ」（鉄分）が強く、飲料水としては問題があった。こうしたことから良水を求めて旧大和川沿いの伏流水を利用した用水が多く作られたようである。前述の山本新田からの引水もまさしくそうであろう。

#### 3. 用水施設の構造

ここでいう用水とは農業用の水ではなく、主に家庭用に供された水に限定する。用水施設は1ヶ所ないしは數カ所の水源井戸＝親井戸・元井戸から竹樋によって村まで導水し、各家の井戸＝呼井戸に净水を引き込むようになっていた。給水は高低差あるいは湧水の圧力を利用していたようである。竹樋管は木製や土管の継手によって延長され、分岐や会所には樽や木製の枠が使用された。井戸や会所の汲えは孟蘭盆頃に行なうことが年中行事として定着していたようで、これは盛

夏の雨量の減少により、地下水位も低くなるためと考えられている。また、水源井戸の枯渇や竹樋の腐食による維持工事も行われている。このような用水施設は市域の各村には造られていたようであるが、現在ではほとんど残っていない。久宝寺の呼井戸である「寺井戸」は利用されていないが、我々が今日、目につくことのできる数少ない用水施設である。



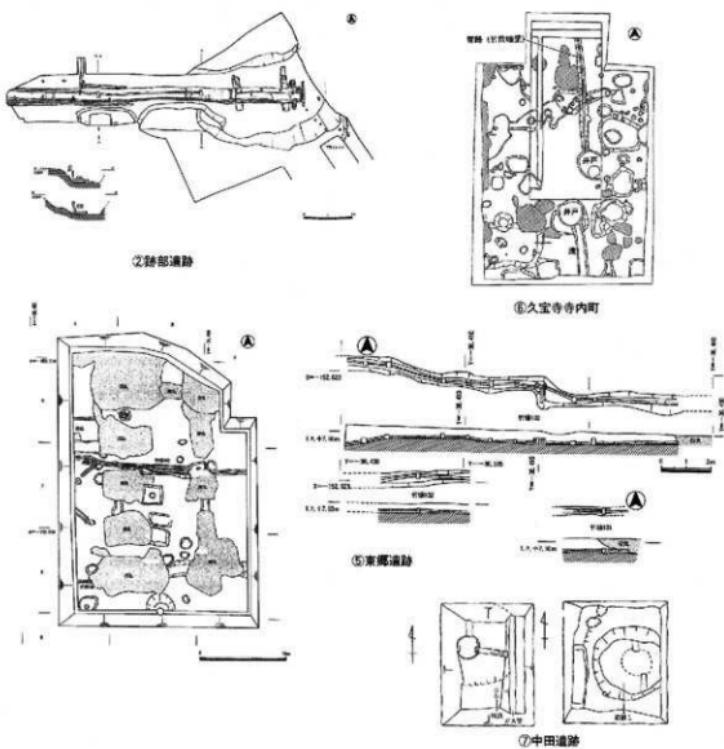
第17図 用水施設の構造（「八尾水道のあゆみ」より改変・転載）

#### 4. これまでの調査例

今回の調査では竹製の管あるいは陶製の管を使用した用水施設が4箇所の調査区で検出されている。施設は導水管とともに濾過と詰ぎ手を兼ねた樽を用いていた。このような用水施設はこれまで市域では10例の報告がされている。

表4 八尾市域用水施設概往調査一覧

番号	遺跡名	所在地	検出遺構名	材質	備考	時期	報告書
①	東部遺跡	東本町		竹管、木製詰ぎ手、		近代？	八尾市史編纂委員会1983「第六節 電気・水道」『八尾市史（近代）本文編』
②	跡部遺跡	安中3丁目	水路	竹管、木枠	木枠内に竹管を配置	近世	成海桂子1988「跡部遺跡（第3次調査）」『八尾市文化財調査研究会報告 昭和62年度』
③	東弓削遺跡	八尾木2・3丁目地内	取水施設、排水施設	竹管、陶製管	2種の方向が異なる	近世末期～近代	成海圭子1993「東弓削遺跡第6次調査（HY92-6）」『八尾市文化財調査報告1993』
④	東郷遺跡	東本町1～4丁目	越管	桶		近世	吉田野乃1994「東郷遺跡（93-192）の調査」『八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書B』
⑤	東郷遺跡	本町1丁目	竹筒 101、102、201	竹管、木製詰ぎ手、樽	二時期有りの可能性	近世～近代	原田昌則1999「東郷遺跡（第37次調査）」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告64』
⑥	久宝寺寺内町遺跡	久宝寺3丁目	SE1103、SD1101	井戸、竹管	2基有り	18世紀以前	岡田清一1999「久宝寺寺内町遺跡第1次発掘調査現地説明会資料」
⑦	中田遺跡	刑部4丁目地内		陶製管、樽	2基有り	近代	吉田野乃2000「中田遺跡（98-550）の調査」『平成11年度八尾市内遺跡発掘調査報告書B』
⑧	中田遺跡	中田2丁目地内		竹管		不明	森本めぐみ2000「中田遺跡第43次調査（NT98-43）」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告65』
⑨	水越遺跡	服部川3丁目	竹製暗渠	竹管		江戸時代	成海桂子2001「水越遺跡第7次調査（MK2000-7）」『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告2 平成12年度』
⑩	中田遺跡	刑部4丁目地内	用水施設	竹管、陶製管	2時間以上有り	近世～近代	本報告



第18図 用水施設検出例(縮尺不同)

①大正年間に八尾市東本町光明寺付近（八尾寺内町遺跡）で、竹管と木製継ぎ手2個が見ついている。竹管は長さ約1.5m、直径約9cm。継ぎ手は長辺25cm前後、短辺15.5cm、高さ16cmの立方体で、継ぎ部分にはシエロの皮を巻きつけて水漏れを防ぐようになっていた。

②調査地は旧大和川の本流の一つである長瀬川左岸に位置する。幅5m、深さ2m程度の東西にのびる溝内に木枠を置き、ここに竹管を設置した。木枠は側板をもち、釘や杭で固定されていた。溝は河川側のレベルが低くなっていた。

③下水道工事に伴って、竹樋と陶製管を検出している。竹樋は地表下1.7m前後で東西方向にのび、陶製管は地表下2.0m前後で南北方向に並んでいた。このため、前者を取り水施設、後者を排水施設だと担当者は考えた。

④道路築造に伴う試掘調査で検出された。泥落としの桶（樽）に樋管が接続されており、周辺では土坑、1基、ピット3基など検出されている。他とは異なって、樋管は木製であった。埋土からは近世の陶磁器が出土している。

⑤序舎立替えの際に検出されたもので、直径約7cmの竹管を木製の継ぎ手（縦25cm、横10cm、高さ20cm）で接続した導水管を3条検出している。近世～近代面では東西方向の導水管が2条（竹樋101・102）見つかっている。両者の間隔は約14.5mであった。竹樋101は検出長約2.7mで、2本の竹管を1つの木製継ぎ手に継いで使用している。竹樋102は検出長約20.0mで、8つの木製継ぎ手を使用し、途中に蓋のある樽が備えつけられている。そしてこの下部東側で、竹樋201が見つかっている。検出長約5mで、1本の竹管で、径約7cmである。上位の102よりも約15度北に振っている。時期は近世～近代である。

⑥地表下約1.5mで井戸（S E 1104/S E 1106）からの取水する2基の施設が検出されている。S E 1104から北に向かってのびる溝（S D 1101）内に継ぎ手を用いた竹樋が設置されていた。検出長約9.5m。もう1方はS E 1106からは南に向かって延びる溝があり、竹樋そのものは遺存していないなかつたが、痕跡がみられた。いずれも時期は18世紀以降とされている。

⑦今回の調査地の北側に位置している。下水道の人孔部分9箇所の調査であったが、うち2箇所で樽の3方に陶製管を接続した状況が確認されている。陶製管や樽を用いるなど同じ材料によって工事されており、今回の施設と同時期の施設であったことがうかがわれる。

⑧竹管のみが確認されており、すぐ南側を現代の水道管があったと報告されている。東側に悪水井路を集水した楠根川が流れおり、中田集落からの排水施設の可能性がある。

⑨調査地は標高19m前後の扇状地に位置する。暗渠は南北方向にのびており、扇状地に平行する形となっている。

⑩今回の報告例である。

以上の10例が知れるが、近世～近代の遺構で、しかも比較的浅い場所に設置されたため、調査対象とされなかつたものも多数あったことが想像される。

## 5. 発掘例と用水施設の検証

先に挙げた検出例について、これまでみてきた用水施設の在り方と比較し、使用方法について再度検討してみたい。

③八尾木村は旧大和川（長瀬川）の北岸に位置し、良質な水が得られた。水源井戸は村を南北に貫く二つの道の南端にあった。東側は字名「野堀」、西側の字名は「今口」である。調査位置は東側の水源井戸から北へ約50mの地点であったことから、検出した樋管は八尾木村の用水施設の一部であったことがわかる。ここで問題となるのは取水（東西方向の竹管）と排水（南北方向の陶製管）の区別である。両者の高低差は約30cm前後であるが、浄水と汚水が近接することになる。また、水源井戸は南にあることからみて南北方向の陶製管が最も重要な導水管と考えられ、陶製管は排水ではなく、取水のための管と定義できる。実際、昭和になってから竹管を修理するときには陶製管（「いたち」と呼ばれていたという）に交換されていったようである。竹管については古いものが残存していたか、あるいは各家への配水のための管と推定されよう。

最も遺存状態の良いものは⑤である。ここでは2条の竹樋が見つかっていることから2軒の屋敷地に給水されていたものと思われる。亨保年間（1716～1735）に描かれたとされる『河内国若江郡八尾郷絵図』では、3軒の屋敷地が調査地に該当することから担当者はその整合性を指摘している。竹樋201については部分的な残存状況であることから、竹樋の交換などによる古い管の

残欠であろう。

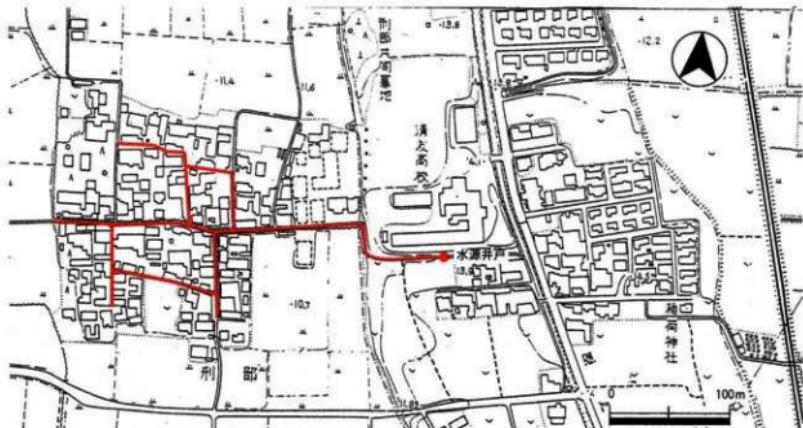
⑥が見つかった久宝寺寺内には顯証寺が大和川付け替え後の顯正寺新田付近(現在の東久宝寺)を水源とする井戸から寺内の東口にある寺井戸まで竹樋によって導水していた。開始年代は不明だが、井戸枠には天保十四年(1843)の銘文が刻まれており、この時期には寺井戸があったことがわかる。調査で見つかった2基の井戸は寺井戸以外に用水施設があったことを示唆するものである。ただし、この井戸が家内の呼井戸であったのか、それとも極小さな範囲(自己の家屋)内でもちいる水源であったのかは明確ではない。

②は反対に長瀬川の左岸に位置している。溝の幅、木枠の存在など大掛かりなものとなっており、農業用水の可能性が考えられる。

#### 6. 刑部村の用水施設について

⑦と⑩は竹管と陶製管を使用し、樽で分岐していることから同一の施設であり、刑部村の用水施設の一部であろうと考えられる。

刑部村は旧大和川の支流である玉串川の西岸に位置するが、井戸水は「かなけ」を含んでいた。このため用水施設は昭和の始め頃には東西約150m、南北約200mの村域全体に巡らされていたようである。開始時期について詳しい記録はないが、水源井戸の場所から大和川付け替え以後、すなわち18世紀以降と推定される。水源井戸は村から東に約150m離れた旧大和川の川床にあった。昭和10年頃の井筒はコンクリート製で、最下段は木製で桶状の井筒が設置されており、直径1~1.2mで、深さは8~9mほどあったそうである。水位はグランドレベルに近く、給水については十分な能力を有していた。この井戸から竹管によって村に導水され、樽を会所に分水していた。竹管の直径は5~6cmであり、細竹管は使用されていなかった。井戸浚いについては、やはり盆の頃に行っていたが、この時は木の先に布を付けて竹管に通すことによって内部も清掃していたということである。なお、昭和10年前後から修理の時に竹管から陶製管に順次交換されていった



第19図 刑部村用水施設配管図(S=1/4000)(昭和36年の地図を改変)

ようで、これは前述の八尾木村と同じである。水源井口は近年まで残っていたが、高校（旧大阪府立清友高校）の壁を改築する際に消失してしまった。

さて、このような刑部村の用水施設から調査例を検討すると、陶製管と樽の会所については昭和の始め頃のものといえよう。そして今回の調査におけるNo.7調査区の竹管と陶製管の接合は交換された箇所と判明した。ただし、陶製管がどこにも繋がっていない状況については破棄された状態と推定される。また、No.8調査区で見つかった細い竹管は、他の調査区の太い竹管との時期的な相違が指摘でき、細い竹管は古いものと思われる。

こうした飲料用の用水以外に農業用に水路があったが、井戸の無い家では水路で野菜を洗っていたそうである。また、排水についてはこのような水路を利用していた。

## 7.まとめ

上水道に先駆ける用水施設の構造と調査例をみてきた。その結果これまで、位置づけが十分でなかった竹管や陶製管が用水施設の形成材であることが判明した。用水施設は良質な水を求めて苦闘を続けてきた河内に居住していた人々の歴史の一部である。とくに大和川の付け替えという生活を根底から変えてしまうようなことを発起としているから尚更である。近世～近代にかけての遺構ではあるが、本市においては重要であり、今後も許される制約のなかで調査、検討していくべき遺構であろう。

本文書をまとめるに当たり、八尾市水道局の山西謙三氏からは資料の提供を受けた。また、刑部村の用水施設については川村・吉氏より御教示頂いた。記して感謝したい。

## 参考文献

八尾市水道局『八尾水道のあゆみ』平成元年4月

八尾市役所『八尾市史（近代）本文編』昭和58年12月



No. 6 調査区 用水施設



No. 6 調査区 用水施設斗桿



No. 6 調査区 S D 601(西から)



No. 7 調査区 用水施設



No. 7 調査区 S E 701(南から)



S E 701掘方(東壁断面)



No.8 調査区 S E 801検出状況(南から)



S E 801曲物掘削状況(南から)



No.13調査区古墳時代～後期面



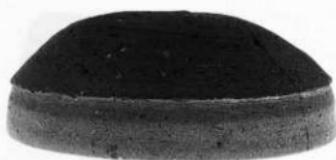
No.13調査区古墳時代初頭面



No.13調査区 S D 1304



調査風景



5



9



6



同心円文スタンプ



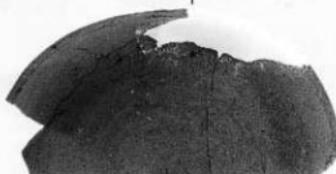
10



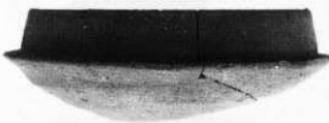
11



7



同心円文スタンプ



12

SD101出土遺物①



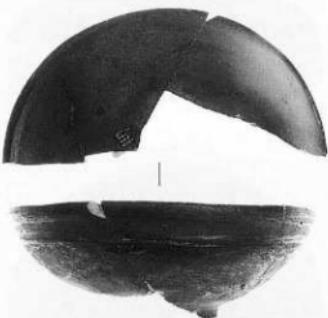
16



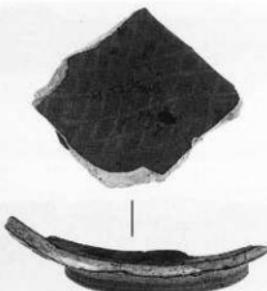
17



22



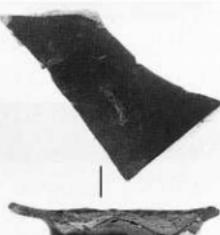
21



23



25

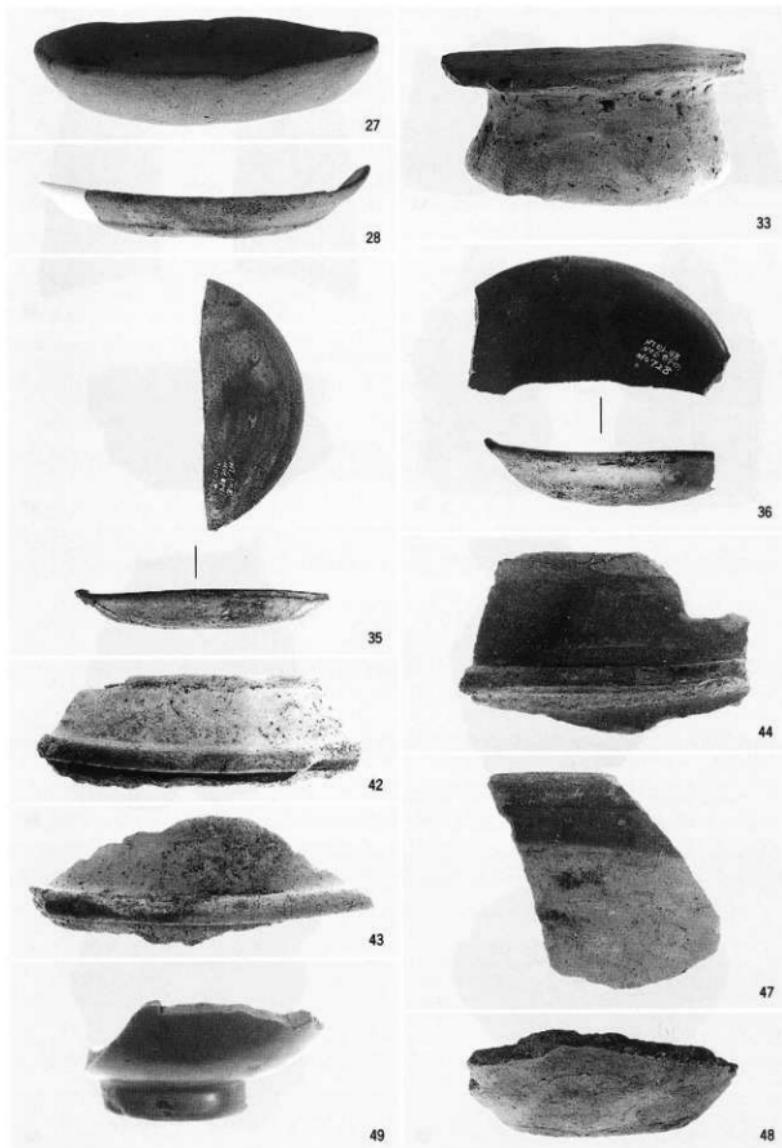


24



26

No.5 調査区-16・17、S E 601-21~25、S E 701-26



SE 701出土遺物



52



53



56



57



58



59



63



62

S E 701—52・53、S K 901—56 No.11調査区57・58、No.12調査区59・62、No.14調査区—63

V 中田遺跡第49次調査 (N T 2001-49)

水目文庫

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市中田2丁目地内で行った、公共下水道工事(平成11年度－第22工区その2)に伴う発掘調査の報告である。
1. 本書で報告する中田遺跡第49次調査(NT2001-49)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第258号 平成11年8月11日付)に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成13年6月27日～29日の3日間に、成海佳子を担当者として実施した。
1. 調査面積は、約28.16m<sup>2</sup>を測る。
1. 現地調査には、岩本順子・澤村妙子・実樹婦美子が参加した。

## 本　文　目　次

1.はじめに.....	67
2.調査概要.....	67
1) 調査の方法と経過.....	67
2) 検出遺構と出土遺物.....	67
3.まとめ.....	69

## V 中田遺跡第49次調査(NT2001-49)

### 1.はじめに

中田遺跡は、大阪府八尾市のはば中央部に位置し、現在の行政区画では、中田1～5丁目・刑部1～4丁目・八尾木北1～6丁目がその範囲である。地形的には、旧大和川の主流である玉串川と長瀬川に挟まれた低位冲積地にある。この長瀬川と玉串川に挟まれた地域は、市内でも遺跡密度が高く、当遺跡と同様の条件で多くの遺跡が位置している。当遺跡の南は東弓削遺跡、西は矢作遺跡、北は小阪合遺跡と接し、さらに北西へ向かって成法寺遺跡・東郷遺跡・萱振遺跡などが連なって位置している。

当遺跡は昭和45(1970)年、八尾市都市計画事業曙川北土地区画整理事業に伴って発見された。それ以後、大阪府教育委員会・中田遺跡調査会・中田遺跡調査センター・八尾市教育委員会によって大規模な発掘調査が行われ、これらの調査結果から、当遺跡は弥生時代前期～室町時代に至る複合遺跡であることが明らかにされている。近年は小規模な開発が盛んになり、当調査研究会では、昭和62(1987)年以降、これまでに48件の発掘調査を行っているほか、市教育委員会でも多数の発掘・試掘・立会調査を行っている。今回の調査地の周辺に限っても、市教育委員会が4件、当調査研究会が7件の調査を行っている(第1図・第1表参照)。

### 2. 調査概要

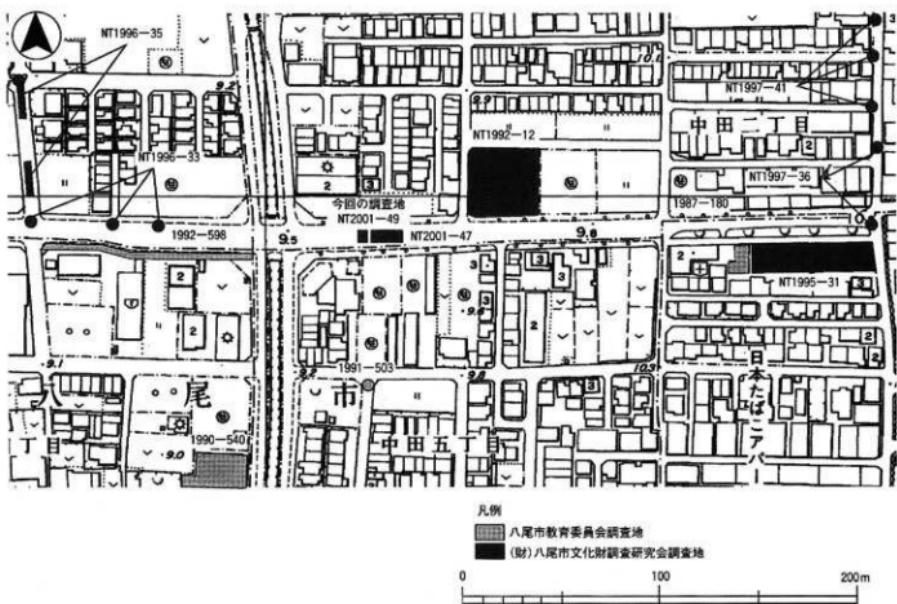
#### 1) 調査の方法と経過

今回の調査は中田遺跡第49次調査(略号NT2001-49)で、大阪府八尾市中田2丁目地内(府道安中教興寺線)で行った、公共下水道工事の土砂ピット掘削工事に伴うものである。調査期間は平成13年6月27～29日の3日間、調査面積は約28.16m<sup>2</sup>を測る。当調査地の東隣には、第47次調査地(NT2001-47)、東北東約60mには第12次調査地(NT1992-12)がある(第2図参照)。

第12次調査では、現地表下1.2～1.3m(T.P.+8.1～8.2m)で鎌倉時代の池状遺構や自然河道、古墳時代前期の溝・落ち込み・土器集積・土坑などを検出しており、以下約0.1m(T.P.+8.0m)前後で埋没河川の堆積層を厚さ0.4mまで確認している。東隣の第47次調査では、調査開始時点で、すでに現地表下1.8m(T.P.+7.9m)前後までの掘削が終了していたため、第12次調査で検出された古墳時代前期・鎌倉時代の遺構面については不明であるが、第12次調査で確認した埋没河川に対応する粗砂の厚さは約1.8m、底のレベル高はT.P.+6.2mに達していることが判明した。これらの調査結果から、今回の調査では、掘削開始と同時に立ち会うことになった。

#### 2) 検出遺構と出土遺物

確認した地層は第3図のとおりである。調査地の現地表面の標高はT.P.+9.77m、盛土の厚さは1.1～1.2mを測る。ここでは、盛土以下に旧耕土・床土に対応するような地層は見られず、第1層～第3層は礫やブロックの混入する極めて汚れた土で、埋め戻したかのようである。その下に堆積する第4層・第5層が埋没河川にあたるもので、厚さは1.6m前後(T.P.+6.4～8.0m)を測る。それ以下には粘土質シルト・細粒砂泥粘土質シルト・細～粗粒砂・植物遺体等が約1mにわたって堆積(第6層～第11層)しており、第47次調査地と同様の結果が得られた。遺物は、第3



第1図 調査地周辺図 (S = 1/2500)

表1 周辺の調査地一覧表

略号	文 獻
1987-180	1988「第12表 文化財が実施した昭和62年度埋蔵文化財調査の一覧表」『八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告17 八尾市教育委員会
1990-540	道賀 1991「12.中田遺跡(90-540)の調査」『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告22 八尾市教育委員会
1991-503	道賀 1993「3.中田遺跡(91-503)の調査」『八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告28 八尾市教育委員会
1992-598	道賀 1994「6.中田遺跡(92-598)の調査」『八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告30 八尾市教育委員会
NT1992-12	岡田清一 1993「Ⅳ 中田遺跡(NT92-12) 第12次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査報告39 (財)八尾市文化財調査研究会
NT1995-31	原田昌周 1996「VI 中田遺跡(第31次調査)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告54』(財)八尾市文化財調査研究会
NT1996-33	西村公助 1998「XVI 中田遺跡(第33次調査)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告60』(財)八尾市文化財調査研究会
NT1996-35	坪田真一 1997「25.中田遺跡第35次調査(NT96-35)」『平成8年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
NT1997-36	西村公助 2000「VII 中田遺跡第36次調査(NT97-36)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告66』(財)八尾市文化財調査研究会
NT1997-41	高萩千秋 1999「XIII 中田遺跡第41次調査(NT97-41)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告62』(財)八尾市文化財調査研究会
NT2001-47	森本めぐみ 2002「III 中田遺跡第47次調査(NT2001-47)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告73』(財)八尾市文化財調査研究会

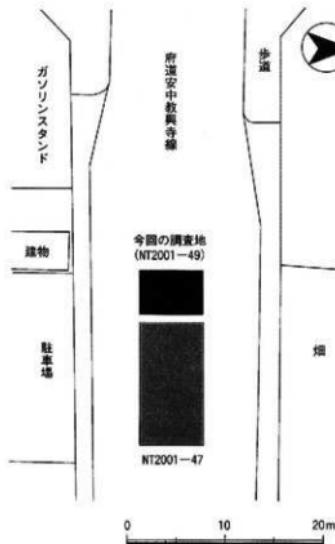
層上部から土師器・須恵器・瓦器・白磁・瓦などの細片が少量、第4層中で磨耗した弥生土器片・木片が極少量出土している。

### 3.まとめ

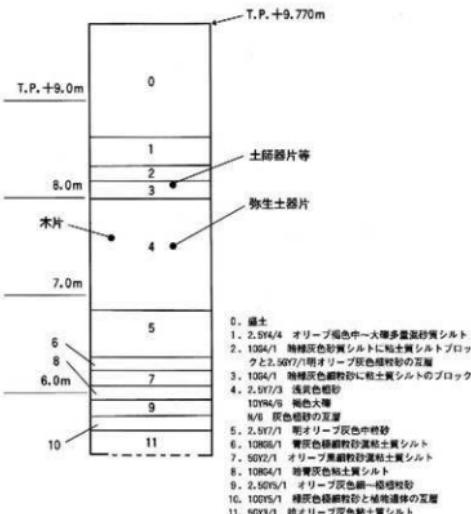
今回の調査地では、第12次調査で検出した鎌倉時代・古墳時代前期の遺構面は検出できなかつたが、第47次調査とともに、第12次調査で部分的に検出されていた古墳時代前期以前の埋没河川の深さを確認することができた。第47次調査では埋没河川内部から比較的の遺存状態の良好な弥生時代後期の土器が出土していることや、過去の調査でも散発的に弥生土器の出土があることから、当遺跡の弥生時代について、注意を要するものと考えられる。

### 参考文献

- ・大阪府教育委員会 1971『中田遺跡発掘調査概要(安中、教興寺道路工事に伴う調査)』
- ・中田遺跡調査会 1973『中田遺跡《北区》発掘調査概要』 1974『中田遺跡《南区》発掘調査概要』
- ・中田遺跡調査センター 1974『中田遺跡—中田遺跡調査報告Ⅰ』
- ・八尾市教育委員会 1975『中田遺跡—中田遺跡調査報告Ⅱ』



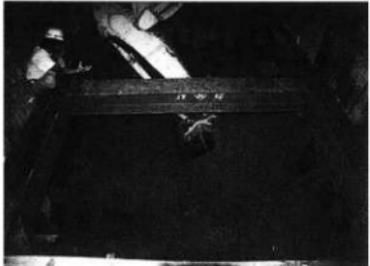
第2図 調査区設定図(S=1/500)



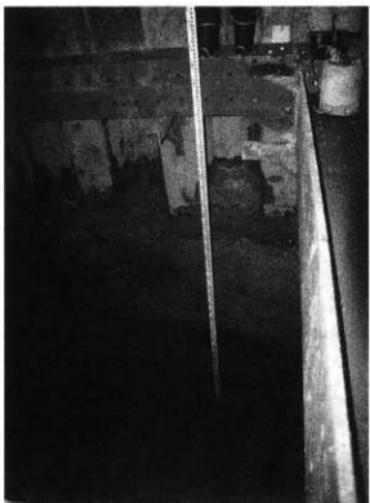
第3図 柱状図(S=1/50)



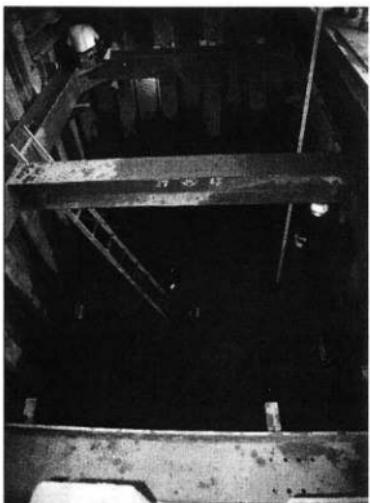
調査区西壁（北東から）



調査区西壁（北東から）



調査区西壁（北東から）



調査区西壁（北東から）

VI 東弓削遺跡第12次調査（HY2001-12）

## 例 言

- 1 本書は、大阪府八尾市都塚1丁目で行った、公共下水道工事(平成12年度－第201工区)に伴う発掘調査の報告である。
- 1 本書で報告する東弓削遺跡第12次(HY2001-12)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教生文第201号 平成13年8月31日付)に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
- 1 現地調査は、平成13年11月21日～11月23日の3日間に、成海佳子を担当者として実施した。
- 1 調査面積は、4.91m<sup>2</sup>を測る。
- 1 現地調査には、岩本順子・澤村妙子・横山妙子が参加した。

## 本 文 目 次

1.はじめに.....	71
2.調査概要.....	71
1) 調査の方法と経過.....	71
2) 検出遺構と出土遺物.....	72
3.まとめ.....	72

## VI 東弓削遺跡第12次調査(H Y2001-12)

### 1. はじめに

東弓削遺跡は、八尾市中央部南東よりに所在し、現在の行政区画では、八尾市八尾木東1～3丁目、東弓削1～3丁目、都塚、刑部、八尾木に位置する。地理的には、旧大和川の主流である玉串川と長瀬川に挟まれた沖積地にある。この沖積地には、多くの遺跡が存在することが知られており、当遺跡を南限として、北には中田遺跡が接し、さらに北から北西へ向かって矢作遺跡・小阪合遺跡・成法寺遺跡・東郷遺跡・萱振遺跡・・・と連なって存在している。一方、玉串川を挟んだ南～東側には、生駒山地西麓部の扇状地上に神宮寺遺跡・恩智遺跡があり、長瀬川を挟んだ南～西側には、弓削遺跡・田井中遺跡・志紀遺跡・老原遺跡などが位置している。

当地周辺は、その名が示すように、「弓削氏族」の本拠地であり、その子孫である奈良時代の僧道鏡の話はつとに有名である。また、『続日本紀』の神護景雲三(769)年十月三十日条に見える「由義宮、西京」の地と推定されている。このような土地柄に、昭和40(1967)年、国道170号敷設工事の際、奈良時代の土器類の出土を見たことによって、遺跡の存在が明らかになった(山本博1971)。その後の昭和50(1975)年には、八尾市教育委員会による発掘調査が行われ、当地が奈良時代のみならず弥生時代中期にまで遡りうることが明らかになった(山本昭他1976)。以後当市教育委員会・当調査研究会による数回の発掘調査の結果、当遺跡は弥生時代中期～鎌倉時代に至る複合遺跡であることが明らかにされている。

### 2. 調査概要

#### 1) 調査の方法と経過

今回の調査は東弓削遺跡第12次調査(略号H Y2001-12)で、大阪府八尾市都塚1丁目で行った、公共下水道工事(平成12年度第一工区)の到達立坑掘削工事に伴うものである。調査地は遺跡範囲の中央東端部に位置しており、近辺での発掘調査件数は少ないが、西方約150mには、第11次調査地(H Y2000-11)が位置している。第11次調査では、T.P.+9.2mで時期不明(中世以前)の溝1条、T.P.+10.4mで中世の水田面を検出している(高萩2001)。

当初計画されていた掘削方法は、地盤改良後に土留めを行いながら掘り下げるものであったが、諸般の事情により、ケコム(ピット)工法が採用された。変更された工法は、鋼管を圧入しながらその内部を重機によって掘削し、さらに地下水位と同レベルまで水を注入するもので、钢管内部に人は入れない。そのため、重機掘削中に土質の観察や遺物の確認・レベル高の確認・写真撮影等を平行して行い、最終的に仮置きされた掘削土を細かく碎いて遺物を採集するという調査方法を採った。工法の変更により、調査面積は当初予定の8.55m<sup>2</sup>から約4.91m<sup>2</sup>に減少した。調査期間は平成13年11月21日～23日の3日間である。

調査終了後、参考のために下水道部より土質調査報告書を閲覧させていただき、当調査区との比較を行った。土質調査の観測地点は調査区から西25mのNo 7、東20mのNo 8である(第2図・第3図参照)。

## 2) 検出遺構と出土遺物

調査地の現地表面の標高はT.P.+13.068m、最終掘削深度は現地表下9.6m(T.P.+3.4m)に達する。盛土の厚さは約2mを測り、以下には第1層～第12層までの地層が確認できた。

第1層：青灰色微砂混じり粘土質シルト。非常に軟らかい。層厚0.15m。

第2層：暗褐色細砂混じり粘土質シルト。層厚0.1m。近世の磁器片が1点出土した。

第3層：青灰色粗砂混じり砂質シルト。層厚0.6m。

第4層：暗褐色砂質シルト。層厚0.65m。

第5層：暗灰色粘土質シルトと青灰色シルト～微砂の互層。1.3m。

第6層：暗灰褐色中疊混粘土質シルトと青灰色微砂～粗砂の互層。下部に植物遺体と暗灰褐色粘土質シルトの互層。層厚1.5m。

第7層：灰色粗砂～疊。所々にシルト～微砂を含む。含水非常に多い。層厚2.0m。

第8層：青灰色微砂混じり粘土質シルト。下部に植物遺体の極細片少量含む。層厚0.15m。

第9層：暗青灰色シルト質粘土。層厚0.35m

第10層：青灰色粗砂～疊混シルト質粘土。下部ほど疊の量が増える。層厚0.6m以上。

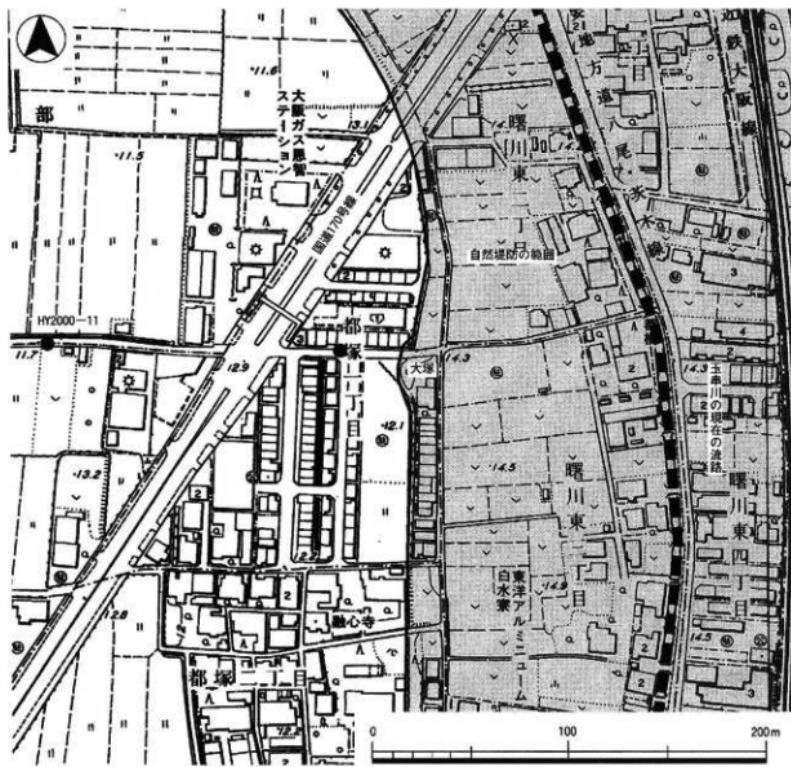
このうち、第1層・第2層は近世～近年までの水田作土の可能性があり、第3層・第4層は、第11次調査で検出した中世の水田作土に対応する可能性が高い。以下には砂混じりの粘土～砂質シルト・粘土質シルトなどが互層状に続き、現地表下6.35m(T.P.+6.65m)で含水量の多い第7層に至る。土質調査の結果と合わせれば、概ね対応する層順を示すが、西下がりとなっており、No.7地点では第7層に対応する地層は認められない。なお、土質調査でみられたT.P.+2.9m前後の砂層は上部洪積層と考えられており、第10層直下にも砂の堆積が予測される。

## 3.まとめ

調査地の現地表面の標高はT.P.+13m前後で、東方40mには、「大塚」の石碑のある塚が位置している。大塚の東側を通る南北道路は急に高くなり、大塚頂とほぼ同じ高さ(T.P.+14.4m)となっている。標高14mの等高線は大塚の西裾部を通って南北方向に伸びており、このラインが玉串川の自然堤防の端と考えられる。調査地はそこから一段下がった後背湿地に位置しており、玉串川の発達とともに多量の土砂が堆積したものと考えられる。

## 参考文献

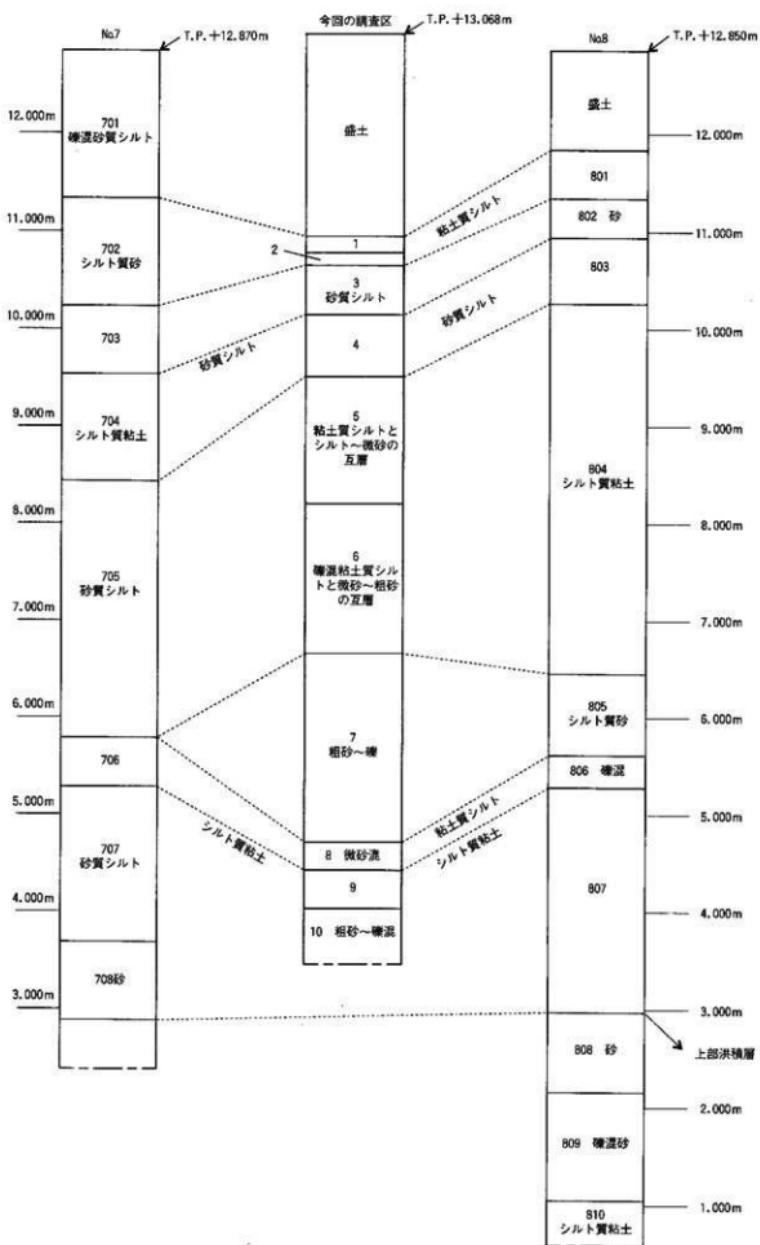
- ・山本 博 1971「竜田越」学生社
- ・山本 昭他 1976『東弓削遺跡－大阪府水道部送水管布設工事に伴う埋蔵文化財調査－』八尾市文化財調査報告3 八尾市教育委員会
- ・高萩千秋 1983「9.東弓削遺跡」『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査－その成果と概要－』八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助 1987「5.東弓削遺跡(第2次調査)」『昭和61年度事業概要報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告14 八尾市文化財調査研究会
- ・高萩千秋 2001「VI 東弓削遺跡(第11次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告71』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・中央コンサルタンツ株式会社 2000『平成10年度小阪合排水区その62委託業務 土質調査報告書』八尾市下水道部下水道建設室



第1図 調査地周辺図(S=1/2500)



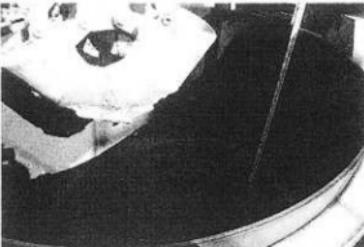
第2図 調査地位置図(S=1/500)



第3図 柱状図(S=1/50)



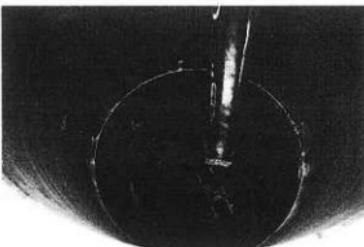
「大塚」(北東からー右側奥が調査地)



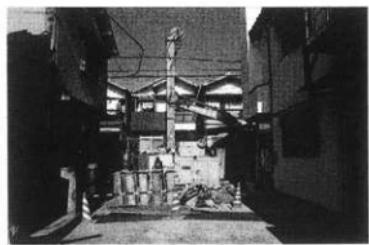
掘削状況(T.P.+11.000m付近)



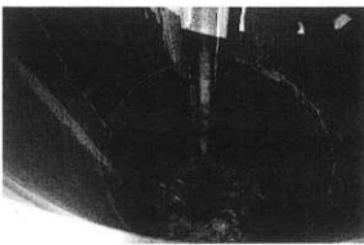
「大塚」(北西ー調査地側から)



掘削状況(T.P.+8.200m付近)



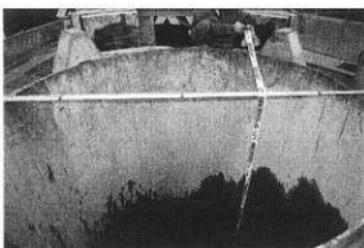
調査地周辺(南から)



掘削状況(T.P.+5.500m付近)



調査地周辺(東から)



最終掘削状況(T.P.+3.400m付近)

## 報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅかいほうこく73
書名	財團法人 八尾市文化財調査研究会報告73
著者名	I 恩智遺跡第10次調査 II 亀井遺跡第12次調査 III 中田遺跡第47次調査 IV 中田遺跡第48次調査 V 中田遺跡第49次調査 VI 東弓削遺跡第12次調査
巻次	
シリーズ名	財團法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	73
編集者名	I 桑田清一、II 墓川 薫・金親満夫、III 森本めぐみ、IV 消 痒、V・VI 成海佳子
編集機関	財團法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市半町4丁目58-2 TEL・FAX 0729-94-4700
発行年月日	西暦2002年3月31日

ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因	
おんちいせき 恩智遺跡 (第10次調査)	おおさかふやおおせんぢなか まち1ちょうめちない 大阪府八尾市恩智中町 1丁目地内	27212	-	34度36分 34秒	135度37分 47秒	20011023 ~ 20011101	20.48	公共 下水道
かわいいせき 亀井遺跡 (第12次調査)	おおさかふやおしまみなみかわ いちょう1-4ちょうめちない 大阪府八尾市南亀井町 1-4丁目地内	27212	-	34度36分 42秒	135度34分 54秒	20010618 ~ 20010621	7.5	公共 下水道
なかたいせき 中田遺跡 (第47次調査)	おおさかふやおしなかた2ちょう めちない 大阪府八尾市中田2丁 目地内	27212	-	34度36分 55秒	135度37分 08秒	20010411 ~ 20010510	77.4	公共 下水道
なかたいせき 中田遺跡 (第48次調査)	おおさかふやおしおさかべ4ちょう めちない 大阪府八尾市刑部4丁 目地内	27212	-	34度36分 32秒	135度37分 22秒	20010702 ~ 20011009	34	公共 下水道
なかたいせき 中田遺跡 (第49次調査)	おおさかふやおしおしなかた2ちょう めちない 大阪府八尾市中田2丁 目地内	27212	-	34度36分 55秒	135度37分 08秒	20010627 ~ 20010629	28.16	公共 下水道
ひがしゆげいせき 東弓削遺跡 (第12次調査)	おおさかふやおしみやこづか1 ちょうめ 大阪府八尾市都塚1丁 目	27212	-	34度36分 16秒	135度37分 37秒	20011121 ~ 20011123	4.91	公共 下水道

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層	主な遺物	特記事項
恩智遺跡 (第10次調査)	集落	弥生時代中期～中世	水成層(河川)	弥生土器・古式土師器・須恵器・瓦器	
龜井遺跡 (第12次調査)	集落	弥生時代中期～後期			
中川遺跡 (第47次調査)	集落	弥生時代後期		弥生土器	
		古墳時代前期以前	水成層(河川)		
中田遺跡 (第48次調査)	集落	弥生時代後期～古墳時代前期	土坑・溝・柱穴・流路	弥生土器・古式土師器	
		古墳時代中期～後期	土坑・溝・柱穴・杭穴	土師器	
		中世	井戸	土師器・須恵器・青磁・白磁・瓦器・瓦・砾石	
		近世・近代	井戸・溝(用水施設)・杭	陶磁器・瓦・土製品	
中田遺跡 (第49次調査)	集落	中世			
		古墳時代前期以前	水成層(河川)		
東弓削遺跡 (第12次調査)	集落	近世～近・現代	水田(作上)	陶磁器	
		中世	水田(作上)		

財団法人八尾市文化財調査研究会報告73

- I 恩智遺跡 (第10次調査)
- II 龜井遺跡 (第12次調査)
- III 中田遺跡 (第47次調査)
- IV 中山遺跡 (第48次調査)
- V 中田遺跡 (第49次調査)
- VI 東弓削遺跡 (第12次調査)

発行  
編集 平成14年3月  
財団法人八尾市文化財調査研究会  
〒581-0821  
大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2  
TEL・FAX (0729) 94-4700

印刷 株近畿印刷センター  
表紙 レザック66 <260Kg>  
本文 ニューエイジ < 70Kg>  
図版 ニューエイジ < 70Kg>

